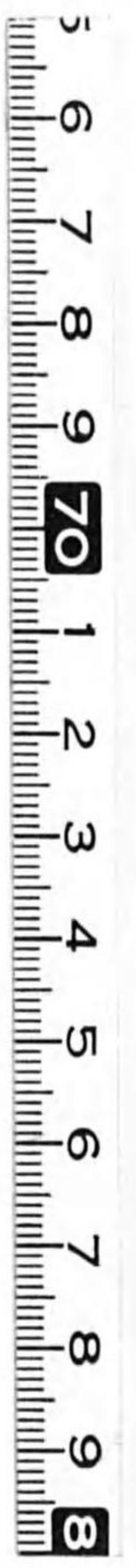


14.5

2331

14.5-2331
1200600225125



始



14.5

233

斗 3V-70

寄贈

史蹟名勝天然紀念物調査報告 第二輯

名勝 箕面山

大阪府

145
2331

昭和七年三月



箕面山

大阪府史蹟名勝
天然紀念物調査報告

第二輯



發行所寄贈本

緒言

大阪府下に於ける名勝地中最も優れ又普く世に喧傳せるものはこの箕面山なり

箕面は紅葉の名所として古くより名高く京阪人士の杖をこゝに曳くもの尠からざるのみならず瀧安寺の境内地として又箕面瀧の所在地として關西稀に見る景勝の地なり

加ふるに植物に動物に特に昆虫の寶庫として學界に於ても貴重な地區をなす

本會曩にこの山の調査を企つるや史蹟名勝天然紀念物調査會委員農學博士大屋靈城氏専らこれに執筆し爾來その實査に従ふこと年ありこゝに精密なる調査を終れり而してこれを機とし史蹟名勝天然紀念物報告書第二輯を特に「名勝箕面山」と題し上梓することとせり

昭和七年三月

大阪府史蹟名勝天然紀念物調査會委員長 蜂須賀善亮

凡 例

一、本調査は箕面山の自然的状態を明かにし併せてその古來よりの變遷を詳かにすることに努めたり

二、本調査報告中、「史蹟としての箕面山瀧安寺」は囑託岸本準二氏の手になるものにして、卷末に附記する植物目録は堀江聰男君、同昆虫目録は戸澤信義君の編纂に成るものなり

三、本調査の報告書の作成に關する諸般事務は社寺兵事課内、大阪府史蹟名勝天然紀念物調査會辻尾赤坂、鯛天書記の手を煩はせるものなり(大屋委員記)

14.5
2331

名勝箕面山目次

一、總説	一
二、名勝地としての歴史	六
三、名勝地としての開發	一三
四、名勝地としての風景	二九
五、植物分布の状態	三八
六、動物分布の状態	五〇
七、保護及開發	五八
八、史蹟としての箕面山瀧安寺	六七

附録

箕面山植物目録

箕面山昆虫目録

挿圖目次

第一圖 箕面山位置圖	一
------------	---

第二圖 夏期に於ける箕面山と大阪市内との気温比較表

第三圖 瀧安寺境内の一部

第四圖 仁和寺法親王覺性の和歌

第五圖 箕面山内老樹分布圖

第六圖 箕面山内茶店變遷圖

第七圖 箕面公園瀧壺改良工事圖

第八圖 瀧壺の改良(上)改良前(下)改良後

第九圖 高低による林相

第十圖 箕面山内楓櫟群落分布圖

第十一圖 最近發見せし「ミノオシバ」

第十二圖 名勝箕面山地籍圖

第十三圖 瀧安寺表門

第十四圖 箕面の富突

圖版目次

一般之部

圖版第一 箕面山入口(一ノ橋)

圖版第二 瀧安寺附近の風趣

圖版第三 箕面瀧(雄瀧と雌瀧)

圖版第四 瀧見橋及附近の楓櫟群生狀態

圖版第五 (一)シロバナウンゼンツツジの群生狀態
(二)ヒトツバの群生狀態

圖版第六 (一)一目千本の遠望(大日嶽頂より)
(二)常綠潤葉樹の密林

圖版第七 (一)アヲネカヅラの自生狀態
(二)コタニワタリの自生狀態

圖版第八 (上)瀧安寺全景
(下)瀧安寺伽藍圖

圖版第九 (一)赤松則村書狀
(二)護良親王令旨

圖版第一〇 (上)右馬寮下文
(下)荒木村重禁制

圖版第一一 (一)箕面山秘密緣起の一部
(二)如意輪觀音像

植物之部

- 圖版第一 ヒメヒゴタイ、ハグロサウ、アラホホヅキ、シロバナウンゼンツツジ
圖版第二 クサアヂサキ、ウラジロウツギ、ツルタガラシ、ウチフラン、
圖版第三 ヤマヂノホトトギス、ヤブメウガ、シラスゲ、アヅマガヤ
圖版第四 オホハナワラビ、ハコネサウ、シウイメギク、サイコクベニシダ

昆虫之部

圖版第一 オオシモフリズズメ、シンジユサン

圖版第二 エゾヨツメ、クロウスタビ、イボタガ、ヒメヤママイ

圖版第三 オオウラギンヘウモン、オオムラサキ、オオミドリシジミ、ダイセンシジミ、ウラ
キンシジミ、テングテウ

圖版第四 ラジロサナヘトンボ、ネキトンボ、マイコアカネ、タカネトンボ、ミルンヤンマ、
コシボソヤンマ、クロスデギンヤンマ

圖版第五 ニトベエダシヤク、ナカジロトガリバ、ビロウドハマキ、ゴマフオオホソバ、クロ
ミスチエダシヤク、クロフシロヒトリ、オニベニシタバ

圖版第六 セナガクロオサムシ、ヒゲユメツキ、スズキカミキリ、スズキヒゲナガカミキリ、
アカスチキンカメムシ、ヒメマイマイカブリ、ヒゲコメツキ、ムラサキトビケラ

圖版第七 セアカハバチモドキ、アカアシセナガアナバチ、ネジロハギリハチ、クロフヲナガ
バチ、ナカノヒメバチ、マダラベッコウ、エゾヲナガバチ、オオヒゲナガハナアブ
ヨウロウアシブトハバチ、トモンハナバチ

14.5
2331

大阪府史蹟名勝天然紀念物調査報告

第二輯



箕面山

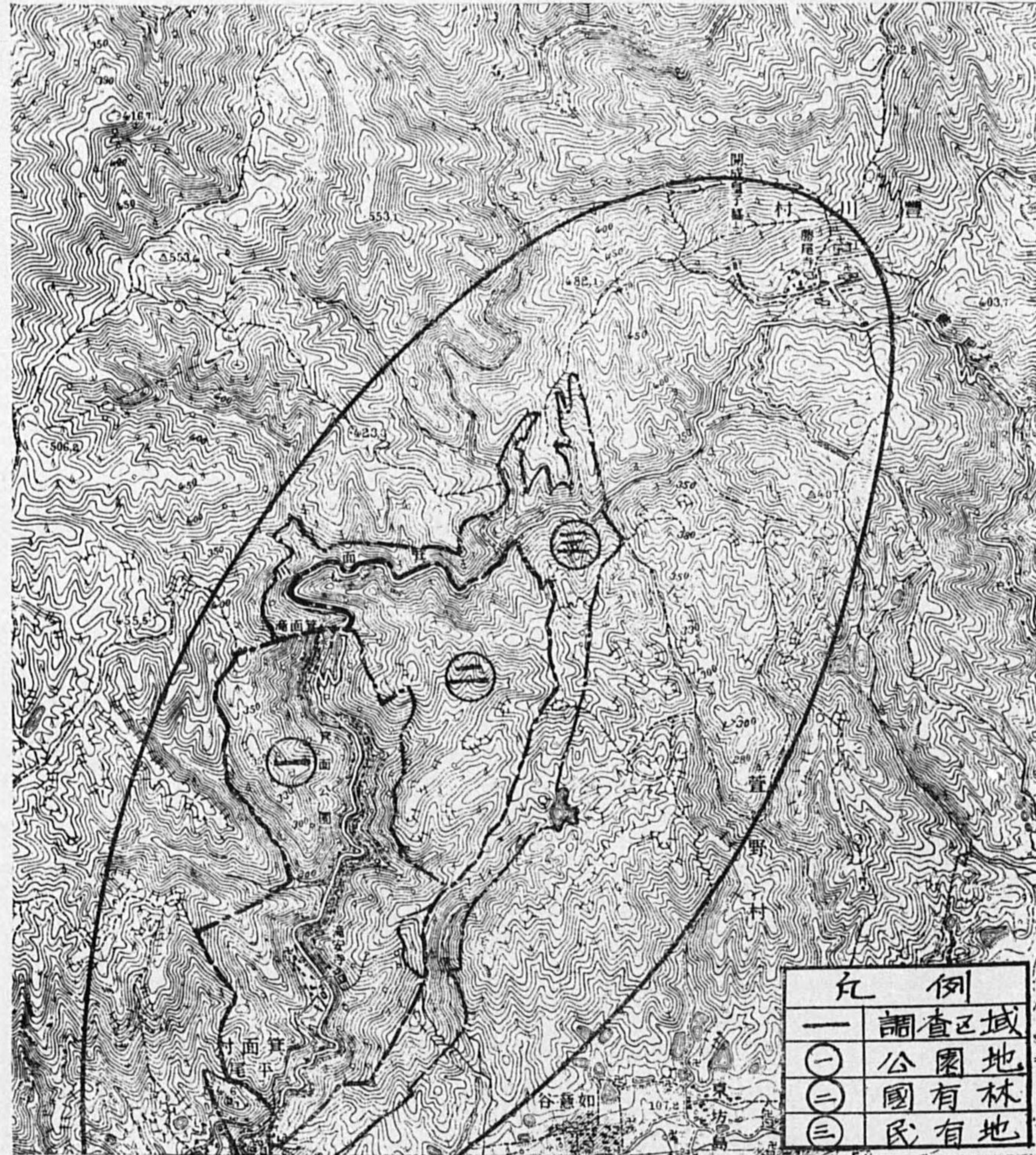
總 說

(イ)位置 名勝地箕面山は大阪府豊能郡箕面村にあるも其の一部東方は萱野村に跨る 大阪市の中心を去ること北に凡そ五里、西は六箇山(海拔三九五米)に連り、北は鉢伏山(六〇三米)、

石堂ヶ岡(六八〇米)等に對峙し、妙見山(六六二米)、鴻鷹山(六七八米)、半國山(七七四米)等に依り遠く丹波の山々と連り、次第に北に進むに従ひ高峯重疊す 東は如意ヶ谷によりて三島河北の平原に展開して東南に生駒山(六四二米)、東北に比叡山(八四八米)を遠望するを得 南は待兼山、刀根山の小丘を指顧の間に俯瞰し遙かに神崎川、武庫川の注ぐ大阪灣の海岸線を隔て、所謂茅海の白帆を煙波渺茫の中に望見す

(ロ)交通 大阪市大阪驛に東接する阪神急行電鐵の梅田停留所より電車によるを最も便利とす 同線寶塚行にて(石橋乗換)箕面終點まで約三十五分を要す それより府道勝尾寺箕面線を徒歩にて約三丁箕面山入口(一ノ橋)に達す これより公園内を縦走する同線を行くと約二十丁にして箕面山の中心たる箕面瀧に至る 此の間の道は箕面川の溪流に沿ふも

箕面山位置圖



(照 參 面 裏)

第一圖 箕面山位置圖

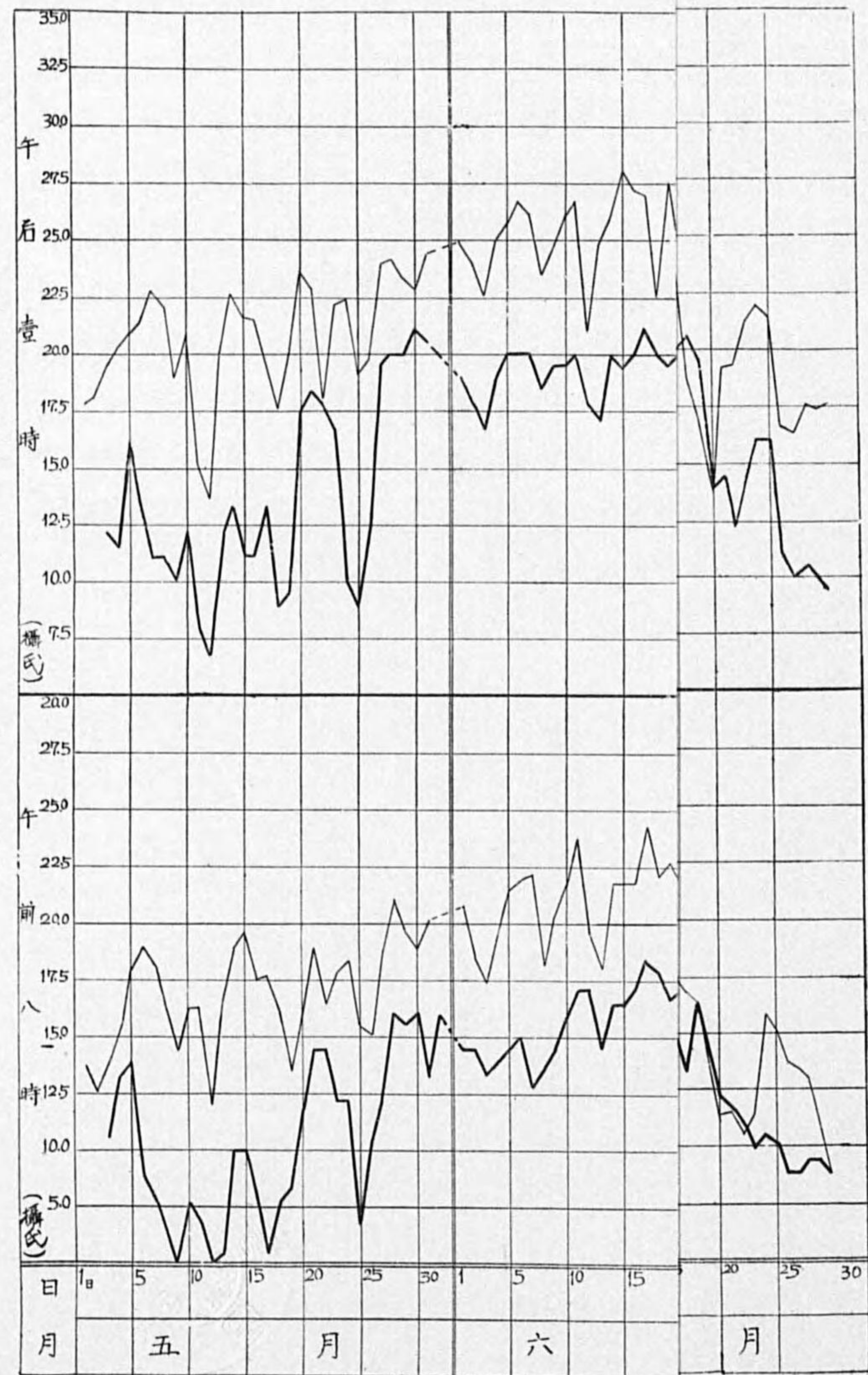
路幅狭く勾配急なる箇所あるを以て自動車を馳する能はず、漸く人力車を通ず。遊覽探勝の客は多く徒歩による。路は或は溪間にあり或は峯づたいにありて縦横に走り延長約五千餘間山頂にも廻遊道路開設せられ登山者の便多し。

大阪市より放射する十大路線の一なる大阪池田線(幅員十三間乃至十五間)十三橋より北に服部を経て豊中に進み(此間幅員八間)、此所より分岐して箕面山麓まで大阪箕面線(幅員四間)として延長され昭和七年には現代都市の郊外ドライブウェイとして相應はしき舗装道路の完成を見るを以て、近き將來に於ては電車によらず自動車により約二十分を以て大阪市の中心よりこの箕面山に遊ぶを得べし。尙昭和七年度より着手豫定なる箕面山遊覽自動車道(幅員參間)の計畫決定せば、數年後に於ては箕面瀧の上方約二丁杉の茶屋迄登山自動車によりこの山の景勝を探るを得べき見込みなり。

(ハ)面積 名勝地として指定を受けんとする箕面山の總面積は六〇九八七六坪にして、内二五六一五二坪は大阪府立公園、二六二、九六二坪は國有林、三、四二八坪は瀧安寺境内地、其他七七、三四五坪は民有林なり(僅少の宅地を含む)尙俗に箕面山と稱するはその中央部に位する箕面公園地附近一帯の山にして、西北に擴がる國有林を併せ凡そ一百万坪の廣袤たる山林を指す。

(ニ)氣候風土 箕面山は山深く且谷長きを以て温度概して低く、夏期は大阪に比し冷涼にして温度の差は平均攝氏五度乃至七度なり。冬期は早くより霜を見るを以て朝夕寒冷を覺ゆ。

第二圖 夏期に於ける箕面山と大阪市内との気温比較表



外に國有林 (假指定ヲ見合セタル分)

二六二、九六二

同 瀧安寺境内

三、四二八

同 公園

二五六、一五二

同 宅地

六、七八七

箕面村山林

二七、二八三

同 池

三、五二〇

萱野村山林

四九、七四四

總面積 (假指定ノ分)

三四六、九一四坪

ること大阪の比に非ずと雖も、谷間に點在する家屋は殆ど寒風に襲はるゝことなきを以て寒さを凌ぐには易し。概して山中は水分多く濕氣あるを以て草木の繁茂に適し、氣候の調節よく行はるゝにより住居にも適す。

土質は岩石の崩壊と植物の腐植よりなる礫質壤土にして排水良好なるを以て泥濘を呈することなく、路面又樹蔭多きを以て塵埃を飛ばすこと稀なれば、概して空氣新鮮にして清澄逍遙するに適好なり。特に夏期は溪間にありては太陽の直射を遮り清流に近く、綠梢枝を交ゆるを以て冷涼喫すべく、納涼避暑地として大阪近郊稀に見る自然的要素を備う。今参考の爲夏期に於て測定せる温度を大阪市内と對比して列記せば次の如し。

夏期に於ける箕面山と大阪市内との氣温比較表 (單位攝氏) 自昭和六年五月一日 至同拾月三拾一日

種別 時間	各月		平均		氣温最大差		氣温最小差		最高氣温				
	午前八時	午後八時	午前八時	午後一時	午前八時	午後一時	午前八時	午後一時	午前八時	午後一時			
目次	箕面山	大阪市内	箕面山	大阪市内	箕面山	大阪市内	箕面山	大阪市内	箕面山	大阪市内			
5	10.20	16.85	6.65	13.25	20.47	7.22	12.20	10.40	0.90	16.10	21.10	21.10	24.30
6	17.02	21.98	4.96	20.08	25.84	5.76	9.60	8.70	4.50	21.10	26.00	23.40	28.60
7	19.10	23.43	4.33	17.90	26.33	8.43	10.70	10.00	0.60	21.70	28.00	21.70	30.30
8	22.52	27.65	5.13	24.66	31.26	6.60	7.70	12.30	—	24.00	30.00	26.80	34.80
9	20.14	23.68	3.54	22.20	24.09	1.89	8.80	8.90	5.20	23.40	29.40	25.60	31.80
10	14.13	15.63	1.50	15.86	20.55	4.69	5.20	9.20	—	19.50	21.80	20.60	26.20

(二) 來歴 箕面山はもと役の小角この山を開くと傳へらるゝにより考ふれば、遠く一千三百年

の歴史を有するものと看做さるゝが名勝箕面山としての歴史は慶長年間の寺院再築以後漸次人のここに杖を曳くもの増加してその瀧と楓櫨に彩られたる溪流の景色が中心となりて世に顯はれ初めたるものと推定さる 中央部の一帯は明治三十一年以來大阪府の公園となり他は瀧安寺境内及瀧安寺保管林となりて今日に及び附近一帯は禁獵區に指定せらる

前面の民有林(西南部)には明治四十三年の頃阪急電鐵こゝに動物園を設けて遊覽客を山頂に導きしが其の後大正四年に至りこれを廢し爾來岸本兼太郎氏の別墅となる

(ホ) **主なる建物** 古くより瀧安寺の境内地として開山されしを以て寺院建築多く昔は八十餘寺を列ねたりしも兵火に罹りて焼失し現存するものは瀧安寺境内四千三百二十八坪内に散在する觀音堂不動堂本堂書院鳳凰閣等あるのみ

其他日本最古の歡喜天として呼ばるゝ聖天宮歡喜天はこの山の入口右手なる高臺に鎮座す堂宇は大ならざるも參詣人尠からず

公園内建設物としては無料休憩所九ヶ所有料休憩所一ヶ所(梅屋敷)料亭(旅館を兼ねるもの多し)十ヶ所旅館十一ヶ所茶店三ヶ所便所八ヶ所橋梁十五ヶ所噴水二ヶ所銅像(森秀次氏)一基等あり 旅館料亭茶店の主なるものを舉れば琴乃屋丸屋一方亭豊田屋菊水山水樓加古川吉田屋紅葉樓植福片山桃太郎くれない初音枕流亭錦瀧庵南川笹家山口藤本等なり

(ハ) **特徴** 名勝地として箕面山の優れたる點は



第三圖 瀧安寺境内の一部

- (一) 地層古くして奇岩に富み所々その露出を見ること
- (二) 水清く而も四時涸渇することなく時に瀑布をなし又時に溪流となり迂曲極まりなく岩石の間をくぐり時に淵をなし又瀬を作りて多くの小魚を遊ばせ又夏期河鹿を育成して美聲を發せしむること
- (三) 瀧壺には數多の大鰻棲息し高梢には野猿の群り來るを觀キジヤマドリ如き鳥類の多く棲むこと
- (四) 無數の昆虫この林間に棲息しその種類の多きこと他に殆ど類例なし
- (五) 植物の生育良好にして珍種に富み喬木はよく亭々として聳へ灌木はその下に密生して通路を塞ぎその種類多く特に楓櫨類にありては古木群をなし延長二

- 十餘町に及ぶ溪谷の兩岸の殆ど全部を蔽ひ盡し山の中腹に及ぶこと
 (六) 山上の一帶は赤松の純林よりなり、中間は檜椎谷間には時々杉、檜の群生ありて特殊の景觀を呈すること
 (七) 風景の變化に富み幽邃なる溪谷あると共に、又一方廣濶なる展望地を多く有すること
 (八) 史跡に富み伽藍の介在宜しきを得、遊覽の施設も備はれること
 (九) 附近の俗界より全く遮斷されて仙境をなすこと
 (十) 大都市より比較的近郊に位し容易に到達しうる交通の便備はれること等

二 名勝地としての歴史

箕面山の史實に就ては文献の信賴すべきもの多からざると余の研究未だ十分ならざる爲その何時の頃より如何なる經過によりて開發せられたるかを明かにすること難しとするも元享釋書等によれば、山はもと白雉年間の創建に係り、役ノ小角(優波塞)の開基なりと謂ふを以て、若しこれを眞なりとすれば實に今を去る一千二百八十餘年の昔にありと云ふべし

もと箕面瀧附近にも幾多の諸伽藍點在せしよしなるが、兵燹に罹りて焼失し、爾來荒廢し次第に滅滅するの悲運に至りしものなりと云ふ

慶長の頃に至りて今の瀧安寺の所在地へ移轉改築され、瀧附近のものは殆んど廢墟となる

箕面瀧に就ての記録も相當に古く、信長記に「おなじく二十日(天正七年三月)に信長公箕面の瀧御見物として出させ給ひ終日鷹がりなどし給ひけるが、民屋に立ち入り給ひてそのころの安否をしるしつけられ、給人代官の邪正しなく、其の事となく聞き給ひけり云々」とあるを見るも、又一方天正年中織田信長の爲めに焼かれ、堂宇古記録の殆んど烏有に歸したりとの記録等あるより推しても、既に天正の頃この箕面山に將軍の足跡を印したることあるを窺ひ知らる

其の頃までは箕面山は箕面の字を用ひず、箕尾又は箕尾の字を用ひたるが如く、箕尾、箕尾等書きたる記録を明月記等にも認む

箕面はこれのみのもと讀ますみのおと讀みしことは古歌を見るも明かなり。例へば瀧安寺寶物中に殘る仁和寺後入道法親王覺性の

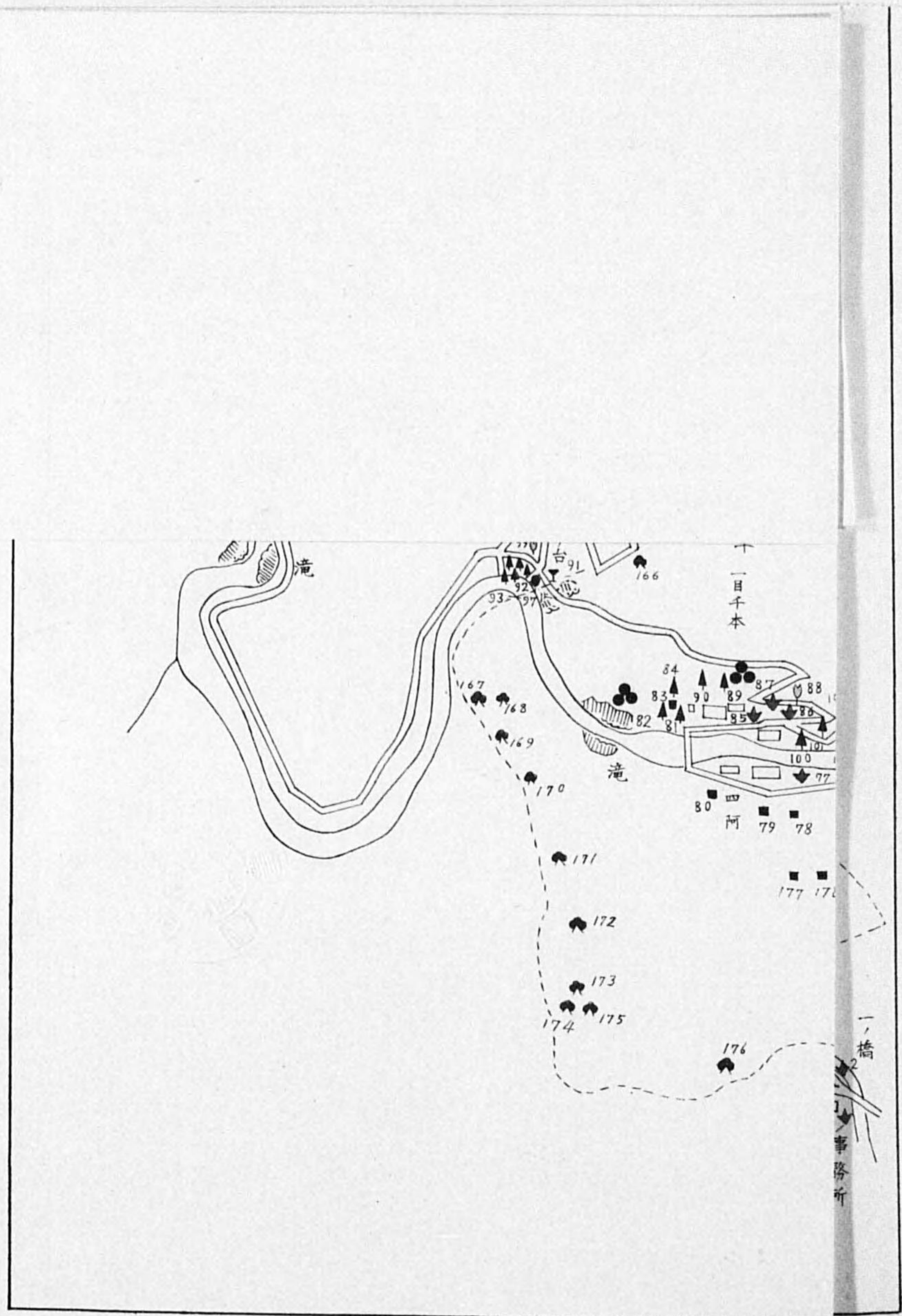
木の間もる有明の月のおくらすば獨や山の峯を出てまし

の和歌の首題に

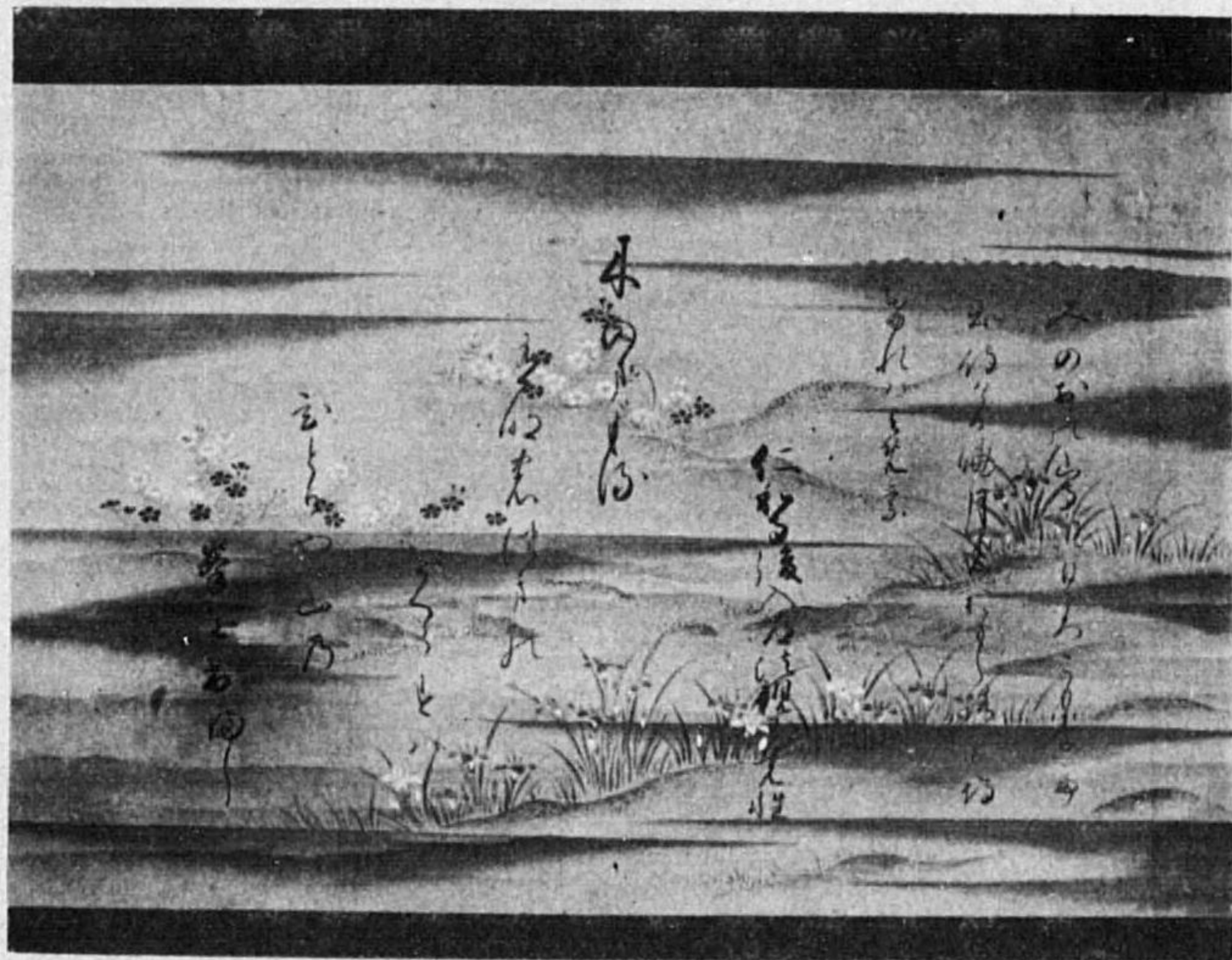
みのおの山寺に日ころこもりて出侍ける曉月のおもしろく侍ければよめる

とあるもその一例なり(挿圖第二圖参照)

次に箕面山が紅葉の名所として世に喧傳さるゝに至りし起源を探るに、果して何時の頃よりなるかを確むるは難きも、徳川の中期既にこの附近大木の林立せることは僧獨麟(寛保元年寂、享年六十五)の詩に古木一千年とあるより推すも難からず



近の樹木が焼失され又損傷されたるによるものならんも、又一つは箕面山の紅葉の歴史が左



仁和寺法親王覺性の和歌 第四圖

蕭寺箕山裡清幽世聽傳飛流三百尺古木
 一千年攀磴禮天女盾雲相役儼猶應巢許
 輩避迹在嵐烟 僧獨麟

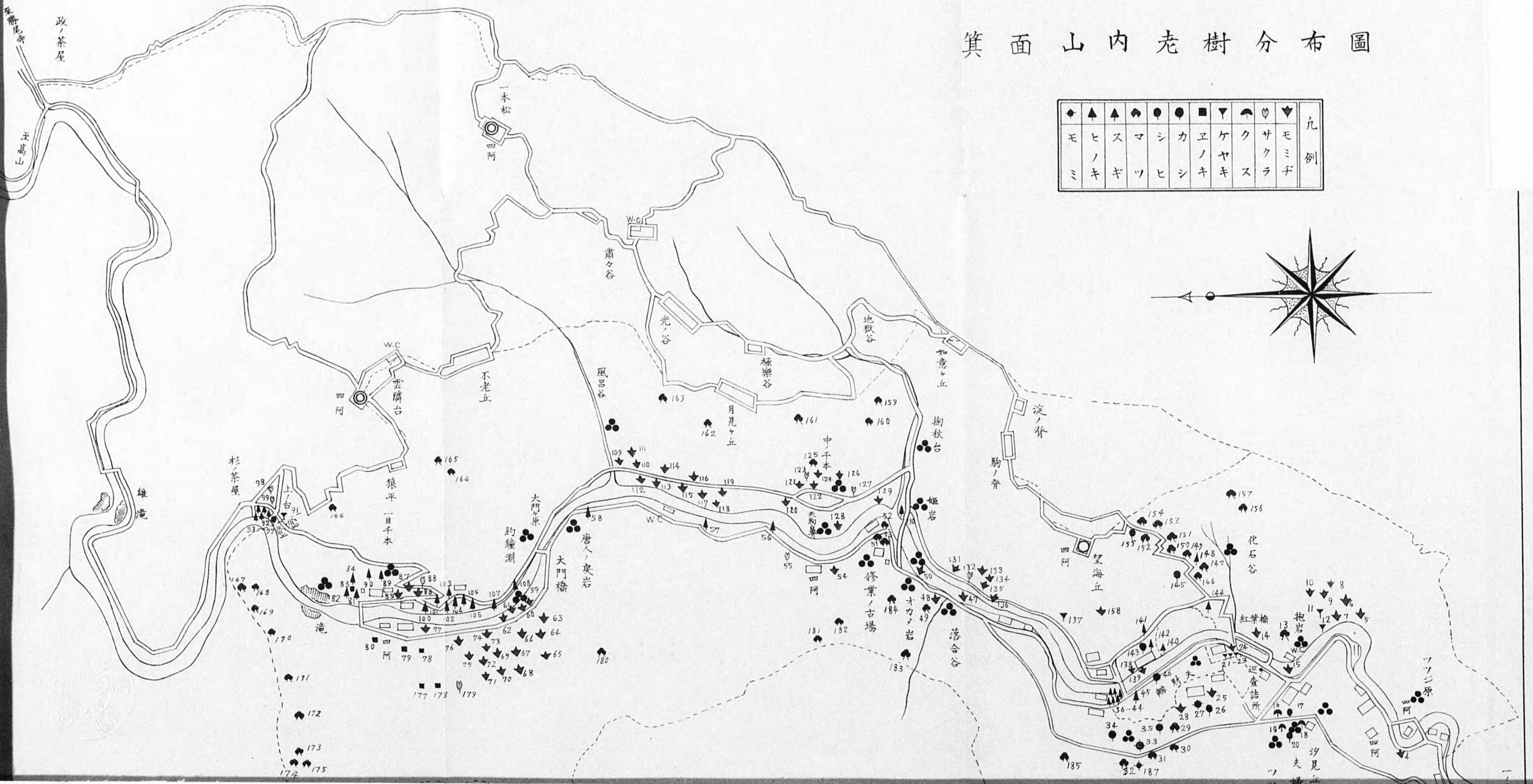
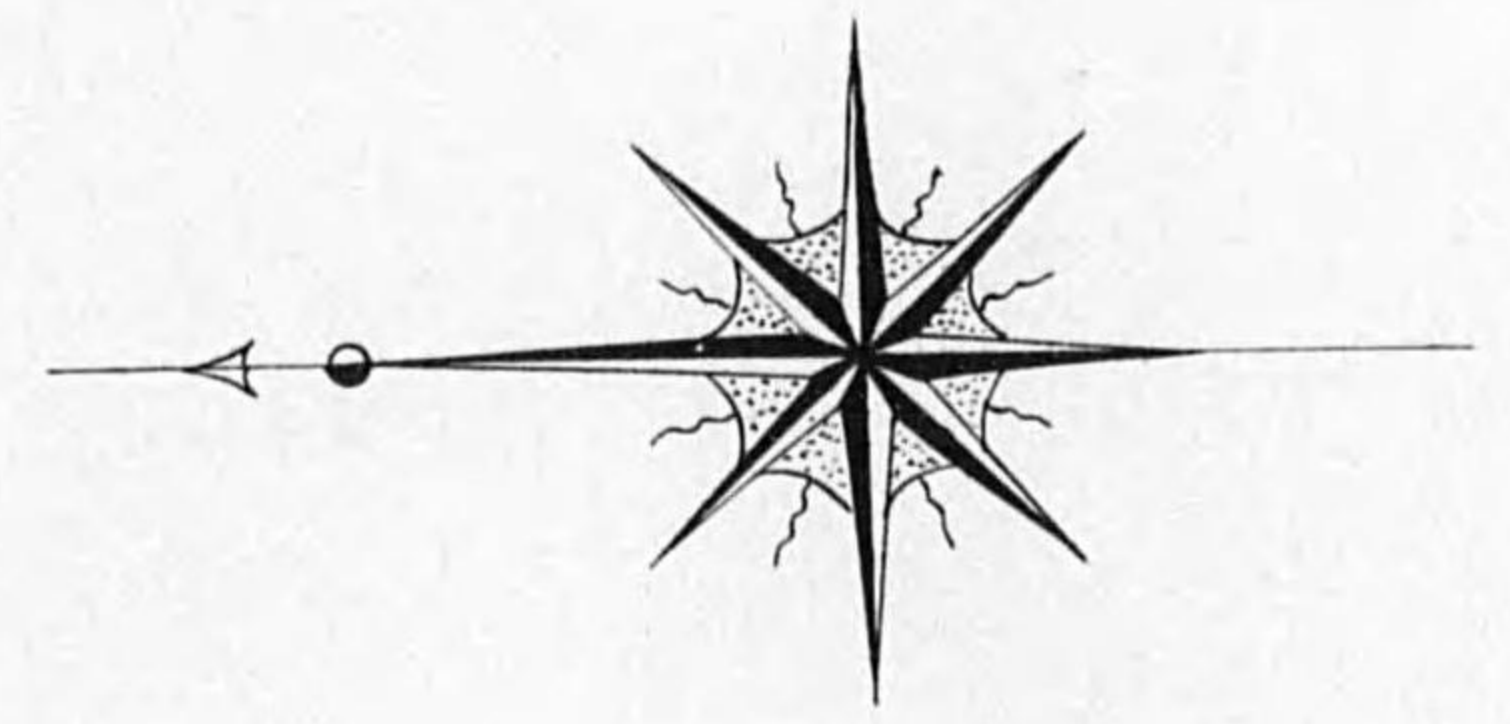
而もこの古木なるものが果して松柏なりしか楓槭なりしかはこの詩に詳かならずとするもその以前既に岡田生春(元祿年間住京都)が

不辭霜露重携友上箕山紅葉映雲外青松
 拔俗間行樹飛泉潔忽忘世途難堪羨豪英
 士投身一日閑

なる一詩を吟せしより推せば箕面山に今を去る二百餘年の昔なる元祿の頃既に紅葉の雲外に映ゆるものありし事を窺ひ知らる然れども現今の箕面山に五百年を超ゆる如き老樹古木の點在すること稀なるは、一つは嘉祿年間の回祿天正年間の兵燹等に遭ひ又文祿五年に震火災に罹りたる爲その都度附

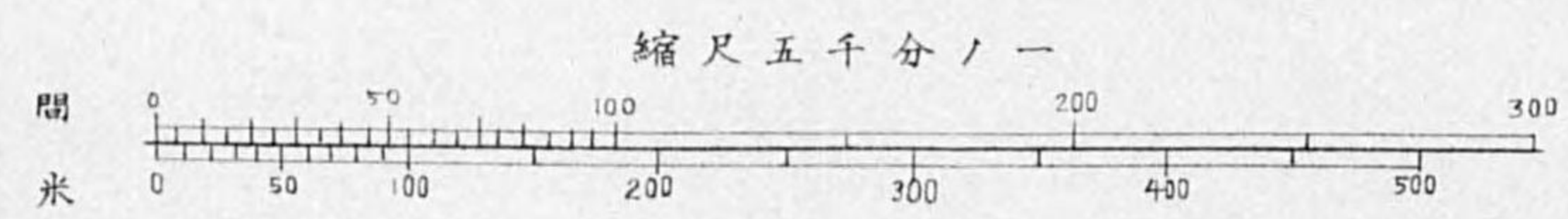
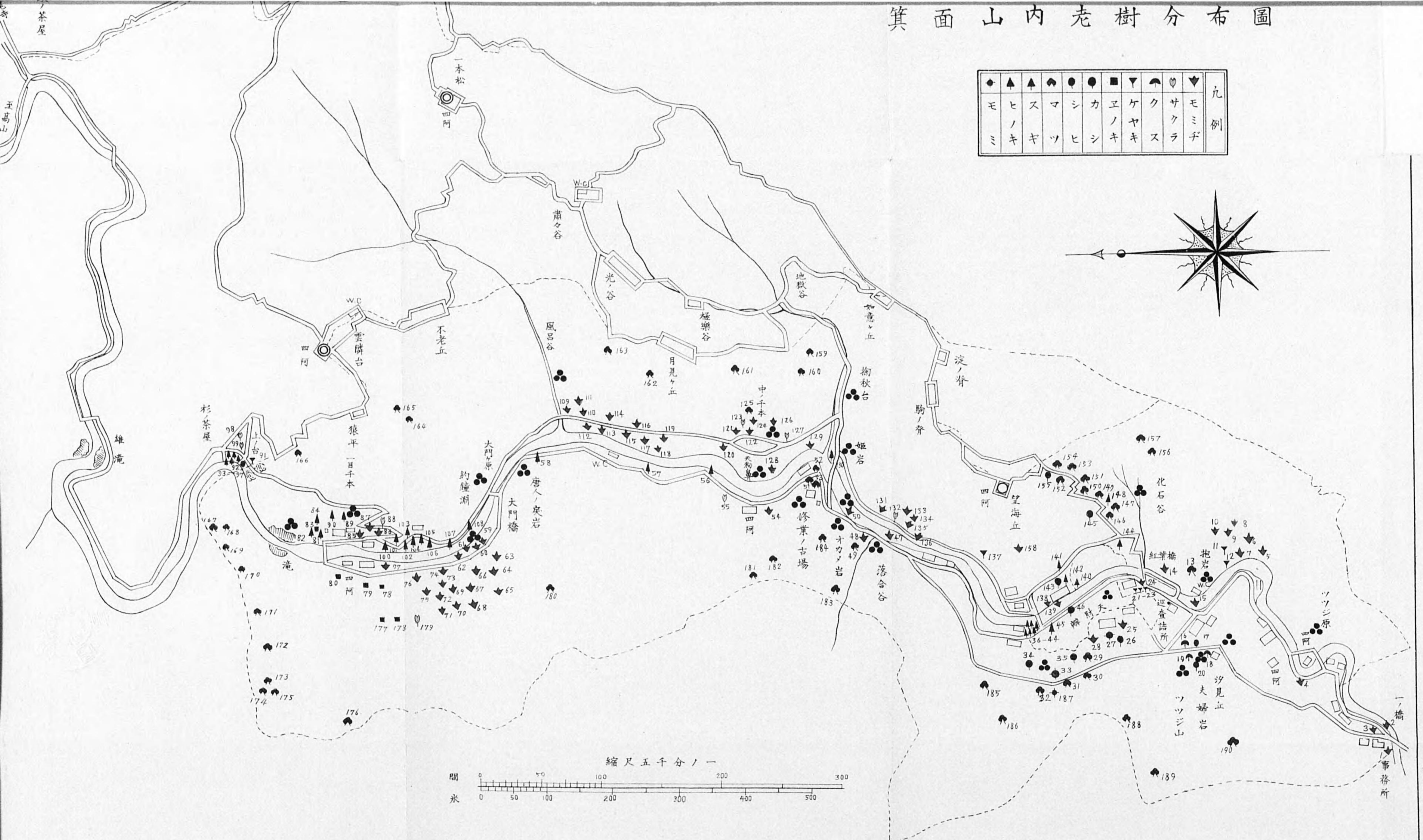
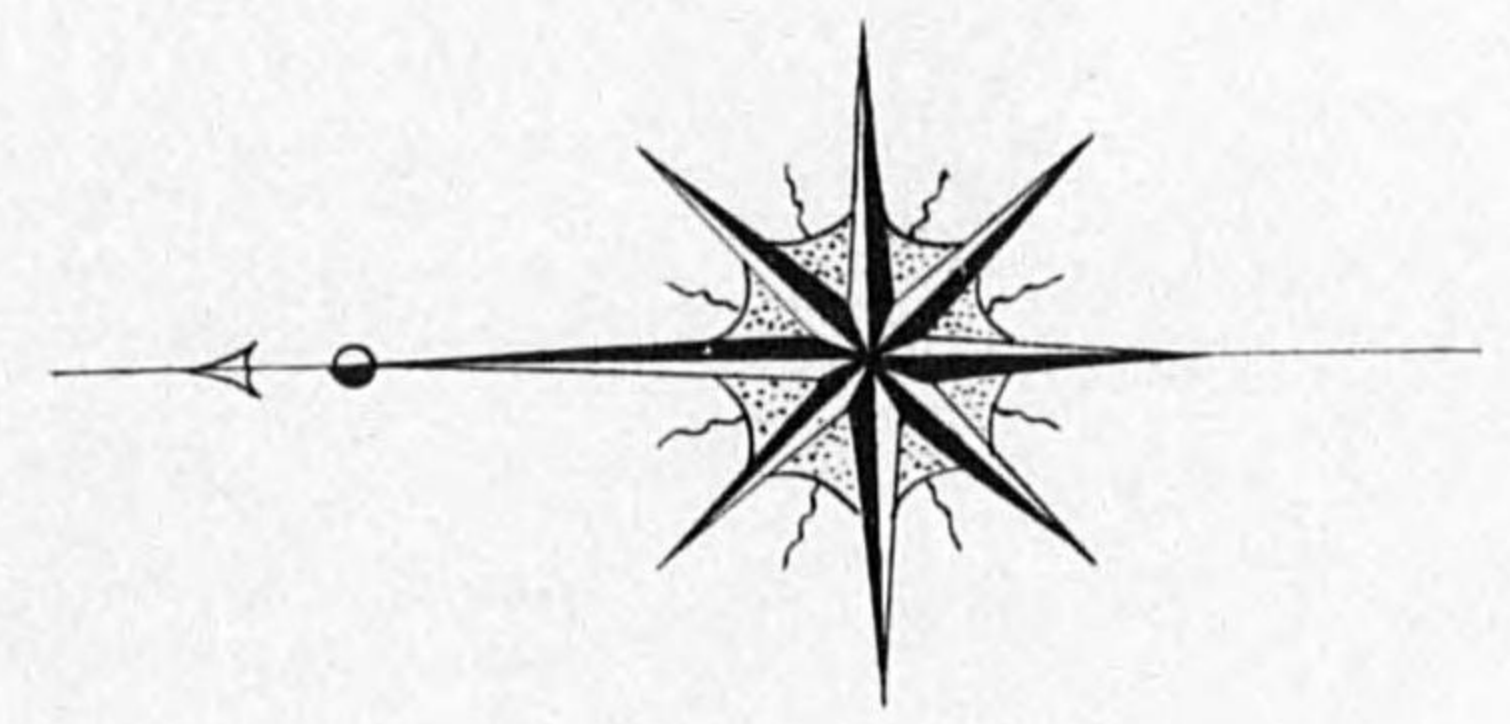
箕面山内老樹分布圖

◆	▲	▲	●	●	■	▼	●	●	▼	九
モ	ヒ	ス	マ	シ	カ	エ	ケ	ク	サ	モ
ミ	キ	ギ	ツ	ヒ	シ	ノ	ヤ	ス	ク	ミ
										チ



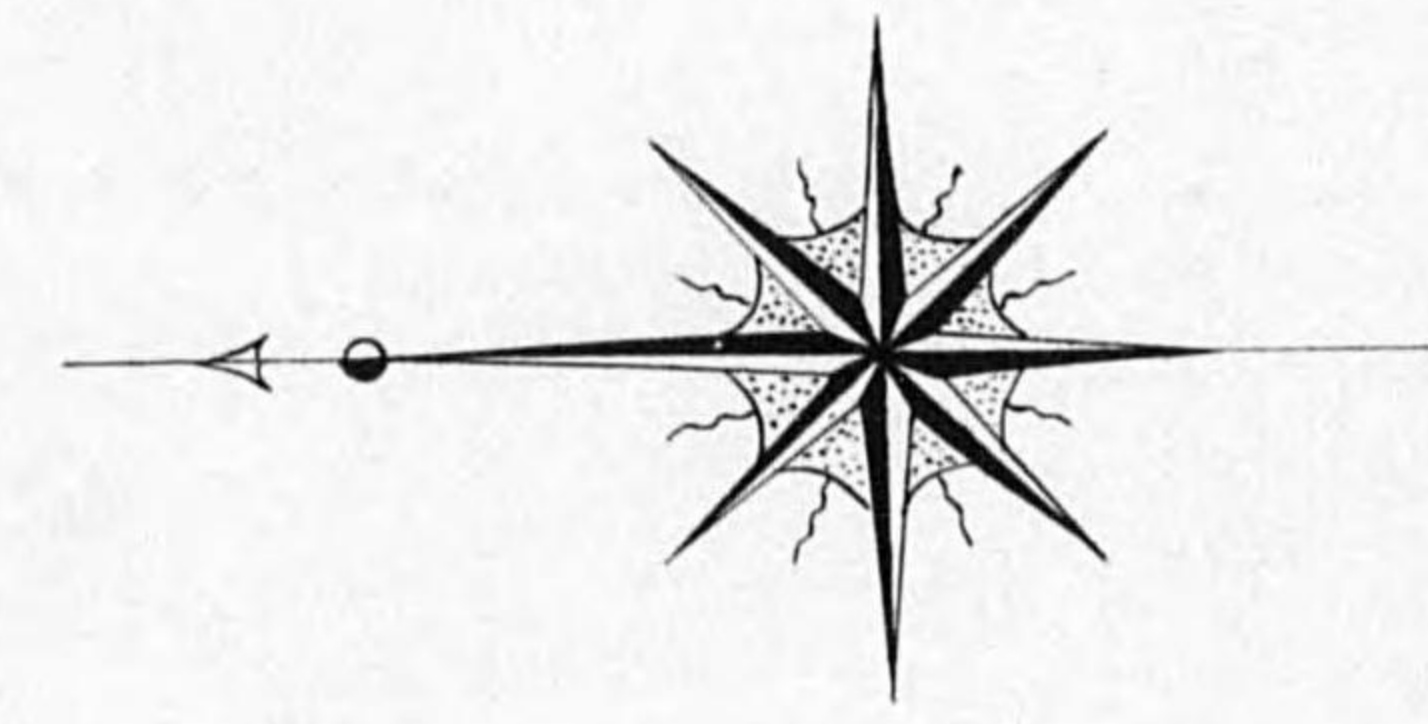
箕面山内老樹分布圖

◆	▲	▲	●	●	■	▼	▼	▼	▼	九
モ	ヒ	ス	マ	シ	カ	エ	ケ	ク	サ	モ
ミ	キ	ギ	ツ	ヒ	シ	ノ	ヤ	ク	ク	ミ
						キ	ス	ラ	チ	例

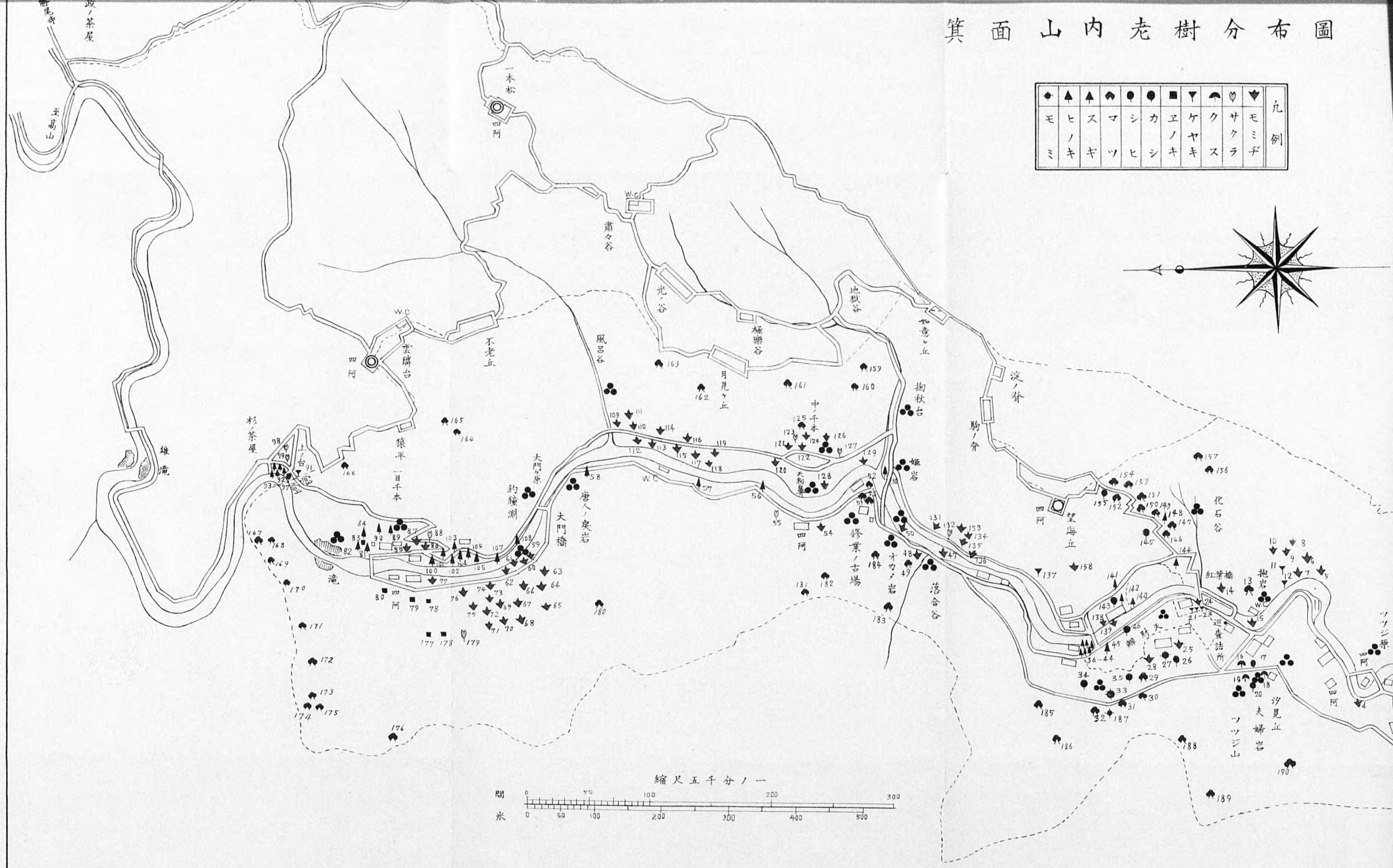


箕面山内老樹分布圖

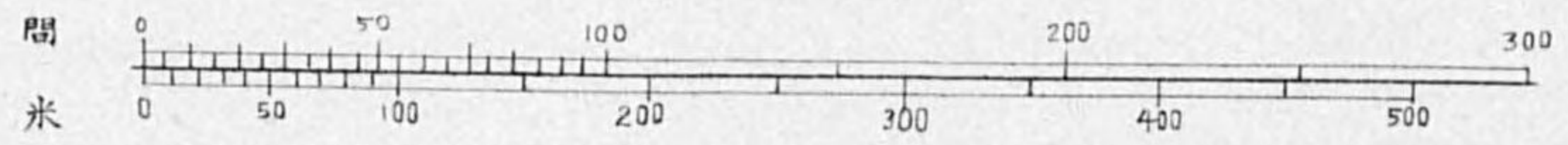
◆	▲	▲	●	●	■	▼	▼	▼	▼	九
モ	ヒ	ス	マ	シ	カ	エ	ケ	ク	サ	モ
ミ	ノ	ギ	ツ	ヒ	シ	ノ	ヤ	ク	ク	ミ
	キ					キ	キ	ス	ラ	チ



第五圖 箕面山内老樹分布圖



縮尺五千分の一



程に古き時代に遡り居らざることゝを證するものと考へらる。今參考の爲現存する古木中幹の直徑五十種以上地上四尺のものゝ分布並に寸法を擧ぐれば次の如し

箕面公園内大木(目通幹直徑)

1.	モミヅナ	{ 52 } 56	54.	14.	モミヅナ	{ 50 } 54	52.	27.	モミ	{ 58 } 64	61.	40.	スギ	{ 58 } 58	58.
2.	モミヅナ	{ 49 } 51	50.	15.	モミヅナ	{ 60 } 110	88.	28.	モミヅナ	{ 50 } 60	55.	41.	スギ	{ 66 } 72	69.
3.	モミヅナ	{ 52 } 54	53.	16.	クス	{ 72 } 76	74.	29.	ツツ	{ 60 } 64	62.	42.	スギ	{ 64 } 66	65.
4.	モミヅナ	{ 51 } 53	52.	17.	ツツ	{ 100 } 110	105.	30.	ツツ	{ 76 } 78	77.	43.	スギ	{ 64 } 68	66.
5.	モミヅナ	{ 60 } 86	73.	18.	クス	{ 58 } 60	59.	31.	ツツ	{ 54 } 60	57.	44.	スギ	{ 62 } 66	64.
6.	モミヅナ	{ 44 } 74	59.	19.	クス	{ 82 } 82	81.	32.	ツツ	{ 76 } 82	79.	45.	スギ	{ 76 } 78	77.
7.	モミヅナ	{ 48 } 54	51.	20.	ツツ	{ 74 } 76	75.	33.	モミ	{ 68 } 70	69.	46.	カシ	{ 58 } 60	59.
8.	モミヅナ	{ 54 } 88	71.	21.	ケヤキ	{ 62 } 72	67.	34.	カシ	{ 56 } 60	58.	47.	モミヅナ	{ 54 } 72	66.
9.	モミヅナ	{ 50 } 52	51.	22.	ケヤキ	{ 54 } 64	59.	35.	カシ	{ 72 } 110	91.	48.	モミヅナ	{ 51 } 53	52.
10.	モミヅナ	{ 56 } 62	59.	23.	ケヤキ	{ 48 } 54	51.	36.	スギ	{ 72 } 76	74.	49.	ツツ	{ 80 } 86	83.
11.	ケヤキ	{ 56 } 62	59.	24.	モミヅナ	{ 58 } 60	59.	37.	スギ	{ 70 } 88	79.	50.	モミヅナ	{ 50 } 56	53.
12.	ケヤキ	{ 52 } 64	58.	25.	モミ	{ 64 } 70	67.	38.	スギ	{ 62 } 62	62.	51.	ツツ	{ 64 } 64	64.
13.	ツツ	{ 51 } 62	58.	26.	カシ	{ 60 } 64	62.	39.	スギ	{ 62 } 64	63.	52.	ツツ	{ 64 } 66	65.

53.	ㄱ	ㅈ	$\begin{Bmatrix} 60 \\ 68 \end{Bmatrix}$	cm	64.	cm
54.	ㅅ	ㅈ	$\begin{Bmatrix} 44 \\ 58 \end{Bmatrix}$		51.	
55.	ㅅ	ㅊ	$\begin{Bmatrix} 62 \\ 76 \end{Bmatrix}$		68.	
56.	ㅅ	ㅋ	$\begin{Bmatrix} 58 \\ 62 \end{Bmatrix}$		60.	
57.	ㅅ	ㆁ	$\begin{Bmatrix} 70 \\ 72 \end{Bmatrix}$		71.	
58.	ㅅ	ㆁ	$\begin{Bmatrix} 60 \\ 92 \end{Bmatrix}$		76.	
59.	ㅅ	ㅈ	$\begin{Bmatrix} 52 \\ 72 \end{Bmatrix}$		62.	
60.	ㅅ	ㅈ	$\begin{Bmatrix} 56 \\ 70 \end{Bmatrix}$		63.	
61.	ㅅ	ㅈ	$\begin{Bmatrix} 54 \\ 64 \end{Bmatrix}$		57.	
62.	ㅅ	ㅈ	$\begin{Bmatrix} 56 \\ 56 \end{Bmatrix}$		56.	
63.	ㅅ	ㅈ	$\begin{Bmatrix} 56 \\ 92 \end{Bmatrix}$		74.	
64.	ㅅ	ㅈ	$\begin{Bmatrix} 74 \\ 76 \end{Bmatrix}$		75.	
65.	ㅅ	ㅈ	$\begin{Bmatrix} 72 \\ 82 \end{Bmatrix}$		77.	
66.	ㅅ	ㅈ	$\begin{Bmatrix} 60 \\ 76 \end{Bmatrix}$		68.	
67.	ㅅ	ㅈ	$\begin{Bmatrix} 66 \\ 74 \end{Bmatrix}$		70.	
68.	ㅅ	ㅈ	$\begin{Bmatrix} 126 \\ 130 \end{Bmatrix}$		128.	
69.	ㅅ	ㅈ	$\begin{Bmatrix} 50 \\ 60 \end{Bmatrix}$	cm	55.	cm
70.	ㅅ	ㅈ	$\begin{Bmatrix} 50 \\ 54 \end{Bmatrix}$		52.	
71.	ㅅ	ㅈ	$\begin{Bmatrix} 120 \\ 130 \end{Bmatrix}$		125.	
72.	ㅅ	ㅈ	$\begin{Bmatrix} 84 \\ 100 \end{Bmatrix}$		92.	
73.	ㅅ	ㅈ	$\begin{Bmatrix} 68 \\ 110 \end{Bmatrix}$		98.	
74.	ㅅ	ㅈ	$\begin{Bmatrix} 60 \\ 100 \end{Bmatrix}$		80.	
75.	ㅅ	ㅈ	$\begin{Bmatrix} 54 \\ 60 \end{Bmatrix}$		57.	
76.	ㅅ	ㅈ	$\begin{Bmatrix} 50 \\ 60 \end{Bmatrix}$		55.	
77.	ㅅ	ㅈ	$\begin{Bmatrix} 54 \\ 60 \end{Bmatrix}$		57.	
78.	ㅅ	ㆁ	$\begin{Bmatrix} 92 \\ 140 \end{Bmatrix}$		116.	
79.	ㅅ	ㆁ	$\begin{Bmatrix} 48 \\ 54 \end{Bmatrix}$		51.	
80.	ㅅ	ㆁ	$\begin{Bmatrix} 72 \\ 74 \end{Bmatrix}$		73.	
81.	ㅅ	ㆁ	$\begin{Bmatrix} 80 \\ 88 \end{Bmatrix}$		84.	
82.	ㅅ	ㆁ	$\begin{Bmatrix} 62 \\ 62 \end{Bmatrix}$		62.	
83.	ㅅ	ㆁ	$\begin{Bmatrix} 76 \\ 116 \end{Bmatrix}$		98.	
84.	ㅅ	ㆁ	$\begin{Bmatrix} 58 \\ 62 \end{Bmatrix}$		60.	
85.	ㅅ	ㅈ	$\begin{Bmatrix} 55 \\ 55 \end{Bmatrix}$	cm	55.	cm
86.	ㅅ	ㅈ	$\begin{Bmatrix} 70 \\ 94 \end{Bmatrix}$		82.	
87.	ㅅ	ㅈ	$\begin{Bmatrix} 48 \\ 52 \end{Bmatrix}$		50.	
88.	ㅅ	ㅊ	$\begin{Bmatrix} 58 \\ 58 \end{Bmatrix}$		58.	
89.	ㅅ	ㅋ	$\begin{Bmatrix} 68 \\ 76 \end{Bmatrix}$		72.	
90.	ㅅ	ㆁ	$\begin{Bmatrix} 56 \\ 60 \end{Bmatrix}$		58.	
91.	ㅅ	ㆁ	$\begin{Bmatrix} 66 \\ 76 \end{Bmatrix}$		71.	
92.	ㅅ	ㆁ	$\begin{Bmatrix} 62 \\ 70 \end{Bmatrix}$		66.	
93.	ㅅ	ㆁ	$\begin{Bmatrix} 68 \\ 68 \end{Bmatrix}$		68.	
94.	ㅅ	ㆁ	$\begin{Bmatrix} 54 \\ 58 \end{Bmatrix}$		56.	
95.	ㅅ	ㆁ	$\begin{Bmatrix} 54 \\ 56 \end{Bmatrix}$		55.	
96.	ㅅ	ㆁ	$\begin{Bmatrix} 62 \\ 62 \end{Bmatrix}$		62.	
97.	ㅅ	ㆁ	$\begin{Bmatrix} 52 \\ 56 \end{Bmatrix}$		54.	
98.	ㅅ	ㅊ	$\begin{Bmatrix} 52 \\ 54 \end{Bmatrix}$		53.	
99.	ㅅ	ㅊ	$\begin{Bmatrix} 94 \\ 94 \end{Bmatrix}$		94.	
100.	ㅅ	ㆁ	$\begin{Bmatrix} 54 \\ 56 \end{Bmatrix}$		60.	
101.	ㅅ	ㆁ	$\begin{Bmatrix} 54 \\ 64 \end{Bmatrix}$	cm	59.	cm
102.	ㅅ	ㆁ	$\begin{Bmatrix} 56 \\ 56 \end{Bmatrix}$		56.	
103.	ㅅ	ㆁ	$\begin{Bmatrix} 56 \\ 62 \end{Bmatrix}$		59.	
104.	ㅅ	ㆁ	$\begin{Bmatrix} 52 \\ 58 \end{Bmatrix}$		60.	
105.	ㅅ	ㆁ	$\begin{Bmatrix} 80 \\ 80 \end{Bmatrix}$		80.	
106.	ㅅ	ㆁ	$\begin{Bmatrix} 60 \\ 60 \end{Bmatrix}$		60.	
107.	ㅅ	ㆁ	$\begin{Bmatrix} 56 \\ 70 \end{Bmatrix}$		63.	
108.	ㅅ	ㆁ	$\begin{Bmatrix} 56 \\ 60 \end{Bmatrix}$		58.	
109.	ㅅ	ㅈ	$\begin{Bmatrix} 58 \\ 60 \end{Bmatrix}$		59.	
110.	ㅅ	ㅈ	$\begin{Bmatrix} 52 \\ 68 \end{Bmatrix}$		60.	
111.	ㅅ	ㅈ	$\begin{Bmatrix} 54 \\ 62 \end{Bmatrix}$		58.	
112.	ㅅ	ㅈ	$\begin{Bmatrix} 54 \\ 84 \end{Bmatrix}$		69.	
113.	ㅅ	ㅈ	$\begin{Bmatrix} 66 \\ 96 \end{Bmatrix}$		81.	
114.	ㅅ	ㅈ	$\begin{Bmatrix} 74 \\ 86 \end{Bmatrix}$		80.	
115.	ㅅ	ㅈ	$\begin{Bmatrix} 54 \\ 68 \end{Bmatrix}$		61.	
116.	ㅅ	ㅈ	$\begin{Bmatrix} 90 \\ 110 \end{Bmatrix}$		100.	

117.	ㅅ	ㅈ	$\begin{Bmatrix} 56 \\ 66 \end{Bmatrix}$	cm	61.	cm
118.	ㅅ	ㅈ	$\begin{Bmatrix} 58 \\ 60 \end{Bmatrix}$		59.	
119.	ㅅ	ㅈ	$\begin{Bmatrix} 65 \\ 71 \end{Bmatrix}$		68.	
120.	ㅅ	ㅈ	$\begin{Bmatrix} 52 \\ 66 \end{Bmatrix}$		59.	
121.	ㅅ	ㅈ	$\begin{Bmatrix} 58 \\ 62 \end{Bmatrix}$		60.	
122.	ㅅ	ㅈ	$\begin{Bmatrix} 50 \\ 52 \end{Bmatrix}$		51.	
123.	ㅅ	ㅊ	$\begin{Bmatrix} 54 \\ 66 \end{Bmatrix}$		60.	
124.	ㅅ	ㅈ	$\begin{Bmatrix} 58 \\ 66 \end{Bmatrix}$		62.	
125.	ㅅ	ㅈ	$\begin{Bmatrix} 54 \\ 66 \end{Bmatrix}$		60.	
126.	ㅅ	ㅈ	$\begin{Bmatrix} 80 \\ 82 \end{Bmatrix}$		81.	
127.	ㅅ	ㅊ	$\begin{Bmatrix} 64 \\ 76 \end{Bmatrix}$		70.	
128.	ㅅ	ㅈ	$\begin{Bmatrix} 64 \\ 70 \end{Bmatrix}$		67.	
129.	ㅅ	ㅈ	$\begin{Bmatrix} 68 \\ 80 \end{Bmatrix}$		74.	
130.	ㅅ	ㆁ	$\begin{Bmatrix} 60 \\ 64 \end{Bmatrix}$		62.	
131.	ㅅ	ㅈ	$\begin{Bmatrix} 70 \\ 76 \end{Bmatrix}$		73.	
132.	ㅅ	ㅊ	$\begin{Bmatrix} 52 \\ 54 \end{Bmatrix}$		53.	
133.	ㅅ	ㅈ	$\begin{Bmatrix} 50 \\ 80 \end{Bmatrix}$	cm	65.	cm
134.	ㅅ	ㅈ	$\begin{Bmatrix} 50 \\ 58 \end{Bmatrix}$		54.	
135.	ㅅ	ㅈ	$\begin{Bmatrix} 54 \\ 78 \end{Bmatrix}$		66.	
136.	ㅅ	ㅈ	$\begin{Bmatrix} 87 \\ 110 \end{Bmatrix}$		94.	
137.	ㅅ	ㆁ	$\begin{Bmatrix} 58 \\ 58 \end{Bmatrix}$		58.	
138.	ㅅ	ㅈ	$\begin{Bmatrix} 50 \\ 50 \end{Bmatrix}$		50.	
139.	ㅅ	ㅈ	$\begin{Bmatrix} 64 \\ 70 \end{Bmatrix}$		67.	
140.	ㅅ	ㆁ	$\begin{Bmatrix} 72 \\ 78 \end{Bmatrix}$		75.	
141.	ㅅ	ㆁ	$\begin{Bmatrix} 84 \\ 86 \end{Bmatrix}$		85.	
142.	ㅅ	ㆁ	$\begin{Bmatrix} 54 \\ 68 \end{Bmatrix}$		62.	
143.	ㅅ	ㆁ	$\begin{Bmatrix} 64 \\ 74 \end{Bmatrix}$		67.	
144.	ㅅ	ㆁ	$\begin{Bmatrix} 58 \\ 60 \end{Bmatrix}$		59.	
145.	ㅅ	ㆁ	$\begin{Bmatrix} 52 \\ 58 \end{Bmatrix}$		55.	
146.	ㅅ	ㆁ	$\begin{Bmatrix} 72 \\ 74 \end{Bmatrix}$		73.	
147.	ㅅ	ㆁ	$\begin{Bmatrix} 74 \\ 80 \end{Bmatrix}$		77.	
148.	ㅅ	ㆁ	$\begin{Bmatrix} 58 \\ 64 \end{Bmatrix}$		61.	
149.	ㅅ	ㅈ	$\begin{Bmatrix} 70 \\ 74 \end{Bmatrix}$	cm	72.	cm
150.	ㅅ	ㅈ	$\begin{Bmatrix} 80 \\ 82 \end{Bmatrix}$		81.	
151.	ㅅ	ㅈ	$\begin{Bmatrix} 70 \\ 70 \end{Bmatrix}$		70.	
152.	ㅅ	ㅈ	$\begin{Bmatrix} 70 \\ 74 \end{Bmatrix}$		72.	
153.	ㅅ	ㅈ	$\begin{Bmatrix} 54 \\ 60 \end{Bmatrix}$		57.	
154.	ㅅ	ㅈ	$\begin{Bmatrix} 58 \\ 58 \end{Bmatrix}$		58.	
155.	ㅅ	ㆁ	$\begin{Bmatrix} 64 \\ 64 \end{Bmatrix}$		64.	
156.	ㅅ	ㅈ			91.	
157.	ㅅ	ㅈ			81.	
158.	ㅅ	ㅈ			91.	
159.	ㅅ	ㅈ			76.	
160.	ㅅ	ㅈ			75.	
161.	ㅅ	ㅈ			70.	
162.	ㅅ	ㅈ			70.	
163.	ㅅ	ㅈ			76.	
164.	ㅅ	ㅈ			81.	
165.	ㅅ	ㅈ			81.	
166.	ㅅ	ㅈ			78.	
167.	ㅅ	ㅈ			81.	
168.	ㅅ	ㅈ			81.	
169.	ㅅ	ㅈ			91.	
170.	ㅅ	ㅈ			81.	
171.	ㅅ	ㅈ			81.	
172.	ㅅ	ㅈ			70.	
173.	ㅅ	ㅈ			81.	
174.	ㅅ	ㅈ			81.	
175.	ㅅ	ㅈ			101.	
176.	ㅅ	ㅈ			81.	
177.	ㅅ	ㆁ			81.	
178.	ㅅ	ㆁ			86.	
179.	ㅅ	ㅊ			91.	
180.	ㅅ	ㅈ			76.	

181. ♪ ♪	76. ^{cm}	184. ♪ ♪	70. ^{cm}	187. ♪ ♪	86. ^{cm}	190. ♪ ♪	70. ^{cm}
182. ♪ ♪	70.	185. ♪ ♪	75.	188. ♪ ♪	70.		
183. ♪ ♪	86.	186. ♪ ♪	80.	189. ♪ ♪	70.		

尙昔は多く箕面瀧の名顯はれ紅葉の名所と云ふより寧ろ瀧に名を獲たる名勝なりし如く古歌にも瀧に關するもの多し 紅葉に關する詩歌の徳川中葉の頃より特に多く見らるゝに到りたるより推すも箕面山が紅葉の名所としての歴史は大凡二百年を経たるものと認むるを妥當とせん

彼の秋里湘夕の攝津名勝圖繪に

それ此一山は丹楓多くして秋の末は三千の樹々錦繡の如く瀧の流は紅を濯ぎ樵夫は錦着て家に還り山僧のこゝろを染ぬ紅の色艶しく風のかけたるしがらみは蜀錦を布が如し立田川の秋の色高雄の山の夕日かけ通天橋もこゝに疊みて京都浪花の騷人霜葉を踏んで競ひ來る云々

とあるを見るも明治維新以前に於ても遊覽人絶え間なかりしを察するに足る

明治以降箕面山が公園となりて府に經營さるゝに至りてよりは道路も次第に開かれ電車の便も備はり明治四十三年開通遊覽の施設も追々に完備さるゝこととなり明治四十五年頃には秋の紅葉時には山中に人の絡繹として連り歩くを見る迄に世に喧傳さるゝに至る

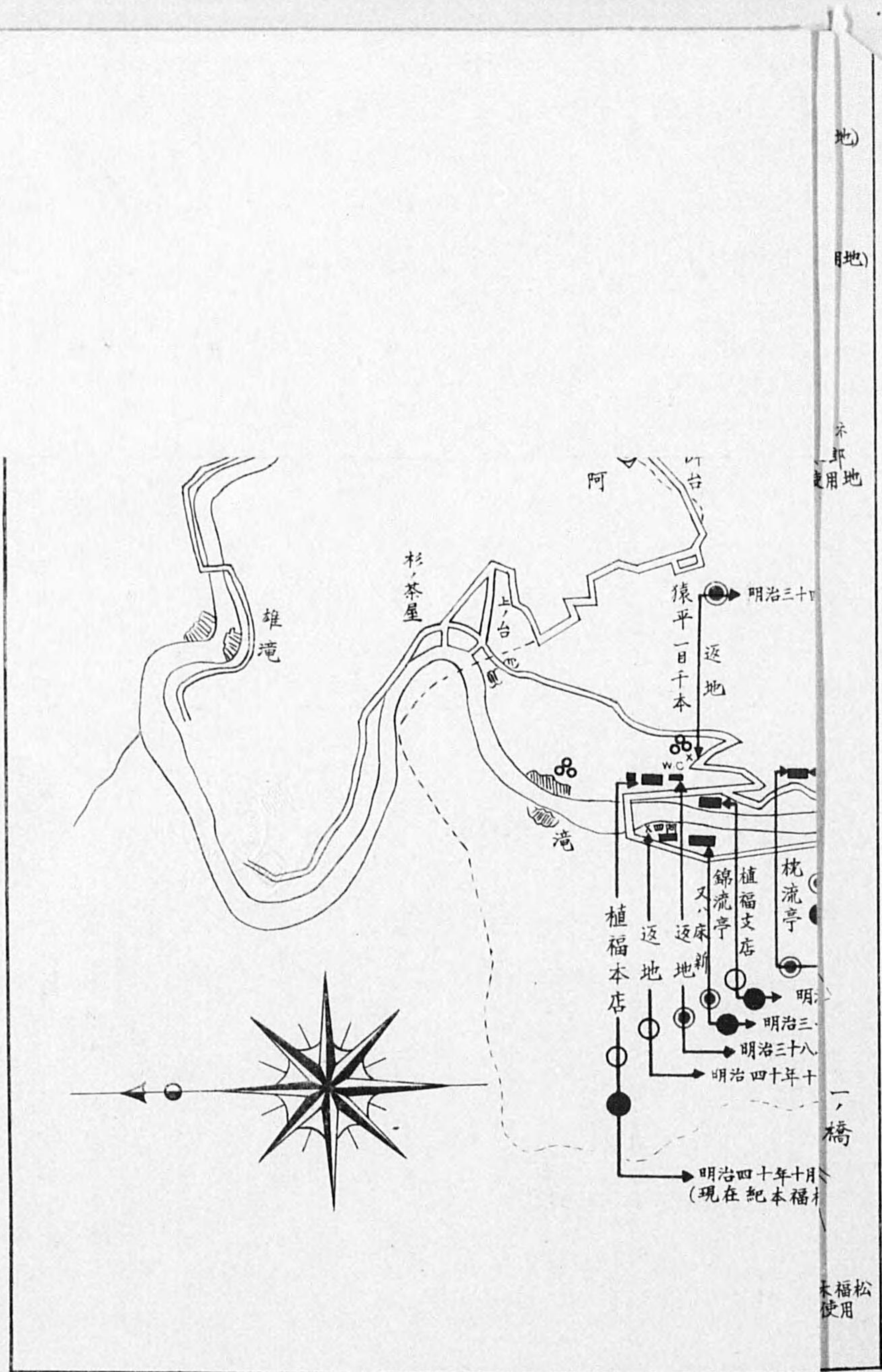
最近の調査によれば平日と雖も遊覽者一千人に達し、日曜祭日にありては約二倍なり 特に秋十一月紅葉の頃は二萬内外なるを常とす これより積算するときは一ヶ年遊覽者は五十萬人を下らざるべし

今参考の爲正確なる調査に基づく今年の遊覽者(日曜祭日)表を擧げん。(昭和六年)

五月三十一日	二、四五四人	九日	一、六〇二	十一日	八、七〇一
六月 七日	三、五五六	十六日 雨天	—	十八日	一〇、〇六一
十三日	二、〇四九	二十三日	一、七五七	二十五日 午後二時 雨降出ス	六、八八八
二十日	二、九四七	三十日	二、一〇七	十一月 一日	一二、四三八
二十八日	一、二四二	九月 六日 正午ヨリ 雨降出ス	一、三二七	三日	一三、一〇三
七月 五日	一、五六〇	十三日	一、七九七	八日	一一、二二一
十二日 午後二時 雨降出ス	八七四	二十日	四、八一—	十五日	一八、一〇九
十九日	一、二五八	二十四日	一、八一—	二十二日	一二、〇九三
二十六日 雨天	—	二十七日	一、五二四	二十三日	五、一三三
八月 二日	一、五〇三	十月 四日 雨天	—	二十九日	四、八七九

三 名勝地としての開發

箕面山は明治二十年頃より既に公園と俗稱され、遠近の風流人士の此所に杖を曳くもの多



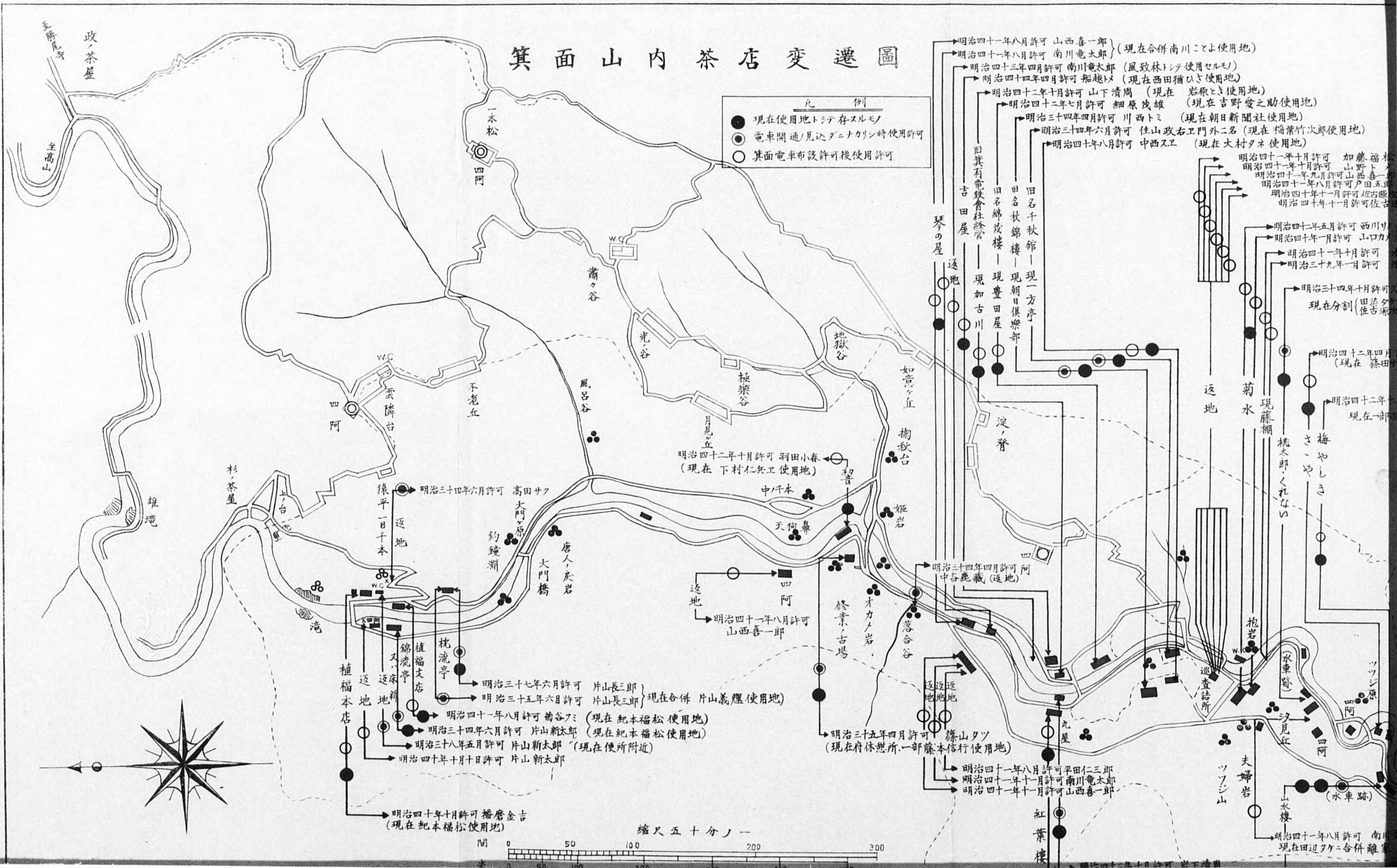
瀧の前及び寺の入口附近に掛茶屋を設け料亭を營むもの現はれ、動もすれば附近の風致を損するの工作物建設さるゝ状態となれり。されど此の頃は川沿ひの道路も未だ開けず、沿岸には所々に水車等ありて穀類をひく大きな茅舎等も見え、遊覽地として形態をなさざるところも亦多かりき。現在の山水樓荒木福松使用地、庭内及桃太郎(佐古源次郎使用地)屋敷裏には今も猶水車場の石組遺れるを見る。

大阪府がこゝに公園を定めたるは明治三十一年なり。即ち同年一月廿九日農商務大臣より公園許可の指令あり、同年五月廿日時任爲基知事は大阪府告示第九十一號を以てこれを公園とすることを告示せり。「府下豊能郡箕面村大字平尾字箕面山官林内貳拾五萬六千五百五十坪ヲ當府公園ト定メ箕面公園ト稱ス」(大阪府告示第九十一號)とあり。今その經過の概要を述べん。

即ち明治二十三年頃より府會は屢々箕面公園設定のことを建議せしも實現を見ざりしが、同二十九年の府會に於て又々この議論轟々しく稱へられ、官有地の無償交付を受くる盡力方を當局に迫る。特に同地元の選出議員森秀次氏は極力これが實現方につき斡旋するところあり、遂に同三十一年一月廿九日指令を得てその目的を遂げたり。この地はもと瀧安寺の所有地なりしが、社寺境内の土地處分に會ひ官有地に編入されしを、大藏省より府に無償交付さるゝに至りしものなり。

今當時の事情を明かにするため府會速記録の一部を抜萃して參考とせん。

第六圖 箕面山内茶店變遷圖



明治二十八年十一月十四日大阪府通常府會議事錄拔萃

森秀次(七〇)

番外ニ問フ前キニ本會ノ決議ヲ以テ箕面山ヲ本府ノ公園ニ申受ケタシトノ建

議ヲナシタルニ其後數年ヲ經テ今日ニ至ルマデ未ダ何等ノ沙汰ナシ其經過ヲ承リタシ

番外(平井屬) 二十四年頃ニ對スル建議ニ對シ吏員ニ實地視察ヲナサシメタル經過報告

公園トシテ適當ト認メ大林區署ノ意見モ差支ナシトノ説明

森(七〇)

今日迄ノ經過ハ了承セリ就テハ本員ハ更ニ建議ヲナシタシ近來ハ箕面山ニ遊ブモ

ノ頗ル多キヲ加ヘ攝津鐵道其他道路ノ開通ニ依リ前キノ日曜日ノ如キハ四千人内外モ
出デ殊ニ避暑時節ノ如キハ外國人モ多ク出掛クルナリ益々公園トナスノ必要ヲ感ゼリ
然ルニ番外ノ答辯ヲ推測スル時ハ此事タル至急ヲ要スルニアラザルヲ以テ或ヒハ之ヲ
失念シ終ニ等閑ニ附シ去リタルニハアラザルカノ感ナキニアラズ依テ今回ハ當會期中
ニ何分ノ沙汰ニ相成ル様致度此儘不問ニ付シ去ル時ハ面白カラザル建物坏ノ出來テ風
致ヲ害スル恐アリ貫ヘルモノナレバ相成ベクハ早ク貫ヒ度キ考ヘナリ故ニ會期中何分
ノ沙汰アル事ヲ望ムトノ建議ヲナサン

議長 知事ニ向テ其建議ヲナスト言フカ

森(七〇)

然リ申サバ知事ニ向テ建議ノ督促ト言フ様ノモノナリ

寺倉(三八)

前說ニ賛成ナルガ建議ニアラズシテ督促ナルカ

森(七〇)

建議ナリ

武部(二) 新任議員ニ對シ以前建議ノ説明ヲ請フ

森(七〇) 自分モ當時ノ事ハ承知セザレドモ結局公園ニ適當スルモノ故申受ケタシトノ主旨ニ外ナラザリシナラン爾來ノ經過ハ前キニ番外ヨリ述ベラレタル通りナリ大體貫ヘヌモノナレバ詮方ナキモ大林區署モ異議ナク知事モ同意ナルニ今日迄埒ノ明カヌ様ニテハ困ル故會期中ニ何分ノ事ヲ承リタシト言フナリ

武部(二) 地所ハ官地ナルカ所屬ヲ問フ

番外 前質問ニ對スル説明

後藤(四六) 反對

森(七〇) 後藤氏ノ反對說ヲ伺フニ同氏ハ本員ノ說ヲ御了解ニナラヌ様思ハル、ニ付今一應辯ズベシ期日ヲ定メテ請求スルハアツカマシキトカ無禮トカ言ハル、モ三十一番古屋ヨリ論ジタル如ク本會ハ徒ニ建議ヲナシタルニアラズ冗談ニヤリタルニ非ズ必要ヲ認メテナシタルモノナレバ是非ソノ希望ヲ貫徹セシメザルベカラズ故ニ此請求ハ當然ナリ無理ナルコトニアラズ殊ニ何分ノ沙汰ニ相成度ト言フ迄ナレバ必ず會期中ニ吳レヨト言フニハアラズ若シソレダケノ運ビニ至ラザレバ此事ヲ報告セラレバ可ナリ即チ何分ノ沙汰ニ相成リサヘスレバソレマデナリ斯ル事ハ兎角等閑ニナリ易キモノ故理事ノ念頭ニ印セント欲スルナリ二十五番ノ言ハル、如ク必ず會期中ニ貫ハント言フニアラズ等閑ニナサヌ爲メ番外ノ念頭ニ印スルナリ

橋本(四六) 建議ノ内容ニ關スル質問

森(七〇) 四十六番ニ答ヘン自分ハ何分ノ沙汰ニ相成様致度ト言フナリ此問題ヲ決スルニハ明カニ公開ニシテ貫ヒ度ト言ヘル精神ニ外ナラヌト言フ解釋ニ據ラザルヲ得ズ而シテ何分沙汰ヲ望ムト言フカラニハ多クノ意味ヲ含ミ居ルナルハ開會中ニ若シソレマデノ運ビニ至ラズト言ハルレバ詮方ナシ出來ヌト言フモノヲ無理ニヤレト強ユベキ權利ハナシ要スルニ理事者ニ於テ會期中ニ其ノ運ビニ至ラズト言ハバ是非モナシ強ヒテナシシムル權利ハナシ故ニ德義ニ訴ヘ相成ベク會期中ニ何分ノ沙汰ニ相成リタシト建議ヲナサント言フナリ……………(以下畧)……………(森氏ノ建議ハ可決サレタリ)

斯くて箕面公園は官有林の交付により漸く府の公園となりしが其の後明治三十二年四月國有土地森林原野下戻法なる法律出で、一度國有に歸したる箕面山は再び瀧安寺の所有地となる。これが爲土地の所有權に關し係争起り、行政裁判の判決を仰ぐこととなり遂に大阪府の敗訴に決し府は金二萬圓を買收費として支出し、茲に事件の落着を見たり。時にこれ明治四十年五月八日なり

この事ありて以後は完全に土地の所有權も府に移り、箕面山の中樞部が府の公園として開發さるゝ機運に向ひたるなり。當時は橋梁、四阿、茶亭等の如き諸種の遊覽施設も見るべきもなく、瀧への本道も不完全なりしが、四十年以後に至りて漸く完成の歩を進めたり。茶亭の多く建設されしも、阪急電車開通明治四十三年三月十日以後のことにして、その後大正七八年

に及んびては其の數過剰の感あり、位置も面白からざるものを生じたるを以て部分的に整理するの必要を生じたり

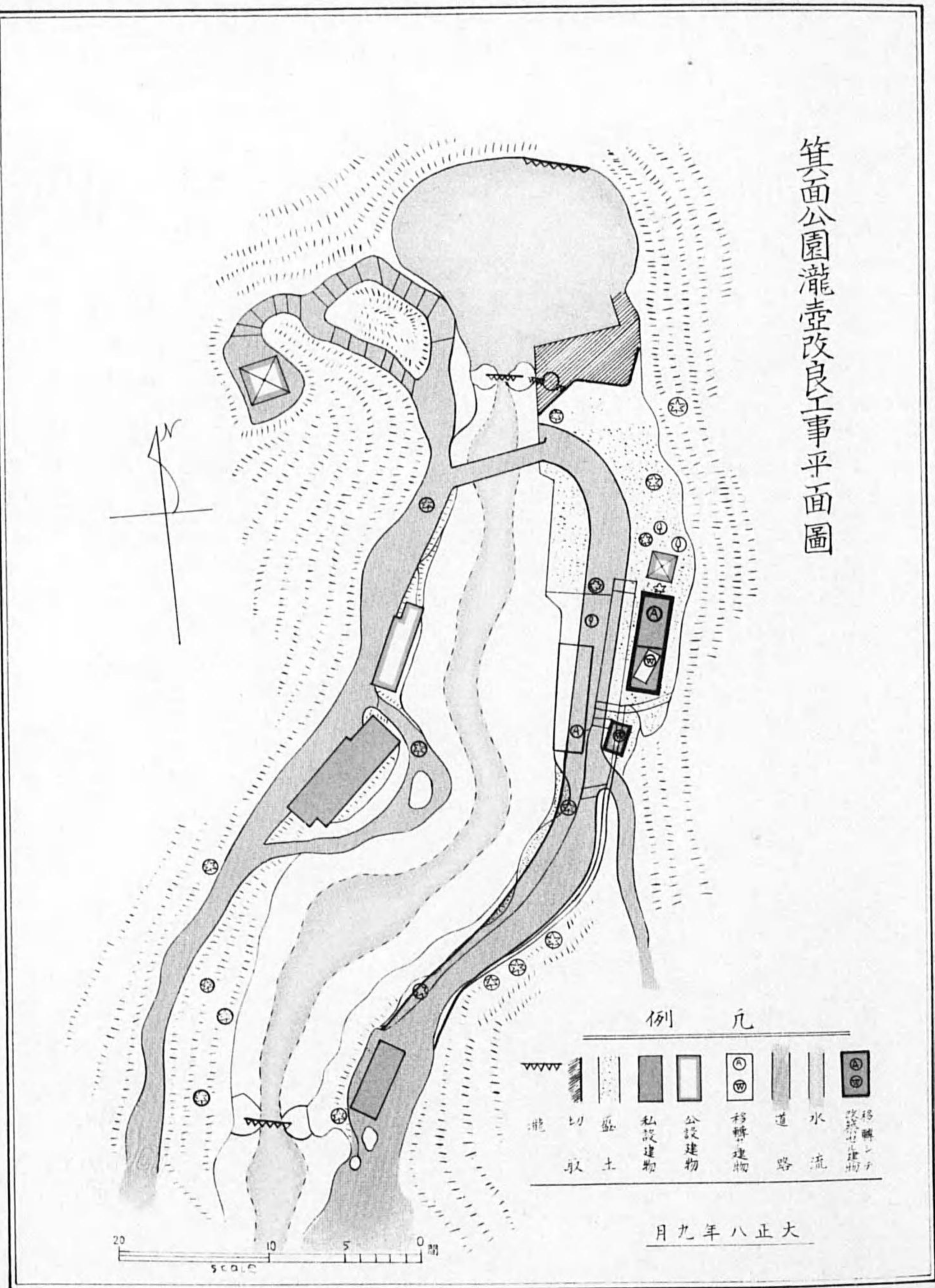
即ち大正九年には瀧前の廣場を整理し、茶店の河岸にありて瀧の眺望を遮れるもの及便所一ヶ所を右手の崖下に移し、道路を川縁に擴張して瀧の正面なる瀧見橋に連絡し、瀧壺を約三十五坪南に擴張し、その縁は岩石を積みて堰となし、水位を上げて容水量を増大し、豪雨に際し瀧の飛沫により見物席の洗はるゝことを防止せり（挿圖第七八圖参照）

又大正十年には菊水前の荒廢地を整理し、家屋二戸を撤去し、一面の緩傾斜としてこゝに芝生を設け團體の運動休憩の場所とし、その右方の一廓には箕面植物見本園を新設せり

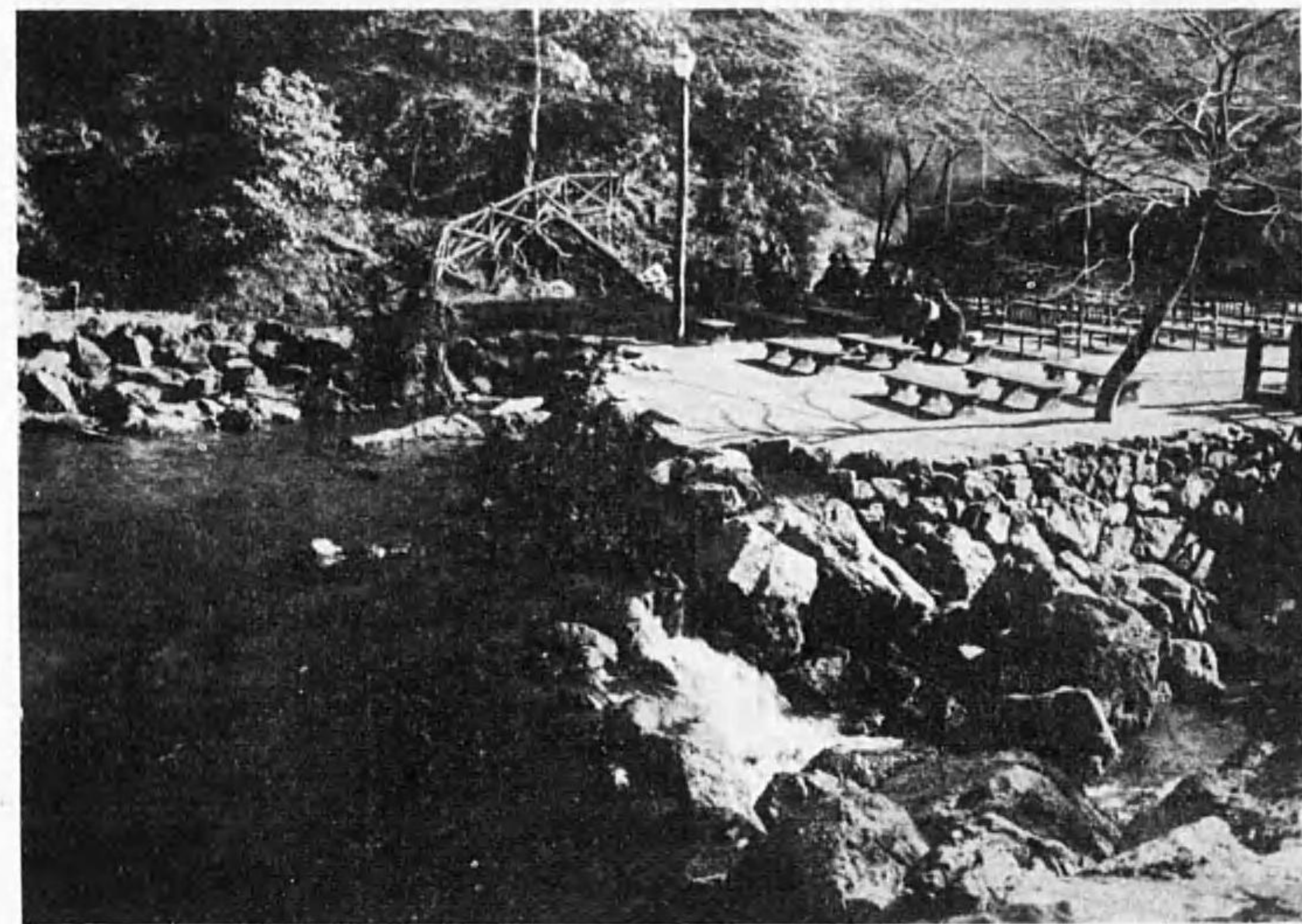
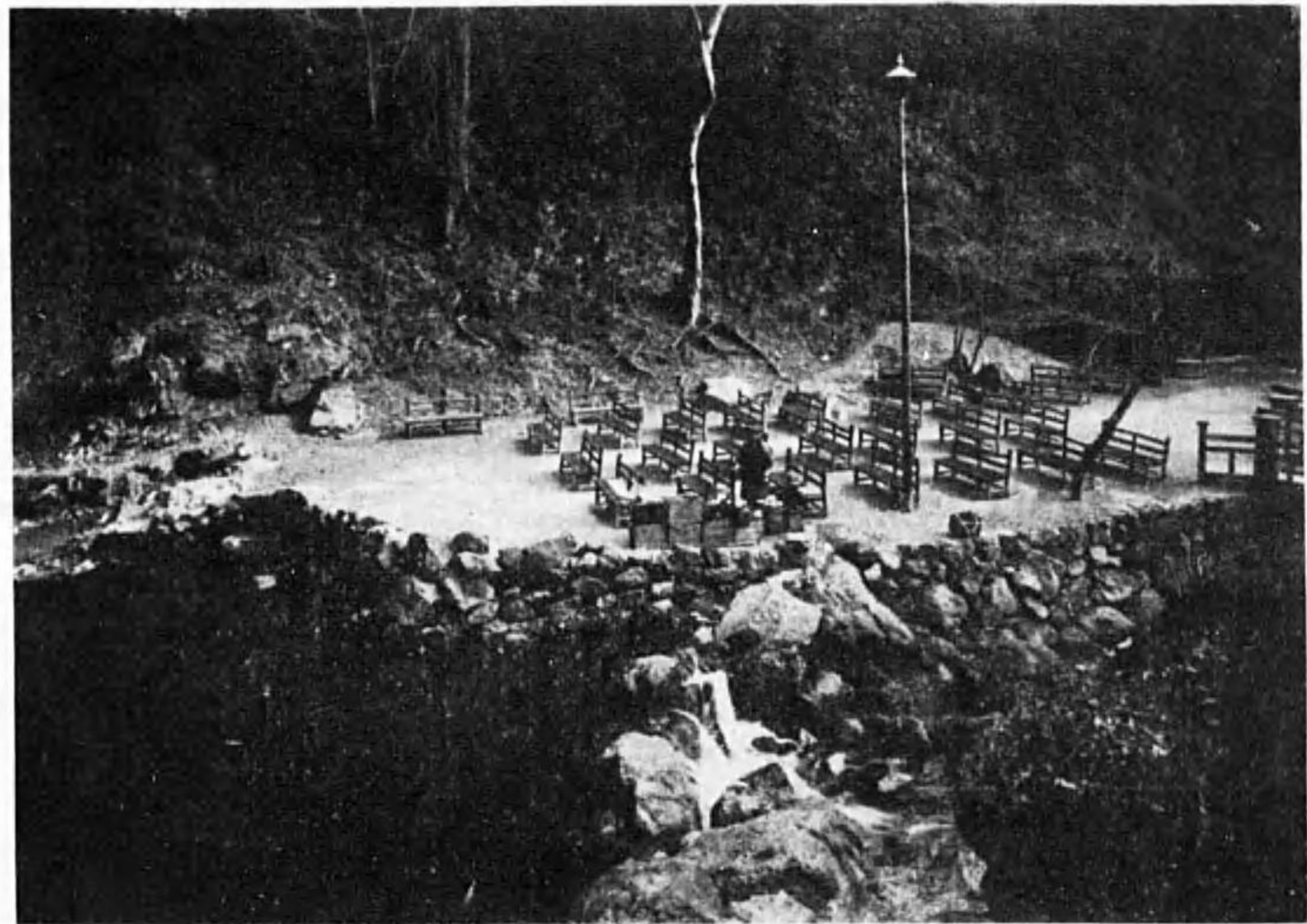
亞で十一年修行古場に大休憩所を設け、又梅林臺地の模様替を行ひ、大正十二年には國有林内に延長三千四百七十間に及ぶ廻遊道路の開設を行へり

この國有林の公園的利用に就ては既に明治四十四年の頃より企あり、即ち同年公園に接續する國有林一帯を無償交付方につき大林區署と交渉ありしが遂に望みを達し得ず終れり、越へて大正十年に至り、都市發展の急激なるに鑑み此の如き森林公園開發の急を覺ゆること益々多きを加ふるを以て、遂に同年五月時の大阪大林區署長平熊友明氏を説きこれが交附方を懇望せり、其の結果林地全部を無償にて交付する事は不可能なりと雖も、これを公園的に利用する點に於ては差支へなかるべく、從て遊歩道路の如きを設け、林内を巡遊する施設をなすことはこれを認むべしとの意見あり、即ち大阪府はこの意見に基き國有林の開放を請ひ廻

箕面公園瀧壺改良工事平面圖



第七圖 箕面公園瀧壺改良工事平面圖



後良改(下) 前良改(上) 良改の壺浦 圖八第

遊道路並に休憩所敷地として四千六百四十二坪の無償貸與方を申し出で、大正十一年公園豫算中にこれが施設費一萬五千六百二圓を計上し、府會の賛同を経て大正十二年十二月八日國有林の無償借入の承諾を得て直ちに工事に着手し、翌十三年五月にはこれが竣工を見たり。尙東方の山林と同時に西方一帯の山林三百餘町歩をも公園地域として編入すべく農商務大臣に稟請を行ひたるも、未だその望みを達し難く、目下沙汰熄みとなれり。

廻遊道路新設工事内容

本工事の目的は公園擴張部に於ける景勝の地を開發し適當の連絡道路により此等の地が容易に到達し得られ、次で遊覽者等に森林公園的氣分を十分に味はしめんとするにあるを以て、工事の大部分は道路の新設改修、休憩所の設置等にあり、而も地形の變化尠からざるにより廻遊道路としての勾配等に就ても著しく急なるもの、或は岩壁の中腹を逼ふもの等、工地上困難なる點多かりしも、風景を損傷せざる範圍内に於て、或は胴木を伏せ、或は木柵を繞らして遊覽者をして巡遊の目的を達せしむるに容易なる如く設備せり。

即ち廻遊道路は車馬の往行なく山間豁谷内を迂曲するを以て、成るべく幅員を狭くし、その周圍には躑躅、ハギ、ツゲ、ヒサカキ、アヲキ等の灌木、シヤガ、シダ、秋明菊、桔梗、薔薇、月見草、クロイバ、紫雲英等の花卉を繁殖して野趣を添へ、風景特に秀れたる地又は四季遊覽者の休憩に適せる地には廣場を設け、ベンチを置き、四阿等を配せり。特に恐るべき山火を未然に防ぐ爲めには

所々喫煙所を置きたり

又濫りに林間に侵入して林木を損傷し、又は林地を荒すの虞ある地域は木柵を設けてこれを防備せり

廻遊道路は幅員六尺延長三千一百九十八間を新設し、その間に休憩所としての廣場十六ヶ所、一千七百三十六坪をとり、中に傘形四阿三ヶ所、便所二ヶ所、喫煙所十六ヶ所、大山七臺一ヶ所を配し、舊瀧道との連絡の爲め、木橋一ヶ所、隧道一ヶ所、修繕設けたり。その工費は大凡次の如し

一、道路新設費	延長三、四七〇間	八、七六二・一三
一、橋梁新設費	木橋(幅員六尺、長サ五間)	八一七・八七
一、休憩用四阿	傘形三ヶ所	一、七五五・〇〇
一、便所新設費	二ヶ所	四六三・八〇
一、山七臺新設費	一ヶ所	一、六八〇・〇〇
一、隧道修理費	一ヶ所	八八七・八五
一、指導標人件費其他		一、二三七・三五
合計		一五、六〇二・〇〇

次に大正十三年以降、一ノ橋、落合橋、大門橋は府土木課に於て架換、紅葉橋、瀧見橋、夫婦橋其他

の橋は府公園係に於て漸次架換次に大正十四年に至り川沿瀧道の危険柵腐朽著しく到底木材を以てしてはその維持修理に遑なきを以てこれをコンクリート製に改造することを企て三ヶ年の日子と一萬餘圓の工費とを以て漸く昭和二年十二月完成を見たり 次に昭和二年より三年に亘りては登山手摺を設けて急坂を攀ぢる人の便に資せり 大正十五年川中休憩所(三〇〇圓)を新設せし以外各所に無料休憩所を増加す、十三年大山スベリ臺トンネル修理昭和四年に至り林相整理の目的を以て明治十年頃箕面村平尾の松井善左衛門の植付けに係る杉植林地二ヶ所七七三本を伐採して、その趾地に櫻の苗木五五三本を植栽せり、即ち大門ヶ原の二、三、七、六坪は實用杉林の爲に後方に介在する一目千本の稱ある紅葉山の眺望を遮り居たるを以て、眺望開發の意を以てこれを除去し、料亭琴ノ屋の川向ひ斜面一、三、三〇坪は杉の純林をなし、風致的價値に乏しき經濟林の形をなせるを以てこれを櫻樹と換へ此所に櫻山を形成して將來の箕面に櫻の新しき景觀を添へんとするの計畫を實施せり、これに要したる工費二、九六一圓なり

序に箕面山の櫻樹は山腹並に河沿ひの各所に多少の老木無きに非ざるも、多く獨立樹をなし各樹林中點在して以て一景觀をなすに足るもの少く、其の數も僅かに全山を通じて一千五百餘本なり

就中多きは山櫻にして其數一千餘本、次は彼岸櫻なり 車返、吉野、芝山等の里櫻は僅かに近年の補植にかゝり、全部川沿ひの平地に點植されたり 府公園に於ては爾來櫻樹の群落を増

すことに努めつゝあり

次に瀨々として起る山火事を未然に防止するの目的を以て、昭和五年より川の右岸の沿一帯の山林に就て下草の伐採を勵行せり

昭和四年より毎年繼續の開發事業としては、遊覽主道路の照明を改善増加し以て夕闇に散策する來遊者の氣分を爽かならしむる爲從來の殺風景なる實用電球を次第に除去して雅味ある裝飾燈に代へ又一ノ橋公園入口には夜景を優美ならしむるため特に道識形照明燈一基を新設せり

其他山内の整理並に開發の目的を以て、大正九年以降府に於て施工されしものゝ主なるものを舉れば次表の如し

箕面公園大正九年度(大正九年四月一日)以降維持並改良工事表

(但三〇〇圓以上ノ工事ノミ)

施工年月日	工 事 名	請負金額	請負者	備 考
自大正九年 至同 五月十五日 至同 六月十三日	瀧前改良工事	四八八〇	山野市太郎	
自大正九年 至同 五月廿五日 至同 六月三日	危険防止木柵改設工事	六〇四七〇	"	延長五十一間五分
自大正九年 至同 六月廿一日 至同 七月二十日	危険防止木柵改設工事	四〇〇六六	"	延長三十四間
自大正十年 至同 三月卅一日	噴水新設工事	二六五〇〇	山本正太郎	噴水口設置

自昭和三年十一月十三日 至同 十二月十九日	登山手摺建設工事	三五〇〇	見市岩松	不老丘ヨリ肅々谷ニ至ル
自昭和四年十一月廿九日 至同 十二月廿九日	土橋架設腰掛新設	七四六〇	奥村幸十郎	ツ、ジケ原土橋架設腰掛十脚据
自昭和三年十二月廿一日 至昭和四年一月廿九日	危険柵修繕工事	四九五〇	中井梅太郎	瀧側ニ新設
自同 二月九日	瀧見橋架設工事	一〇八〇〇	辻 紋治郎	
自同 三月廿七日	櫻山新設工事	一、六八〇〇	森 源三郎	山櫻一九〇本植付(琴ノ屋)一、三三〇坪 〃三六三本〃(大門原)二、三七六坪
自同 三月三十日	保護柵新設工事	一三三三〇	奥村幸十郎	大門櫻山下石垣側
自同 三月廿五日	櫻(吉野)植付	三二四〇	山野市太郎	一八〇本植付
自昭和四年九月廿五日 至同 十月九日	裝飾燈建設工事	三九三〇	小林 一三	以上昭和三年度
自同 十一月三十日	登山手摺建設工事	三〇〇〇	奥村幸十郎	七基新設(有料休憩所、ツ、ジケ原、川 中休憩所、菊水北、一方亭南) 修業ノ古場、瀧前
自昭和五年三月三十日 至同 三月十一日	水飲場建設	二〇〇〇	大道奥次郎	地獄谷北上
自昭和五年六月廿四日 至同 八月十二日	危険柵建設工事	七六〇〇	奥村幸十郎	落合谷噴水 元便所アリシモ移轉シ作ル 以上昭和四年度

四 名勝地としての風景

箕面山の風景を解剖的に調査するときには二つの異なりたる種別に別つことを得べし 即ち一つは溪間に顯はれたる色々の景色にて、他は山頂部の峯々に於て認むる色々の風景なり 前者は山自身のもつ特色より描き出され、後者は其の地點よりの遠望により初めて顯はるる景趣なり 即ち一つは幽邃、他は廣濶なる風景なることを常とす 箕面山にありてはこの兩者が双ながら兼ね備はれる點に於て、この山の名勝的の價値を大ならしめたり

一ノ橋より川沿ひに造られたる瀧道及びその對岸を縫うて走る川向道なる小徑は、この幽邃なる景色を見るに適好なる路線にして、先年(大正十三年)新たに造られたる所謂新公園廻遊道路は、主として展望よき臺地を綴りて晴やかなる廣濶の遠望を手近かに味はしめんとして開發されし道路なり

(一) 谷間に認め得る風景

多種多様の風景を玩賞し得るが就中瀧及溪流は、この箕面溪間風景を構成する骨子なり 而して岩石の無数の露出はこれに色々の肉を添へ、兩岸に繁茂する草木特に楓、槭、櫻、杉の如き大木、樹中を裝飾する灌木並に草類は、姿を整ゆるに最も秀でたる衣裳をなすと看做さる 入口なる一ノ橋より瀧に至る間、園路は紆餘曲折をなして、時に崖上に阪路となり、深く眼下に淀

む深淵の水面に陽光の反映するを見ることあり 時に鬱蒼たる杉の晝尙暗き間を過ぐることあり 又時に坦々たる徑路となりて谷の底を匍匐し水邊をたどりながら溪流の音に耳をかたむけ小魚の水中に遊ぶ長閑けさを眺め得せしめ紅葉に染むる全山の紅葉を自己の兩側に仰ぎて或は高く遠望し或は低く俯瞰し又近く寸尺のうちに翳し以て新梢の櫻花緑り滴る新緑紅葉の秋色を心ゆくまで味ひ得るとともに前觀は後望と全く趣きを異にしたる眺めに飽くところなし 斯の如き景趣は箕面を措いて他になかるべし

(二) 箕面瀧附近の風景

古成層より成る連山一帯の地殼が皺壁をなして或は盛り上がり或は陥落して峯となり又谷となりてこの箕面山の土表と地形とを形成したるものなるべく岩は多く頁岩粘板岩類似のものより成り谷川附近にはその顯出せるを認む 又時に斜面の角度大にして山腹嶮岨なる傾斜をなすを以て崩壊し易く爲に道路の廣きものを開發するに不適當なりと雖も却つて之が爲に溪間の美を添え幽邃を加ゆるに與かりて力あり

瀧をなす岩壁の如きも層狀に積み重なれる頁岩質のものなる爲斷崖美事にして凹凸少なく色彩暗黒にしてよく癖苔を生じ風化作用により崩壊することも比較的少なきを以て永久に其の姿を變ゆることなし

凡そ瀧は莊嚴味を帯び動もすれば陰鬱の氣を湧かしむるを常とするに反しこの箕面瀧は玲瓏にして凄みなし これ他に求め難き特徴にして正しく岩壁の性質附近森林の状態並に

瀧の方向に起因するものなり 即ち瀧は西に面し森は兩側に開いて疎林をなし特に岩壁には機樹の懸れるあるのみなるを以て陰鬱の氣起らず晴々としたる雄姿を見せ得るなり 文部省名勝地調査委員國府犀東氏は先年この瀧を見て次の如き感想をもらせり。

一 瀑是郎君楓淑姬 溪山爲屋裏雲帷

吹簫松籟彈琴澗 麗彩幽音水一涯

二 銀河百尺倒懸崖 飛沫千珠打石階

天女撒花紅幾片 喜看楓葉入吾懷

(三) 林相により顯れたる風景

尙箕面山の林相に就て觀れば凡そ二百五十米以上の山頂及山腹は赤松の純林最も多く二百米より二百五十米の間に於て檜椎並に雜木の潤葉樹より成る混交林多く二百米以下の溪谷にありては楓槭並に杉の群團的配列より成る林相を呈す 従つて時に檜椎の赤松林を侵蝕する状態を見ることあり又杉林の楓槭群を包圍せる如き成形をなす部分あり その雜然として混成する種々の林相が自ら各所に異なりたる景趣の變化を見せ敢て人をして景に飽き又は道に倦ましむるが如きことなし

然れども斯の如き天然林に於ては珍貴なる樹種又は美花をつけ或は觀賞價值多き風致林は然らざる野生植物より弱きを常とするを以て風致が到るところに於て自然的に破壊されつゝある場面も決して尠からず 例へば瀧安寺境内に於ける檜椎群の如きは著しく上方の

赤松群を蠶食しつゝあるを見る 又一目千本の楓穢が杉群の爲に壓せらるゝを観る如き又谷間諸所に常緑潤葉樹の楓穢類を壓倒せんとするを認むる如きはこの例なり 此等は絶え



相林るよに低高 圖九第
群杉穢下 群椎檜中 群松赤上

ざる注意により、その林相を時々整理するに非ざれば、景觀の維持望み難きものあり 今各部の名勝に就きて少しく述べん

(四) 箕面山中特に秀でたる名所

- 一、梅屋敷 公園入口一ノ橋を渡りて行くこと一丁、梅の植栽地あり、俗に梅屋敷と云ふ 梅見る人足を止むるに相應しき茶屋あり 府營の有料休憩所として一般に使用を許容す
- 二、ツツジ原 夫婦橋に狹まれたる原なるが、今日にてはツツジも左程に多からず
- 三、汐見丘 一ノ橋より最も近き臺地にして附近山ツ、ジ多く、展望も亦佳なり 遠く豊能の平野を越えて大阪灣を遠望するを得るによりこの名あり
- 四、紅葉橋 一ノ橋より進むこと約六丁、瀧安寺の下流に架したる土橋にして、その袂に楓穢多きを以て紅葉橋の稱あり 新公園への入口に當る
- 五、二ノ橋 公園入口の一ノ橋に對し、瀧安寺の上に架せる朱塗の擬寶珠を持つ欄干橋を二ノ橋と云ふ 瀧道の上を越えて架され附近の添景をなす 境内の前面の山は悉く檜椎の樹冠を以て蔽はれ、全く山内特殊の風景を味ふことを得るは、この二ノ橋なり
- 六、化石谷 新公園の入口なる紅葉橋を渡り、檜椎の老木下を辿れば、その附近一帯に「アヲキ」繁茂し美事なり 特にこの地より色々の化石出でたるにより化石谷の名あり
- 七、前後鬼谷 一つに落合谷とも云ふ 前鬼後鬼の落合ひたる谷の謂なり 目下蛙の裝飾ある噴水を設け廣場とし、遊覽者の一憩に資す

八天狗鼻 一面の紅葉に埋れたる約五千坪に餘る半島狀の突起が川を隔て、眼前に突き出で、秋季はその全面が朱の如く色づき恰も天狗の鼻を望むが如し、依てこの名あり
 九修業の古場 瀧道の約中間に位する臺地にして、見晴し良く一憩するに適するを以て、人のよく此所に集るを見る。前面に小噴水あり、向側の谷間より水を引く。此の廣場には面積二十八坪に及ぶ大休憩所あり。昔役の行者が此の附近の岩上に登りて修業せりとてこゝを修業の古場と呼ぶ

一〇、唐人戻岩 大門橋にさしかゝるところに二つの大なる岩あり。直立して道を防ぐ。昔は、この附近山路曲折して嶮岨なりしが如く、唐使此の瀧の比類なきを聞き、駕して此の巨岩の邊に來りたるも、嶮なるに驚き怖れて立ち歸りたりとの傳説あるより、この岩を唐人戻岩と云ふ。岩は高さ二十五尺、幅二十四尺のもの、及高さ二十四尺、幅七尺のもの、二つより成り、縦に條理あり

一一、雌瀧 普通箕面瀧と稱するものは即ちこの雌瀧にして、その上流約五丁のところ雄瀧あり。箕面瀧は高さ百尺なるが、瀧壺の水深を十尺餘に保てるを以て、常は百尺の落差を有せず。幅は一丈餘に亘り、水少なきときは岩壁の前面を箕の面の如く飛瀑し、西面するを以て陰鬱の感なく、誠にその姿は艶麗にして、天女の布を懸くるに似たり。常時は約六乃至十個(毎秒六立方尺乃至十立方尺の水を流す)の水量を有し、梅雨に際しては五十個餘の水量飛散して落ちる事多し、蓋し莊嚴なり。瀧の落口の直前に深き穴あり



- 一二、雄瀧 男瀧とも云ふ。雌瀧に比すれば劣ること數等なりと雖も、勝尾寺への沿道にありて一つの景觀をなす。高さ二丈餘附近に役の行者錫杖石あり
- 一三、望海ヶ丘 紅葉橋より晝尙暗き椎の木の密林をくゞりて、坂路を攀ち登ること約四丁にしてこの丘に至る。牧落、櫻井、石橋の附近を眼下に見降し、大阪灣を望み得る展望臺にして、風光極めて可なり。こゝに傘形休憩所の設備あり
- 一四、駒ノ脊 望海丘より進むこと二丁にして駒ノ脊に至る。この附近松茸多く一帯の赤松林にして駒ノ脊を行くが如きによりこの名あり
- 一五、淀ノ脊 駒ノ脊を過ぎて東すること一丁にして、淀川の流域を一望のもとに眺め得る臺地に至る。此所を淀ノ脊と稱し、生駒の連山を遠望して風光佳なり
- 一六、如意ヶ丘 淀ノ脊に接し、如意谷の上に位す。如意谷の風光を眺めながら遊覽者の行厨をとるに適す
- 一七、地獄谷 如意ヶ丘より坂道を左に下れば道の三叉するところに出づ。この地は古杉鬱蒼として繁み、涼味自ら湧く。この谷に沿ひて左に下れば川沿ひの道に出るを得、新舊公園の連絡地點なり
- 一八、掬秋臺 地獄谷よりこの川沿ひに出づるところに大なる岩石の露出あり。就中、掬秋臺と稱する石は、その頂きの面一丈四方、高さ七尺に及び、坐禪石の形をなす
- 一九、月見ヶ丘 地獄谷より北に進めば道は二つに分れ、一つは峯へ、他は谷間へと入る。峯

への坂路は急なるも、その上に展望の地あり。これを月見ヶ丘と稱し、月夜こゝに至らば
詩歌自ら詠すべし。

二〇、光ノ谷 月見ヶ丘へ登ることをやめて地獄谷より極樂谷へと歩を進むれば、小さき谷
川の上に赤松の疎林あり。これ光ノ谷にして陽光松林の間を透して爽快の氣に滿つ
この附近、山鳥、梟、猿等の來ること多し。廣場を設け、焚火の爲に特に爐型を設く。

二一、極樂谷 地獄谷より光ノ谷に渡る間の谷を極樂谷と俗稱す。この附近一帯には銀色
の羊齒類群をなして繁茂し、溪流潺々として流れ、さながら西方樂土にあるの觀あり。

二二、肅々谷 肅々谷は珍草の繁茂する細長き谷にして、附近は珍らしき陰濕の地なり。

二三、一本松 園内第一の高峯にして、海拔一千百尺、一本の松あり。こゝに感想板を設け、登
山者の偶感をこれに記録せしむるの設備あり。遊覽者の記したる感想の二三の例を列
記せば次の如し。

イ、みのおみのおは確かに大阪人の最も大なる慰安所である。山水木の備はつた立派な國
立公園である。

ロ、諸君、山の頂上に登ると世界が自分のものゝ様に思はれるネ。

ハ、吾れ名所古跡を探りたるも未だ嘗て斯の如き愉快な山上を見たることなし。

ニ、我々生れて此境に到り實際の自然崇拜を知つた。

ホ、我一本松の感想板の曰く、一體君等は何を此所にて感せしやを知らず、都會の塵煙より

離れて一時頃にもせよ此所に來りて一風の涼風に汗を拭き、ア、良い場所だとたゞ一
言それでよい。それで此所に來た甲斐がある。我一本松と安らげく喜ぶものである。
へ、都會の騒音より離れて音としては唯松風のみ、嗚呼これこそ本當のエデンの園生である。
此の山に登れば附近の山々は皆低く緑の冠の如く連なり、遠く煙霧の中に茅海の白帆を
望み得る展望の地なれば、人多くこゝに登り集るなり。

二四、雲隣臺 鳥ノ巢と稱する密林をくゞりて登ること數丁にして北の最高なる臺地を見
出す。この附近雲低く棚曳きて雲の隣に座するの觀あるによりこの名あり。瀧の音遠
く林間に漏れ響き對山の頂きにある役の行者昇天の松を遠望し得るの臺地なり。

二五、杉ノ茶屋 雲隣臺を西に入れば嶮岨なる坂路眼下に迂曲して松の林を抜け落葉林に
入る。こゝはクマガイの純林にして山中稀に見る明るみなり。大山迂り臺とて延長三十
間高さ十一間に及ぶ「スベリ臺」の設あり。下れば川沿ひに勝尾寺街道走り、小さき掛茶
屋あり。

二六、大日峠隧道 瀧の水源に到る坂路はこの大日峠をくゞりて杉の茶屋に出づ。こゝに
短かき隧道ありて園内の奇觀となる。天然の岩を掘鑿して抜け道となしたるなり。

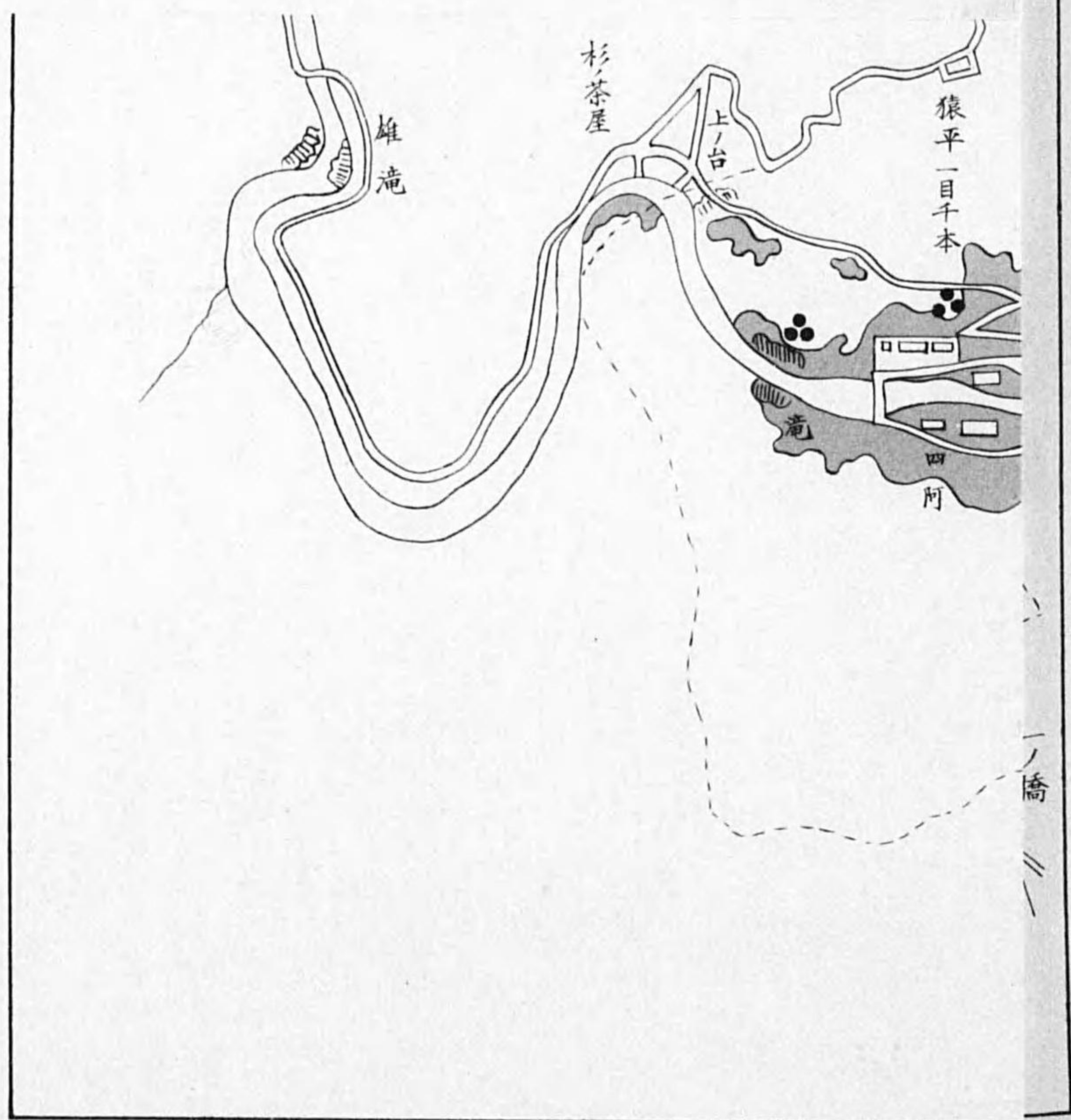
二七、政ノ茶屋 杉ノ茶屋より勝尾寺への道筋にて上ること約十五丁にして一つの茶屋あ
り、高山への道との分岐點にして、車馬の一憩する茶店なり。これより新道を上れば如意
ヶ丘より萱野村に至るべし。

五 植物分布の状態

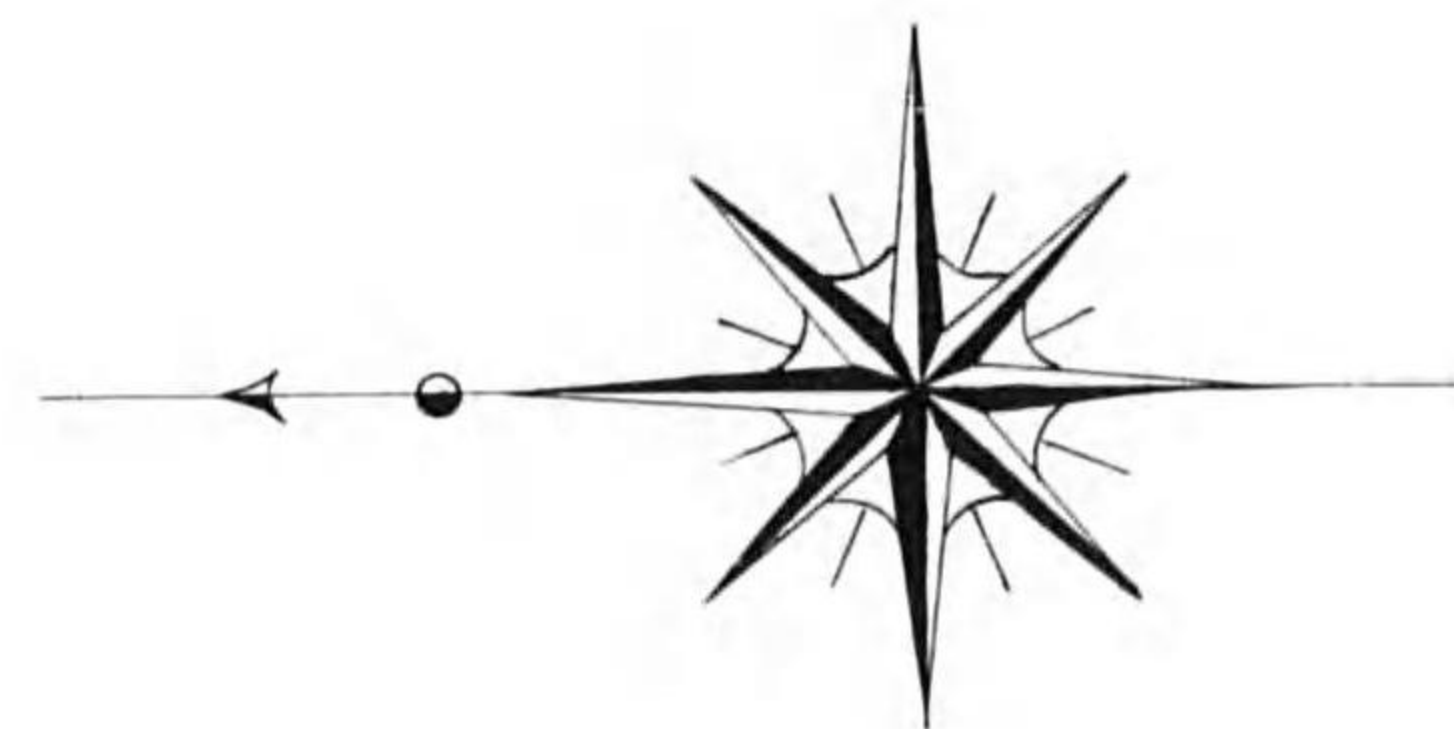
紅葉の名所として知られたる箕面山は、單に秋の紅を染むる楓槭類の一大群落地帯なるのみならず、喬木に灌木に將又草本に、羊齒類に、あらゆる種類の植物の聚落する一大寶庫をなせる點に於て近畿稀に見る地域なり。特に人目を惹きて所謂箕面の四季を飾るものは、早春にありては山櫻、コバノミツバツツジ、白花ウンゼンツツジ、晩春にありては新緑鮮かなる箕面山、青柳、楓と稱するイロハモミヂを初めとして各種のモミヂ、川添の谷間を一面に眞白にするシヤガの花、ツルタガラシの花等あり。櫻は古木稀なるも、ヤマザクラ、ヒガンザクラの森間に混在して咲き競ふさまは實に箕面山の一大偉觀なり。白花ウンゼンツツジは一ヶ所に群落をなし、簇生す。特に一ノ橋より約五町料亭菊水裏山の傾斜面は最も大なる白花ウンゼンツツジの群落なり。又コバノミツバツツジは一ノ橋より半町、梅屋敷向側の崖を始め、所々の崖に見出さる。シヤガの花は落合谷附近の溪流に近き谷間に多く、五六月頃花を開き、ツルタガラシは修業の古場より瀧附近に至る上方の崖に多く見出さる。

夏の箕面を飾るものは羊齒類なり。特にヒトツバの群落は菊水亭向岸の岩石に多く、ノキ、シノブの群落は新公園内地獄谷、極樂谷附近に最も多し。

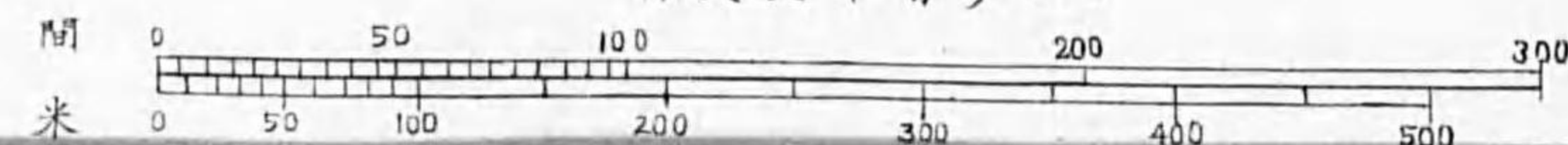
秋にありては、谷間の紅葉は勿論、山頂に近き傾斜面にも雜木に混せる楓槭の老樹相當に紅



箕面山内楓槭群落分布圖

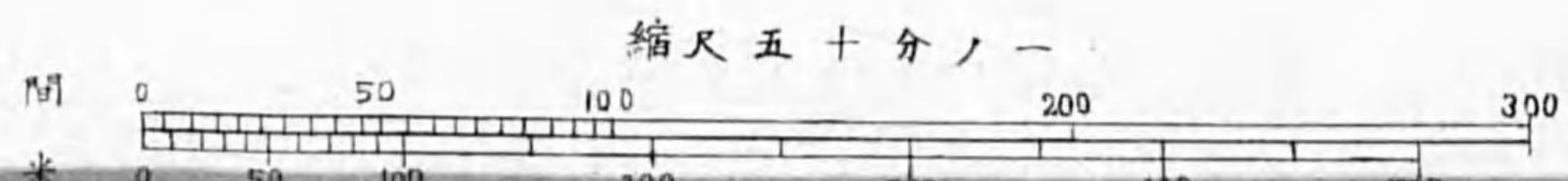
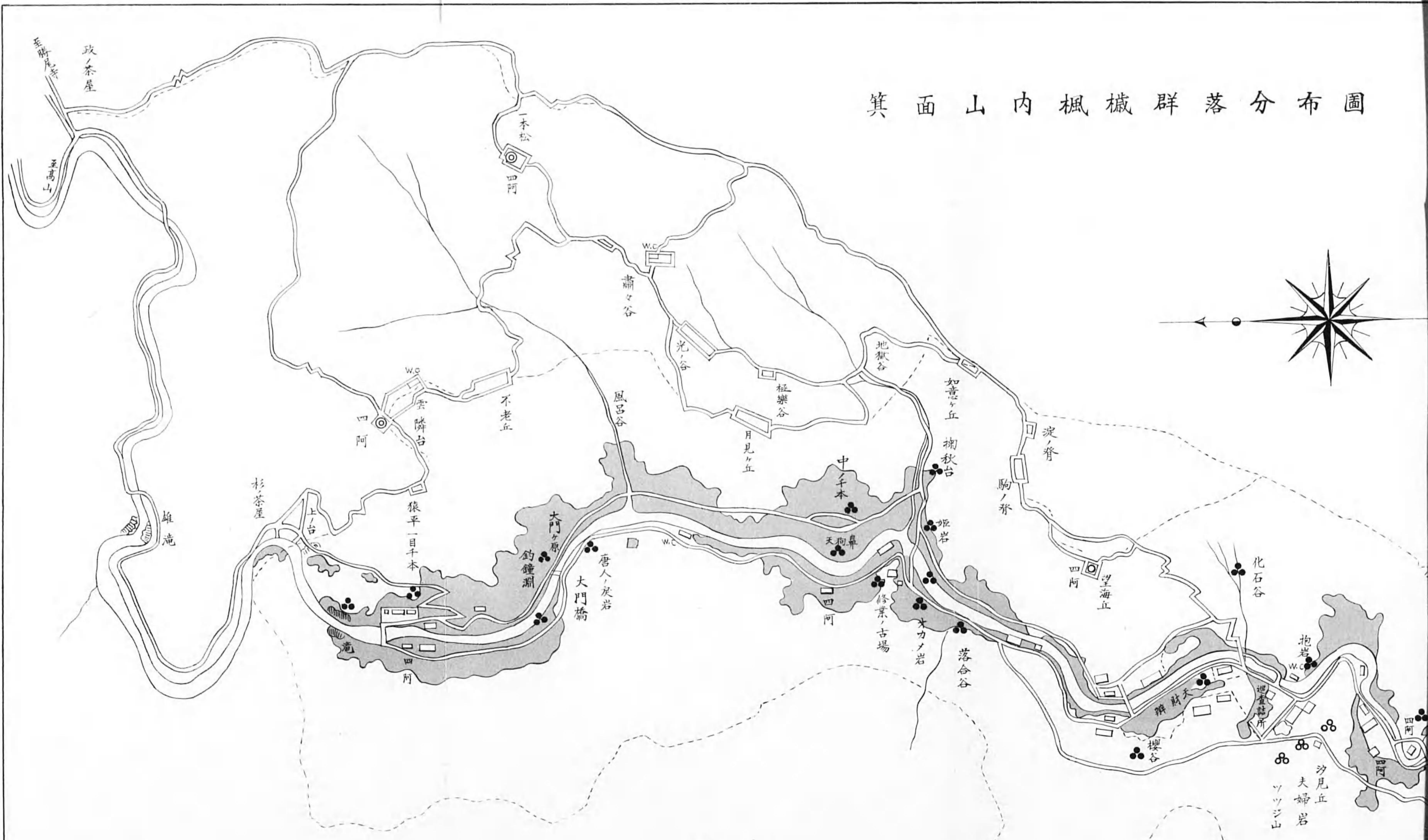


縮尺五十分ノ一

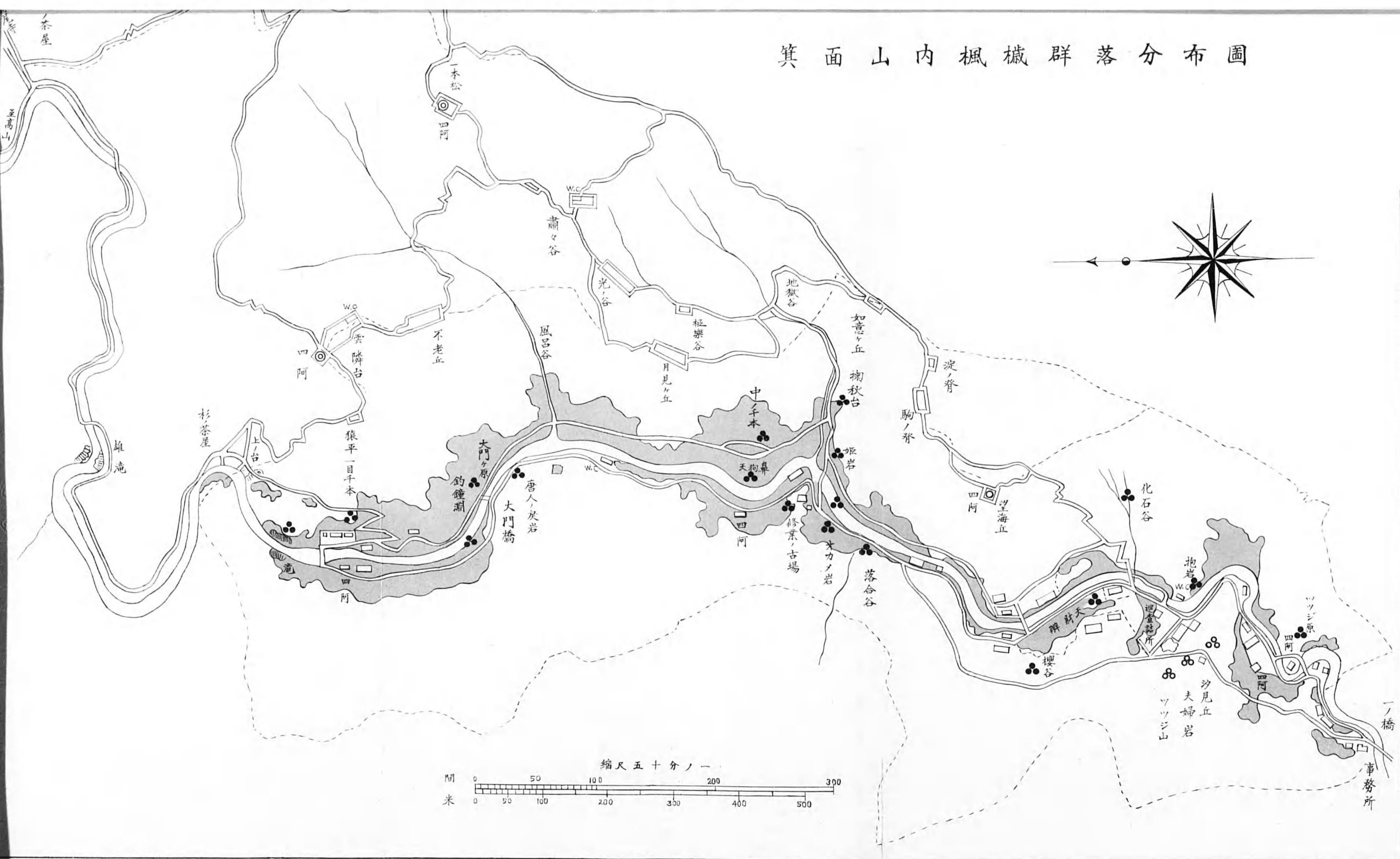


箕面山内楓櫟群落分布圖

第十圖 箕面山内楓櫟群落分布圖

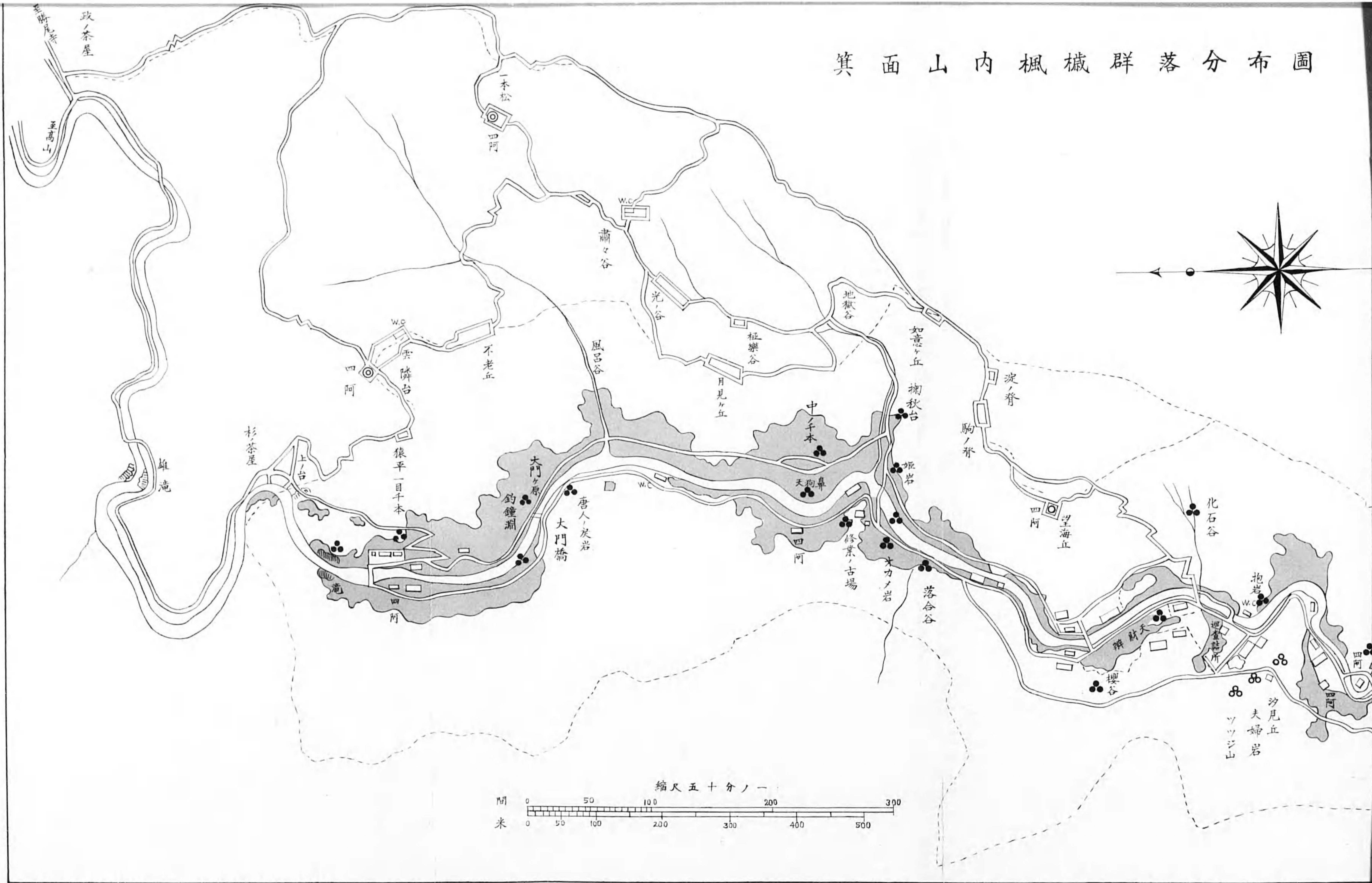


箕面山内楓楸群落分布圖



箕面山内楓櫟群落分布圖

第十圖 箕面山内楓櫟群落分布圖



葉し、一日千本の觀を呈す。又冬の凡ての落葉樹が休眠の状態を繼續する中にありて獨り、アラキ(アウクバ、ヤボニカ)は、益々その滑かなる葉面に緑の色を増し、赤き熟したる實をつけ、谷間の淋しさを補ふ。特に瀧安寺附近の化石谷は、このアラキの群落最も多きところなり。

尙詳細に亘つては、植物分類學專攻の堀江聰男君に調査を依頼せるを以てその報告を記さん

箕面山に於ける植物の種類は、顯花植物及高等隱花植物だけで、全數八百三十種であつて、其の内木本は二百六十六種、草本は五百六十四種となつて居り、これ等を包含する科目は百十六科を數へるのである。面積と比較してこれだけの種類を有すると云ふことは、極く種類の數多く密集せることを示すものである。事實箕面溪は大阪府在攝津に於ける植物の代表地とも云ふべく、かくも僅かな地域に數多な種類の保存せられてゐる事は眞に珍しい。木本中、喬木灌木を併せ約二百餘種ある。相當に大木となれるもの多く、就中、櫻類、杉、松、榎、榎、樟、槭樹、繭類等は高く聳えて全區域の殆んど全部に亘りて繁茂し、他の小木や灌木は低くその下に覆ひ隠されてゐる爲、外觀は此等のみからなつてゐるかの如くに見える。

殊にサクラとモミヂとは箕面の名物である。モミヂではイロハモミヂ最も多く、而も大きく高く生育し、實にモミヂの箕面を形も造つてゐる。其の他の喬木や灌木類も良く生育し、密生して居り、その中でもウラジロウツギ、ミツバウツギ、ウコギ、コクサギ等は、近畿地方には稀に見る大木となつて居るのは、珍しい事である。

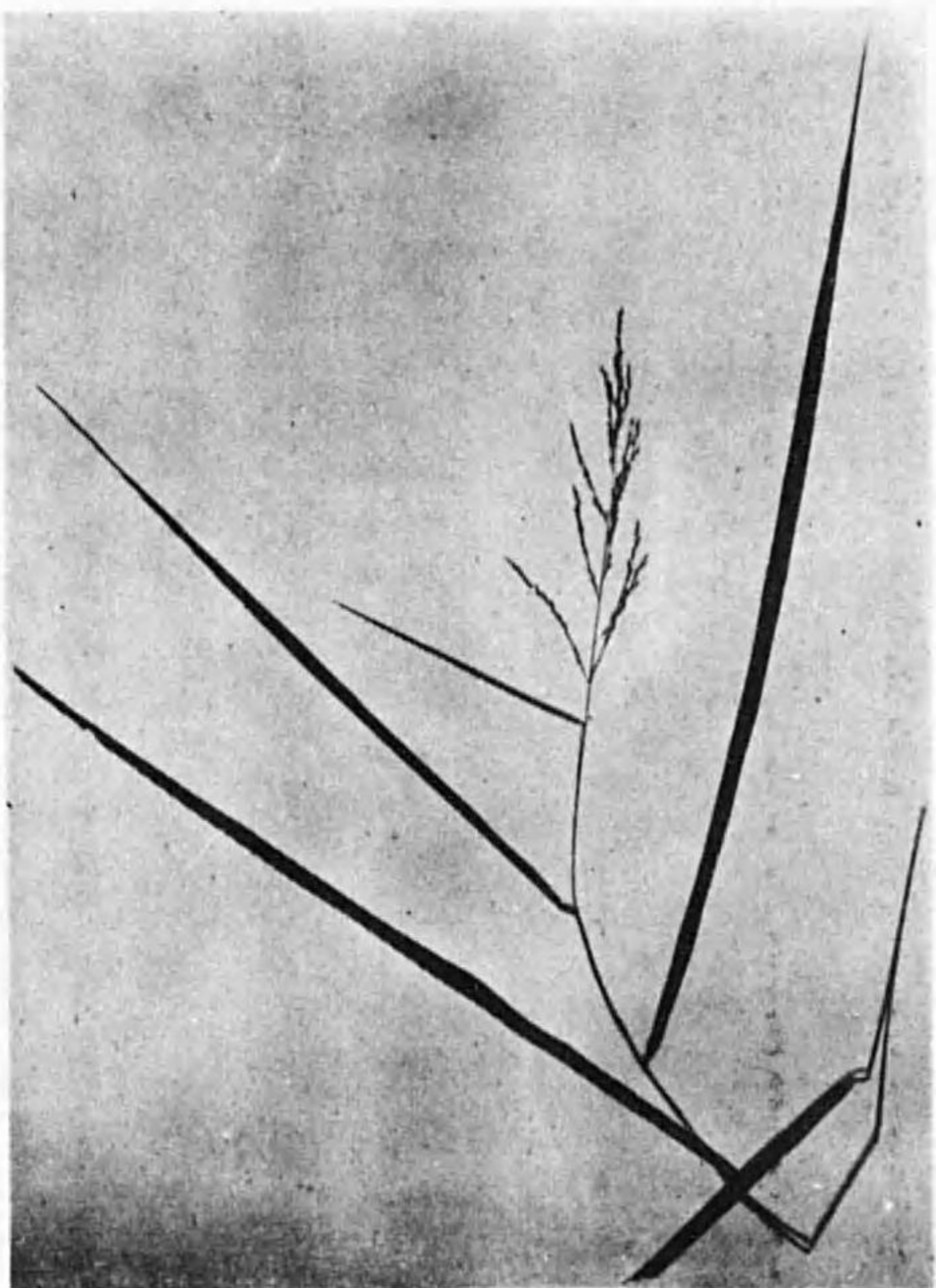
全溪間蔓木も多く、樹皮面を攀縁纏繞し、遂には梢頭枝端に擴つて懸垂し、又は岩面或は地面上を匍匐攀縁する等、到る所に數多く見られるのである。最も多いものはテイカカヅラ、イタビカヅラ、ヒメイタビ、フヂ、スヒカヅラ、イハガラミ等である。次でアケビ、クズ、ツタウルシ、フユイチゴ、サルナシ等が可なり見受けられるものである。

尙木本中所々に群落をなして生育してゐるものも可なり多い。東部荒丘地に於けるヒメヤシヤブシ(植栽)、観音堂附近のイズセンリヤウ、白花ウンゼンツツジ、勝尾寺裏山のクロソヨゴ、バイクワツツジ、躑躅ヶ丘附近のコバノミツバツ、ジ等は先づ顯著なものであらう。全地域に亘りて分布し、最も數多く生育せるものではアラキ、ハネミイヌエンジュ、シラキ、アカメガシハ、ヤブツバキ、コバンノキ、カナメモチ、イヌザクラ等が最も普通に見られる。

竹類は所々に群落をなして叢生し、今迄に知られてゐるものは四種を數へて居るが、就中ヤダケは最も廣く分布し、次でオカメザサ、ネザサ、ミヤコザサが限られたる場所にのみ群生してゐるのを見る。

草本は前記の如く全數の七割近くを占め、そのうち蔓草は三十六種、莎草類は二十四種、蘭類は十三種、羊齒類は七十九種を數へて居る。特に羊齒の多い事は注目すべきことであつて、全數の約一割を占めて居る。

草本中特に珍らしいものでは「ミノオシバ」がある。此れは最近發見された新種で、學名は目下牧野博士の手で研究中であるが、假に和名「ミノオシバ」と命名された。イネ科に屬



圖一十第 「バシオノミ」しせ見發近最

し寫眞の如き形である。尙廣く分布し數多く生育してゐるものにはツルタガラシ、ミカヘリサウ、タカヲキヤウ、クワツ、ナガバタチツボスミレ、羊齒類ではヒトツバ、ノキシノブ等であつて、場所によつては他種を交へざる純群落もある位である。

就中ツルタガラシは瀧附近に最も多く、これのみの大群落を見るのである。このものは高山植物の稱あるハクサンハタザホと同種である。ただハクザンハタザホには軟毛が澤山にあり、葉面のものには毛が全く無く、極く平滑な表面をしてゐるの差があるのみである。然しこの兩者は同じものであつて、高所に至るに従ひ徐々に毛を生じてゆき、高山に到つては遂に完全なハクサンハタザホの形態となるのである。近くには伊吹山に於て麓から頂上に登るに従ひ、全山に繁植してゐるツルタガラシからハクサンハタザホへの變化を精密に觀察することが出来るのである。これは十字花(ナタネ科)に屬するもので、純白色の十字形の

小花を穂狀に澤山つけて咲き亂れた姿は、まことに可憐なる容姿のものであり、一面白色の雲にて覆はれたるが如く、高山ならぬこの箕面溪に於ても高山植物の美観は充分に味ふことが出来ると思ふ。曾て牧野富太郎博士が驚歎せられた程であり、近畿に於ける唯一の大群落地である。又ミカヘリサウは關西固有のものであり、淡桃色の美しき花を開き、人をして見返らさないでは置かないと云ふ程に優美艶麗なものであり、ミカヘリの名もこれによつておこる。

ヒトツバは羊齒に屬するものであり、只一枚の葉しか無いのでヒトツバの名稱がある。これは暖地のもので、近畿地方はその分布區域の北限地となつて居る。殊に攝津より北方には先づ無いと云ふても間違ひは無い。それが北限地に當る箕面に於てのみ盛に生育繁茂し、その以外の地域には絶對に見ないのである。勿論土地が瘠地であることが、その分布を妨げてゐるのであるかも知れないが、同じ沃地つゞきの奥地即ち勝尾寺附近には、最早その姿を見せない。これらの點よりしてヒトツバは箕面の溪間のみ限つて生育し、他にはないのである。即ち箕面はヒトツバの近畿地方に於ける北限地としての一大繁茂地と云ふことになり、分布上より見て實に重要な役割を演ずるものである。箕面附近にて俗にヒトツバと稱してゐるものは此の種でなくして、ミツデウラボシの事を云ふてゐるのである。形が似て居り一枚の葉を有するのみであるが大變小形で高さ二三寸のものが多く、葉の質も前者は革質で厚肉であるが、これは膜質の薄いものである。良く生育すれば大形とな

り、高さ一尺許り、葉身は五寸位となり、深く三つに切れ込んでミツデの如き形をなす。故にミツデウラボシの名があるのであつて、眞のヒトツバとは全然區別さるべきものであり、注意を要す。

草本中群落をなしてゐるものには、マネキグサ、エンレイサウ、ウハバミサウ、アヲネカヅラ、カテンサウ、ヤブメウガ、タニジャカウサウ、クリハラン、イハオモダカ等がある。マネキグサは暖地のもので、裏山の溪間に大群落をなして居るのは珍しい現象である。又アヲネカヅラが瀧附近の岩面上に大群落をなしてゐるのも珍とすべきである。これ等の純群落地は壯觀を呈して居り、實に見事なものである。

蘭類は最も人の好むもので、美しいものは心なき人や植物を取扱ふ商人によつて容赦なく取去られるので、他の草花に比し繁植力の弱いランはともすると種族の絶滅する機會が多く、他地方に比しその種類の少ないのは、一つにこれに原因するものと思はれる。現にウテフランの如き優美なるものは今や全く絶滅して仕舞つた。十年前に採集せる標本が自分の手元にあるのみで、其の後に於て完全に取盡くされたものである。其の他ギンラン、エビネ、サイハイラン、ミヤマウヅラ等の美花も年々少なくなつて行く。ラン類のみならず、他の美花草本もみな悲觀すべき運命にあることは眞に惜しいことであり、大いに考へざる事である。

植物の性質より考へると、南部即ち暖地性のもの二百三十四種、中部のもの即ち近畿を中

心として分布せるものは五百四十二種の多数を占め、北部のもの即ち寒地性のものは僅かに十數種を數へるのみである。この他、歸化植物十種、栽培植物十五種となつてゐる。即ち近畿を中心とするものは約七割を占めて居る。これは當然のことである。これに對して南部のものは約三割近くを占め、北方のものは僅かに一割四分足らずである。これによりて考へて見るに、この地域は中部のものを主とし、それに暖地生の分子を多く含めるを以て、どちらかと云へば、全體は暖地の傾向を多く有してゐることになる。それにかゝらば、落葉樹が數多く、木本約二百六十六種の内約五十種足らずが常綠樹で、他の八割餘は全部落葉樹となつてゐる。のみならず、數に於ても落葉の方が多數を占めてゐるので、造林地を除けば、あとは冬期には寂びれて仕舞ひ所によつては常綠樹の一本も無い場所も見受けらるゝ位である。夏期薄暗く繁つてゐた茂みは明るくなり、下草も葉を失ふて地面を現はし實に物足りなく淋しい感がある。これは尙寒地の傾向を幾分含んで居る事を示すものであらうが、兎に角、箕面は植物の種類より見て暖地の傾向を有する中部地方の植物景觀を表現してゐるものであらう。

イロハモミヂ、ツルタガラシ、ウラジロウツギ、シラヤマギク等は最もよく見受けるものであるが、此等は中部の代表種とも云ふべきものである。

北部のものでは、イハナシ、ヒメヤシヤブシ、アカソ、カリガネサウ、ワウレン、羊齒ではコタニワタリ、リヤウメンシダ等が先づ普通な北部代表種であらう。南部のものは數多いものか

ら順次記せば、木本では白花ウンゼンツツジ、ヤブツバキ、イヅセンリヤウ、ハネミイヌエンジュ、カナメモチ、イヌザクラ、アカメガシハ、ヤブニクケイ、シラカシ、シラキ、ヒメイタビ、キバナツクバネウツギ、キガンビ、ナンテン、ヒメウツギ、コジヒ、ヲトコヨソメ、ヒメシヤラ、フユザンセウ、クロバヒ、カゴノキ、コバンノキ、シロダモ、アハブキ、アヲガシ、カナクキノキ、タラエフ等である。草本ではナガバタチツボスミレ、アキチヤウジ、マネキグサ、ヤマミヅ、シウブンサウ、ハダカホホヅキ、タニジャカウサウ、ヤマルリサウ、ツボクサ、ジンバイサウ、クチナシダサ、アラホホヅキ、ハバヤマボクチ等が最も普通に見受けるものである。又アラホホヅキは次でハバヤマボクチの自生せることは分布上大いに注目し値する。又アラホホヅキは次で珍とすべきものである。

羊齒は大部分暖地生のものにして、ハコネサウ、コバノヒノキシダ、チャセンシダ、イハトラノヲ、ビロウドシダ、ヒトツバ、コバノイシカグマ、シケチシダ、ノコギリシダ、キヨタキシダ、ノキシノブ、アラネカヅラ、井ノデ、ヒメカナワラビ、オホバノ井ノモトサウ、コモチシダ等は最も廣く分布し、又大群落をつくり生育する暖地生のものである。

以上より見るも、箕面は種類に於ては暖地生のものは僅に全數の三割足らずであるが、本數に於ては遙かに中部生のものを凌駕し、又大群落をなす大部分のものは皆暖地生のものである。事實箕面を一周する時は暖地生のものが最もよく眼につき、殆んど大部分を占めてゐる。其の間僅かに中部生のものを認める位で、寒地生のものは極く少なく、時には眼に

とまらぬ事もある位である。此の事實よりしても箕面は種類に於ては中部のものを代表するも、事實は暖地の分子を多量に含有し暖地の性質を表現せるものと斷定することが出来る。

箕面は遊園地として有名なるのみならず花卉に於ても亦有名である。春はサクラ次でツツジ、新緑の美、秋は紅葉特にモミヂの紅葉は有名で實に近畿地方の各所のものに比して最も美しく紅葉するを以つて古來より名がある。

カヘデ科に屬するものは、イタヤカヘデ、ウリカヘデ、オホモミヂ、コハウチハカヘデ、イロハモミヂ、タウカヘデ、チドリノキ、ヤマモミヂ等であるが、その内最も觀賞價值のあるものはオホモミヂとコハモミヂとである。オホモミヂはイロハモミヂに比して数は少ないが、それでも到る所に分布し點々として生へてゐる。相當の大本もあり、直徑八間餘りに枝を擴げてゐるものも數本見受けける。紅葉の美しい事は邦産カヘデ中の最優秀なるもので昔から色々の模様や圖案や蒔繪などに描かれたり、又芝居の背景や花簪などの造花に用ひられてゐるモミヂは、皆このオホモミヂの姿を寫したものである。オホモミヂが一番綺麗で人眼につき安い爲、自然これが用ひられる様になつたものであらう。箕面で土産ものとして賣つてゐるモミヂの揚げものやモミヂ煎餅は、皆オホモミヂの葉を使用してゐるので、色が最も美しく残ると云ふので用ひられてゐる。このオホモミヂが多い爲に、箕面は秋に一際目立つて美觀を増して見える。

次に紅葉はさまざま美しくは無いが、新緑が美しいのと葉が細かくて綺麗なのは、何と云ふてもイロハモミヂである。別名はタカヲモミヂ或はコハモミヂとも云ふ。又此地方では新緑の美しい事から箕面山青柳楓又は箕面山楓と稱して、その新緑を賞でてゐる。イロハモミヂは、近畿地方では、あちこちにあるもので箕面のみに限つたものではないが、箕面附近即ち北攝地方ではあまり見受けぬ爲、箕面特有かと思はれ、前記の如く箕面山青柳楓とか或箕面山楓とか云はれてゐるものらしい。何れにせよ、箕面山程澤山に繁殖してゐる所は他はになく、全く特異の現象である。溪間に最も多く分布して居り、塙所によりてはイロハモミヂの隧道を通る様な所もあり、又大本となれるものも多く、徑二尺に達するものも屢々見受けられる。事實紅葉はあまり美しいものではないが、新緑の美しい事は數多い種類中一番であつて、箕面の新緑は殆んど全部イロハモミヂの爲であると云ふても良い位であり、眞に壯麗なものである。特に瀧の左右に立つた姿は實に優美であり、瀧の美觀を添ふこと甚大である。

春の花はサクラとツツジとである。サクラは主として花の美しい自然生のものでヤマザクラ、ケヤマザクラ等であり、又栽培品ではソメイヨシノ、ミクルマガヘシザクラ、シバヤマザクラ、フゲンザウザクラ、ベニフゲンザクラ、ウコンノサクラ、イトザクラ、カンザクラ、ヒガンザクラ等である。植栽されたものとは云へ、相當に年月を経て居る爲に、自然生の如き様子をなせるもの多く、相當の大本もあり、徑一尺餘りのものは到る所に見られるのである。ソ

メイヨシノは花付きよく最も華麗次でヤマザクラ、ケヤマザクラが優美である。ミクルマガヘシ、シバヤマ、フゲンザウは大輪で艶麗ベニフゲンは最も濃艶である。ウコンノサクラは一寸風變りな淡黄緑色を呈して居り、至つて清楚な感じのする花である。春早く開花するものにはヒガンザクラ、エドヒガン等があり、又枝の垂れて居るものにはイトザクラがある。この内ケヤマザクラは若葉の芽出しの時が美はしく、俗に赤芽と稱して若芽が赤色を呈してゐるのである。シバヤマも之に次いで若芽が美しく赤色を呈してゐる。

櫻の美は今更書き立てる程でもなく日本の國花として有名なる如く實に清艶なものである。全山白雲の棚引けるが如く淡紅色に覆はれた箕面の溪間は實に美はしく、關西の名勝としての價値は十分ある。

此より少し時期が遅れてツツジが咲く。ツツジにも色々種類があり、ヤマツツジ、モチツツジ、レンゲツツジ、ミヤコツツジ等は最も廣く分布せるも發育は良い方ではなく、株も小さく又花も數少なく餘り美しくない爲に人目を惹かないのである。

有名なのはコバノミツバツツジであつて、溪間に廣く分布し、殊に躑躅ヶ丘と名付けられてゐる附近は特に大群落をなして生育して居り、葉に先んじて鮮紅色の花が澤山かたまり咲き揃つた姿は實に美事である。一面花の海の如き眺めである。花後葉が三枚づゝ梢端に輪生するので他の種類とは容易に區別される。この地方の人々は之をミヤマツツジと稱へてゐる。關西地方では極く普通のものであるが斯くも澤山にかたまつて群落をなし

て居るので有名である。

次に有名なのは白花ウンゼンツツジである。これはコバノミツバツツジに比すれば分布區域も狭く、觀音堂の裏山の一部分にのみ最もよく繁茂せる大群落を見せてゐる。葉は極く細かく、その割に比較的大輪の白色の花を無數に簇開し、花の咲き揃つた時は一面霞のかゝつた様で實にのどかな眺めのものである。

箕面は以上の特殊な花卉で有名なる許りでなく、又鬱蒼と繁茂せる樹木そのものが都會人の大きな憧憬である。植物動物の寶庫たる箕面の樹林は、都會人にとりて最も近く最も親しみ易いものであり、樹林の美、樹林の涼を慕つて來る人は可なり多い。

前記の如く、箕面溪間は植物が豊富に生育せるにかゝわらず、溪間以外の高丘地は、何れも造林地を除いては荒寥たる瘠地であつて、僅かに赤松が生育してゐる位であり、其の間強健な喬木類や石楠類が疎らに生育してゐると、土砂防止用として植えられたオホバミネバリが繁茂してゐる位であつて、溪間とはとても比較にならぬ貧弱さである。かくの如き荒寥たる地域中に存在する箕面溪は、恰も大砂漠中に於けるオアシスにも比すべき沃地であるから完全に保存されたき唯一の樹林である。

以上の考察により、箕面溪は植物上より見れば、全體としては南部地方に屬し、植物の種類は豊富にして珍草奇樹に富み、生育状態は良好にして大木老樹をよく保存し、大阪府在攝津中に於ける唯一の植物繁茂地であり、又大阪府在攝津植物の代表地として重要な役割を

演ずるものであり最も貴重なる地域である。又都會人の最大慰安所としてなくてはならない幸福の溪であらう。

(後掲植物目録及び寫眞圖版を参照されたい)

五〇

六 動物分布の状態

箕面山一帯は禁獵區に屬するを以て種々の鳥獸生息し時に鹿のこの山に遊びしこともありと見え古い記録等にも見えてゐる。猿の來り遊ぶことは今日も尙屢々見るところにして、初夏の候ビハの實る頃は遊覽者もよく谷間に群猿を認むることは屢々ある。特に栗の熟する頃にありては箕面瀧附近には多くの群猿林上に連るを見る。リス、キジ、ヤマドリ、の如きも亦多く生棲する。就中有名なるものは河鹿と鰻となり。

鰻は瀧壺に多く生息し、見物人若しユデ卵の類を水中に投ずるときは數分ならずして大鰻の水底に顯はれ出づるを見る。太きものは胴周り五六寸に及び、忽ちにして數十尾に及び、實に山中稀に見る奇觀を呈す。

河鹿の生棲は瀧より一ノ橋に至る溪流の至るところに分布するが、其の音聲の玲瓏たる響きは夏の夕涼み客をして驚歎措く能はざらしめる。趣味的に河鹿を蒐集してその音色を研

究せる農學博士原熙氏に、先年來箕面の河鹿を送りて他地方産のものと比較研究を依頼せしが、稀に見る美聲を本箕面産の河鹿に聽き得たりとの報告あり。これに依つて見れば箕面の河鹿は確かに箕面名勝地の一要素たるの價値あることを信す。

次に昆虫の生息に至りては、その種類の數多なるに於ても、又珍種の生息する點に於ても、本邦中稀に見る寶庫と稱せられ、昆虫學界に於て有名な自生地とされたり。

先年昆虫學專攻の戸澤信義君に調査を依頼せしが、その報告は凡そ次の如し。
箕面は溪谷の深き地形の多岐繁茂せる植物の種類多き等の理由によりて極めて豊富な種類の昆虫が棲息して居る。加ふるに交通の至便は實に理想的な採集場とも言ふべく、此の廿年來相次いで起つた大阪の熱心な採集家達によりて採集し、調査せられた昆虫の種類は實に夥しい數である。従つて是等の箕面産の昆虫を材料として今まで研究せられたものも甚だ多く、既にミノモの名を冠したる學名を有するものも亦少くない。

此處に算へ上げられた目録は主として故芝川又之助、野平安、藝雄、竹内志藏、江崎悌三の諸氏及び私の採集標本を材料として、其の内適確なる學名を有するものゝみを撰んだものであるが、是等は實に過去廿年來人々の絶間ない努力と不斷の研究の尊い記録と言はねばならない。

さて斯うして算へて見ると、箕面の昆虫は生物學上舊北洲系、即ち日本では所謂高山性又は北地と稱せらるゝものゝ多きに氣付く。例へば蛾に於いて、クロウスタビガ、エゾヨツメ、

五一

ヒメヤママイ、クロフシロヒトリ、ニトベエダシヤク等蝶に於いてオ、ウラギンヘウモン、ミスジテフ、ホシミスヂ、ウラギンシバミ、ダイセンシジミ等蜻蛉に於いてミルンヤンマ、タカネトンボ等、その他、北海道及信州高山地に産し、この附近では箕面以外餘り獲られないものが甚だ多い

思ふに箕面は樺太北海道を通じて南下した舊北洲系統(歐洲系統)の昆虫が日本アルプスを含む本州の脊梁山脈の高山を飛石の様に傳つて、遠く伯耆大山まで延びて居る道程の重要な一驛を占むるものであらうかと考へられる

註 (1) 箕面に對し京都愛宕山及貴船谷は、各種昆虫分布状態を見るに相對照する位置にありて相方共通するもの多し

是に反して又熱帯系統の昆虫もあり 例へばオ、シモフリスバメ(蛾)、オナガミヅアラ(蛾)ヒメズメバチ(蜂)等は箕面を除いて他では餘り見ないし、可成興味深く感ぜられてゐる

要するに箕面はこれによつて本邦昆虫分布學上、如何に見逃すべからざる重要な場所であるかが立證出來よう

狭範圍に言つても、箕面の昆虫相には他にはない特徴が甚だ多い

第一に蛾の非常に多いことである 此處に擧げられたのは僅か六百種内外に過ぎないけれ共實際はモット多く産する 昔電車の開通當時驛の前に立てられた櫻セメントの電飾塔に毎夜集つた無慮數千の蛾及びその他の昆虫は、如何に採集家達を狂奔せしめたかは

今に話題になる位である 箕面は又全國に魁け燈火による昆虫採集を初められ、且つ最も多く爲された故に比較的多く採集し調査せられて居る 今日に於ても尙燈火採集、糖蜜採集等によつて年々採集せらるゝ數は實に夥しい 就中最も注目すべき珍しい蛾としてはクロウスタビ、エゾヨツメ、オ、シモフリスバメ、ブドウスカシバ、イボタガ、モクメガ、オニベニシタバ、シロシタバ、ナカジロトガリバ、ニトベエダシヤク等である

第二に蝶の多き事青葉がくれに窺窺たる輕羅を翻へして色々の蝶が舞ひ飛ぶ有様は箕面に缺くべからざる點描がある 種の數は凡そ八十種、最近になつても尙新發見の蝶は絶たず 又居るべくして未だ發見し得ざる蝶も二三ある等、極めて興味深く感ぜられて居る又各種類を通じて夫々の個體數も甚だ多く、就中テングテフの多きは全國比類なく、五月初め、椋及びその附近の立木と言はず垣根と言はず所構はず匂ひ廻る成熟幼虫の群、それらが爲す化蛹の夥しい鈴なり續いて中旬陽地に集ふ蝶の群飛は、全く筆舌に絶した偉觀である尙此の蝶は一年を通じてその影を没せず、冬日と雖、陽麗かなれば雪の上にも飛び交ふ有様である 然もこれは他では決して絶無にあらざるも、さまで多からざるは妙である 此處で珍らしい蝶と言へばモンキアゲハ、ヒカゲモドキ、オ、ウラギンヘウモン、オ、ムラサキウラギンシバミ、ダイセンシバミ、アラバセ、リ等である

第三に脈翅類、積翅類の多き事である 是等の幼虫の成育には深き溪流が缺くべからざるものであり、箕面は此の意味に於ても北海道の定山溪、下野の日光、信州の島々谷、京都の貴

船谷と並び稱せられて居る。既に脈超類は岡本半次郎、中原和郎、兩博士等によつて研究せられ、ヒロバカゲロウ、クサカゲロウ、センブリ等に就いての發表もあつた。

第四に寄生蜂、葉蜂の多き事は特記し得べく、これは寄主となる蝶蛾の多き事が前者の豊富なる原因をなし、食餌關係から植物の種類の多き事が同じく後者の多種多産の結果を致すに至つたものであるが、前者は目下私のもとで後者は竹内志藏氏により研究せられ、既に此處を原産地とする葉蜂を着々發表しつゝある。

第五に椿象の多きこと。椿象は有用植物の著名なる害虫であるが、一度に幾種類も發生する事は、まづ稀である。所が今より十數年前勝尾寺の境内に於ける數本の楊に發生した椿象は、殆んど日本内地産の大部分を網羅して、此の僅か數坪内に發見せられた觀があつた。その後、件んの楊は刈られ、可惜名だゝる椿象もその影を没して今は餘り見ない。

第六 目錄に擧げられたる處ではガ、マンボ類が甚しく多い。是れには、曾に多産なる以外に、當地の採集家達が相競ふて此の類の研究家なる米國のアレキサンダー氏に送付し、これが研究に資せられたと言ふ經緯がある。

箕面は他にも尙多くの特異なる昆虫相を示して居るけれど、共一々此處には擧げない。大體に於いて箕面には食葉性及びそれに關聯した昆虫が多い、食肉性殊に砂地、河原等に棲む類は甚だ少い。此れは地勢、山容の然らしむる處と觀じて好い。又前にも述べた様に北地性の昆虫が熱帶性のそれに比して極めて多い。

只此處に最も惜む可き事は、箕面が段々開けるに連れて昆虫がその反比例に減少しつゝある事である。十數年前まで夥しく居つた或る虫が、今日に至つて極めて少くなり、甚しきは絶滅に瀕すると言ふ如き例は決して稀ではなく、中には後の目錄に載せられ乍ら近來殆んど見るを得ざるものもあり、一例を言へば、ゲンダラテフの如きも、數年前までは瀧安寺附近にまでザラに飛んで居つたのが、昨今では瀧より下にては此の可憐なる容姿を絶對に見るを得ず、年々獲れる數も餘程少くなつた。餘談乍ら雨の夜更け、瀧附近で夜間採集しつゝある時、採集家達の膽を冷した野猿の叫聲も、此の數年來減少に聞く事無く、晝間小鳥の啼聲すらも随分減じた様に思はれる。斯くて一般に知られて開かれ行く箕面は喜ぶべきも、一面斯かる貴重なる自然科學の寶庫が此の儘空しく凋落の悲運を辿りつゝあり、他日悔を千載に残す事あるべきに對しては、著者は常に惜みて尙餘りある嘆を抱くものである。昆虫減少の原因は私の遽かに量り知るを得ざる所ではあるが大體稱へられて居る説では

一 營林事業の發達

二 雜木材、下草の伐採

三 道路の改修、家屋の建築

四 登山者の増加、住民の増加

五 植物、昆虫採集家の増加等を擧げて居る

此の時に當つて箕面を名勝地として指定せられ適當なる保護設備を施してこれが頽勢を挽回せしめ様とせらるゝ府の處置は甚だ多とすべく實に時宜に適した企と言はねばならない 識者はこれに満腔の感謝を以て賛意を表するは勿論これによつて今日及び將來の自然科学の研究者愛好者達の蒙むる恩恵ひいて箕面全山の動植物の受ける聖代の恩澤を思ふ時私は涙ぐましいまでの喜びを感せずにはをられない そして今後一般人と雖常に都市より斯く近接せる場所に於いて便宜且つ短時間の内に動植物の自然に生育せる状態に接して趣味を養ひ清新なる氣分を味ひ得るであらう 箕面の如きは實に得がたい理想的な自然公園と言はねばならない(後掲昆虫目録及び寫真圖版を参照されし)

箕面を原産地とする新種

BIBLIOGRAPHY OF NEW SPECIES COLLECTED

FROM MINOO.

Alexander, C. D.

1922. *Bibiocephala japonica* (Diptera), (Leg. Takeuchi, K.) *Insector Insectae Menstuns*, vol. III, pt. 4-6, p. III.
 1922. *Limnobia anthracia* (Diptera), (Leg. Takeuchi, K.) *ibid.* vol. X, pt. 10-12, p. 180.
 1922. *Ormosia confluenta* (Diptera), (Leg. Takeuchi, K.) *ibid.* *ibid.* p. 182.
 1922. *Dactylabris longicauda* (Diptera), (Leg. Takeuchi, K.) *ibid.* *ibid.* p. 184.

1924. *Catocha nipponensis*, (Diptera), (Leg. Takeuchi, K.) *ibid.* vol. XII, Nos. 4-6, p. 86.
 1924. *Gnophomyia nycteris*, (Diptera), (Leg. Esaki, T.) *Ann. Entom. Soc. Amer.* vol. XVIII, No. 1, p. 68.
 1924. *Dicranomypha panniclas*, (Diptera), (Leg. Esaki, T.) *ibid.* vol. XVII, No. 1, p. 433.
 1924. *Tipulis futilis*, (Diptera), (Leg. Esaki, T.) *Ann. Mag. Nat. Hist. Ser. 9*, vol. XIV, p. 459.
 1925. *Nelphrotoma subpallida*, (Diptera), (Leg. Esaki, T.) *ibid.* vol. XV, p. 401.
 Matsumura, S.
 1916. *Leptogaster minomensis*, (Diptera), (Leg. Shibakawa, M.) *New Thous Ins. Jap.* vol. 11, pt. XXI, fig. 6, p. 431.
 1916. *Eumerus alboguttatus*, (Diptera), (Leg. Shibakawa, M.) *Ent. Mag. Jap.* vol. 11, pt 1, p. 19.
 1917. *Syrphus Shibakawae*, (Diptera), (Leg. Shibakawa, M.) *ibid.* vol. III, pt. 1, p. 36.
 Nakahara, W.
 1915. *Stalis melania*, (Neuroptera), (Leg. Esaki, T.) *Ent. News* vol. XXVI, p. 158.
 Sharp, D.
 1873. *Cybisier Lewisianus*, (Coleoptera), (Leg. Lewis) *Trans. Ent. Soc. Lond.* p. 46.

[脚註] Sharpの記載には……A. Single Specimen only has been found at Minoo, near Osaka……とあり、1868年時代、交通不便の當時にあつて、如何にして Lewis が箕面を發見せしかを想像するは興味深き事である。Sharpの記載は本種のみであるが、Lewisは實に今より63年前既に箕面に於ける昆虫採集の草分をなしたるものと云ふべし

Takeuchi, K.

1929. *Macroemphytus dentizae*, (Hymenoptera). (Leg. Takeuchi, K.) Trans. Nat. Hist. Soc. For. vol. XIX. pt. 105. p. 498.
1929. *Macroemphytus abliabris*, (Hymenoptera), (Leg. Takeuchi, K.) *ibid.* p. 499.
1929. *Taxonus japonicus*, (Hymenoptera), (Leg. Takeuchi, K.) *ibid.* p. 504.
1929. *Parasiobla minomensis*, (Hymenoptera), (Leg. Takeuchi, K.) *ibid.* p. 506.
1929. *Hemitaconus minomensis*, (Hymenoptera), (Leg. Takeuchi, K.) *ibid.* p. 511.
1929. *Hemibeleles nigriceps*, (Hymenoptera). (Leg. Takeuchi, K.) *ibid.* p. 514.
1926. *Hemibeleles athaliodes*, (Hymenoptera). (Leg. Takeuchi, K.) *ibid.* p. 515.

七 保護及開發

箕面山は以上の如く風光明媚なる一大名勝地としての素質を有し、古き歴史と新らしき施設をも兼ね備へたる地なれば、これを適當に管理し、相當に保護並に開放をなすに於ては、一般社會を裨益するところ甚大なるべきや論を俟たず

翻つて箕面山の現状を見るに、その一部は社寺境内となり、一部は府立公園となり、又一部は國有保管林となり、又一部は民有林となり、各その目的を異にする立場よりこれを管理するを

以て、その間に一貫したる統制を見ること難く、特に山として最も肝要なる入口の部分が多く民有林によりて占めらるゝを以て、動もすれば開拓されて街衢を形成せんとし、又如何はしき廣告塔料亭等を新設する如き企ての起ること屢々なり

されば茲に各種目的の下に維持されつゝあるこれ等全山を一體として統制ある管理の下に置くことの必要を感ずること切實なるものあり、余は大正六年以來詳かにその現状の調査を行ひ、これが報告を基として、これを大阪府史蹟名勝天然記念物調査會に謀り、名勝地として文部省の指定を仰ぐ事の必要を述べたり

大阪府史蹟名勝天然記念物調査會は、昭和四年七月これを議して箕面山名勝地の保護の急務なるを知りて直ちにこれが指定案を決定せり

然れども大阪營林局に於ては自ら他の意見を有し、該國有林地の假指定に次の如き意見によりて同意せず、茲に於て柴田知事は急ぎこれが保護策を樹立するの必要なるを思ひ、又營林局の意見も敢て當局のそれと齟齬せざるを知り、昭和五年九月三十日付を以て不取敢國有林を控除したる別記範圍を名勝地として假指定し、風致を破壊する虞ある行爲を取締ることせり、大阪營林局の假指定に對する意見は

箕面山國有林を名勝地として假指定の件に關し、本年一月二十七日付兵第三一四一號御協議相成候處、當該國有林に對しては、當局に於ても其風致の保存に留意し、慎重に取扱ひつゝあるものにして、將來と雖も其の景觀を毀損するが如き憂は無之のみならず、史蹟名勝天然

記念物保存法は當該物件の現状保存を主旨とするものと解せられ従つて該法律の束縛を受くるに於ては將來一層風致の助長増進を圖り又は必要なる積極的施設を行ふ上に不便不撓却て風景林經營の趣旨を貫徹し難き破目に陥るの虞も有之尙又本件御協議に係る地域は景勝地たる現公園主要部より望見し得ざる地位に在りて同公園と一體にして名勝地として取扱ふを要せざるものと被認候條旁々以て國有林は該假指定區域より御控除相成度其筋とも協議の上右及回答候也

右は大阪營林局より示されたる意見なるが名勝地としての指定は決して舊態の絶體的保護を要求するものに非ざればこれが指定の曉と雖も同局の言ふが如き「風致の助長増進を圖り又は必要なる積極的施設を行ふに不便不撓云々」の虞れはなかるべしと信す

世間往々にして名勝地と天然紀念物との間に混合したる觀念を以てこれに對し名勝地の保護に對し動もすればこれを恰も書畫骨董品の如き取扱ひを敢てせよと論ずる者あるも名勝地の如きは常に成長し常に變化する植物を主とせる場合多きを以て若しそれ保存に名を藉りて一草一木をもこれに手を觸るゝことなく放置するときは必ずや百年を出でずしてそこに自然界の生存競争顯はれ強は弱を殺し適は彌々繁茂生存して遂に雜木雜草の如き強健而も觀賞價值少なきものゝ繁榮により折角の名勝地も臺なしに滅亡するや必せり 今やその類例を既に我國各地の名勝地にこれを觀る宜なりと云ふべし

されば箕面山の將來に關しては常に風致の助長増進に基く適當の林相整理を續行し又一

方適當の保護手入並に名木の補植に努むるよう心掛くべきこそ名勝地としての價值を永久に失はざらしむるの手段なり

特に名勝地は天然紀念物等の如く單にこれを學問の參考品として果又過ぎにし時代の面影を遺す紀念物として保存するの謂に非ずして出來得る限りこれを世人に觀賞せしめ以て宏く萬人に享樂せしめんとする目的を以て特に國家はこれを保護せるものなりと思料するを以て成るべく老幼男女貴賤の別なく一般民衆に容易にこれを利用し得る如き方法を以て出來得る限りこれを開發し或は道路を設け或は休憩所を設備して遊覽に便にして一人たりともより多くの人の心を樂しましむる如き所謂民衆向きの趣向を以て一帯の施設を行ひ徒らに一部風流人士の風景觀を以て律する如きは面白からず 特にその地區が公園として民衆娛樂地となれる本地域の場合には之れが爲に時に多少の犠牲を拂ふことあるとも將來衆人の欣びを贏ち得る如きものなるに於ては周到の用意を以て開發の手段を採りてこそ眞の名勝地たるの價值を加へ併せて永久にこれを保存する所以なるべし 箕面山の保護開發に當りてもこの趣意により敢て過ちなからんことを要す

(一) 假指定となりたる土地

大阪府豊能郡萱野村大字芝 一六三番 一六四番 一六五番 一七〇番 一七三番 一七五番
 自一九一〇番ノ一至一九一〇番ノ三 自一九二〇番ノ一至一九二〇番ノ五 一九三番

一九四番ノ一 一九四番ノ二 一九五番ノ一 一九五番ノ二 自二〇六番至二〇八番
自二一六番至二二一番 一二四五番

同所大字池島飛地 四四番

大阪府豊能郡箕面村大字平尾 自二〇番至四〇番 自八一番至八九番 自一〇三番至一二

三番 一二四番ノ二 一二六番ノ一 一二六番ノ二 一二七番 一二八番ノ二 一二

九番 四〇三番 四〇六番 四〇七番 七三三番ノ一 七三三番ノ二 自七三七番至

七三九番 七五五番ノ一 七五五番ノ二 七五六番 七六六番ノ一 七六六番ノ二

同所大字牧落^{四一}番ノ四^{八七}番^{八七}番ノ四^{七九}番ノ内三〇〇〇坪

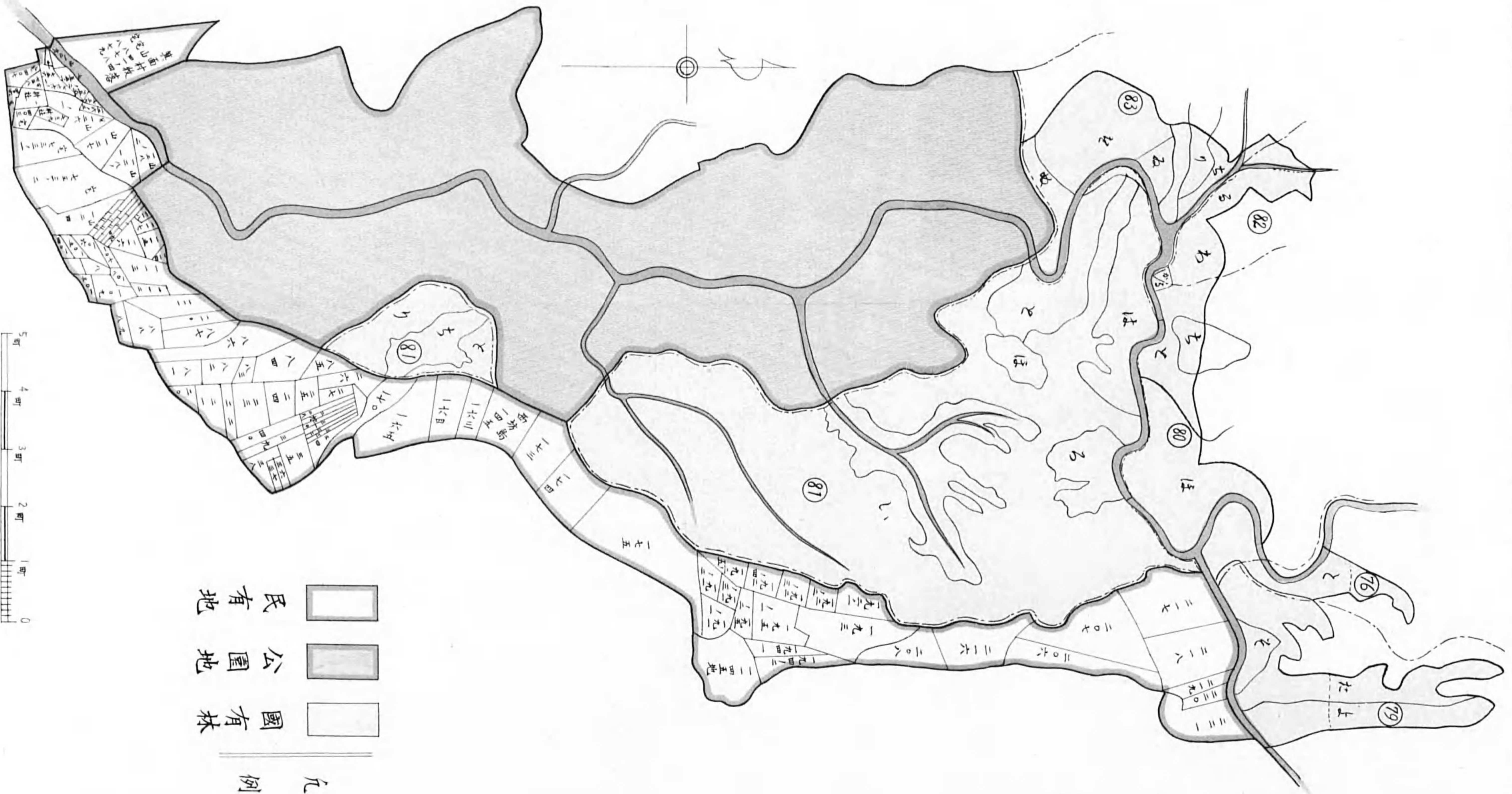
同所大字平尾 國有寺院境内地三四二八坪

同所 箕面公園地二五六一五二坪(府有地、公園)

河川敷

(追加)

名勝・箕面山地籍圖



第十二圖 名勝箕面山地籍圖

(二) 假指定地域の土地所有者又は管理者

所有者又ハ管理者	住 所	所有地々番又ハ坪數
西川 太十郎	豊能郡萱野村芝	萱野村大字芝一六三番地
西川 留吉	同郡箕面村平尾	同所一六四番地
石原 長治	堺市榮町三丁目	同所一六五番地
中井 保三郎	豊能郡箕面村櫻井	同所一七〇番地
白藤 武吉	同郡箕面村平尾	同所一七三番地、二〇六番地、二〇七番地、二〇八番地
西尾 伊太郎	同郡萱野村如意谷	同所一七四番地
小川 善兵衛	南區難波元町二丁目二四八九	同所一七五番地
松井 善太郎 <small>外二十名共有</small>	豊能郡箕面村平尾	同所一九一番地ノ一、一九一番地ノ二
松井 長五郎	同所	箕面村大字芝二〇番地
上田 徳松	同所	萱野村大字芝一九二番地ノ一
中井 ミヨ	同所	箕面村大字芝一九一六番地、一二八番地
上田 寅吉	同所	萱野村大字芝一九二番地ノ二、箕面村大字平尾二二番地、二五番地、二八番地、三二番地、四〇番地
藤井 義一	同郡池田町	萱野村大字芝一九二番地ノ三、同所一九二番地ノ四

大住田之助	豐能郡箕面村平尾	萱野村大字芝一九二番地ノ五
萱野村字如意谷 <small>部落有</small>	同郡萱野村役場	同所一九三番地、二一八番地
林 永太郎	同郡萱野村大字東坊島	同所一九四番地ノ一、二二〇番地
住山政右衛門 <small>他二丁一名共有</small>	同郡箕面村大字平尾	同所一九四番地ノ二
田村善右衛門	同郡萱野村大字東坊島	同所一九五番地ノ一
阪本林右衛門	同郡萱野村西坊島	同所二一六番地、二二七番地
林 伊三郎	同郡箕面村瀬川	同所二一九番地
石垣治郎吉	同郡萱野村大字芝	同所二二一番地
乾 政 男	同郡箕面村役場	同所二二二番地
大川 ツネ	(未詳)	同所二二四番地
天野忠三郎 <small>外一名共有</small>	北區梅ヶ枝町五八五	萱野村大字坊島飛地四四番地
植山松之助	西區立賣堀南通六丁目八	箕面村大字平尾二二番地
藤井兵吉	豐能郡箕面村大字西梅	同所二三番地、二四番地
箕面土地會社	同郡箕面村平尾	同所二六番地
	同所	同所二七番地
		同所二九番地、三〇番地

上田庄太郎	豐能郡箕面村大字平尾	箕面村大字平尾三一番地
中井保太郎	同郡箕面村櫻	同所三三番地、三四番地
古田清吉	同郡池田町	同所三五番地、一〇四番地
繁卷竹藏	兵庫縣川邊郡尼崎市別所一〇二五	同所三六番地、三七番地、三八番地
藤井徳松	豐能郡箕面村大字平尾	同所三九番地
中井巳之助	同所	同所八一番地、八二番地
中井三右衛門	同郡箕面村大字牧落	同所八三番地
山城未三郎	同郡池田町	同所八四番地、八五番地
河内繁次郎	港區大正通ノ三丁目一一一	同所八六番地
上田久留	豐能郡箕面村平尾	同所八七番地、八八番地、一〇三番地
谷田猪三郎	同所	同所八九番地、一〇九番地
西川長治郎	同所	同所一〇五番地、一一〇番地
豊田善吉	東區横堀二丁目一一	同所一〇六番地、一二二番地
武藤善次郎	豐能郡箕面村大字平尾	同所一〇七番地、一一七番地、四〇七番地
上田儀一	同所	同所一〇八番地、一二三番地

久保久一郎	豊能郡箕面村大字平尾	箕面村大字平尾二一一番地
上田千次郎	同所	同所一一二番地
中井種三郎	同郡箕面村大字櫻	同所一一三番地、一一五番地
松井源之助	同郡箕面村大字平尾	同所一一四番地、一二六番地、一二九番地、七三七番地、七五五番地、七五六番地、七六六番地、七六六番地、二
上田伊之助	同所	同所一一九番地
角山宗次	同所	同所一二〇番地
小瀬戸林右衛門	同所	同所一二一番地
住山善平	同所	同所一二四番地ノ二、七三三番地ノ一
西光寺	同所	同所一二六番地ノ一、一二七番地、一二八番地ノ一、一二八番地ノ二、七三九番地
箕面村有	同郡箕面村役場	同所四〇三番地、四〇六番地
渡邊真次	北區曾根崎上一丁目一六三	同所七三三番地ノ二
太田宗兵衛	東區南本町四丁目六四	同所七三八番地
岸本兼太郎	西區長堀南通二ノ五	箕面村大字牧落 ^{四一} 番地ノ四 ^{八七八番地} ノ内三、〇〇〇坪
瀧安寺	箕面公園内	境内地三、四二八坪
箕面川	川敷(追加)	官有地

八 史蹟としての箕面山瀧安寺

緒言

箕面山瀧安寺は豊能郡箕面村にある古刹にして、現今は天台宗寺門派園城寺末に属してゐる。本尊は辨財天を祀り、江州竹生島、相州江ノ島、藝州嚴島と共に日本四ヶ所辨天の一と稱せられてゐる。古くは修験の根本道場として行者の往來繁く、近くは箕面の富として福を求むるもの遠近より群参したのであつた。就中南朝の悲史を繙くものは又當寺に藏する護良親王の令旨を想起するであらう。

寺は瀑布と楓樹を以て聞ゆる箕面公園内にあつて、溪流を挾んで頗る景勝の地を占め、その清幽他に多く比を見ざるものがある。箕面の名勝も、古くはこの瀧安寺の存在によつて開かれ保護されたのであらうが、今はたゞ瀑布と楓樹を口にするものが多く、瀧安寺の由緒を語るものゝ勘ないのは、竊に遺憾とするところである。幸に、本府に於て、此度名勝としての箕面山の調査報告を發刊することゝなつたから併せて史蹟としての箕面山瀧安寺の沿革を略述することゝした。何分編輯の都合上俄かにその起稿を急いだため、資料の探訪も充分でなく、且研究も行き届かなかつたことは甚だ遺憾に思つてゐるが、此等は他日の補正を期して、たゞこゝには僅かに得た調査の概要のみを記するに止める。

一 瀧安寺の草創

瀧安寺は古く箕面寺といはれ、その草創は確かな資料を缺いてゐるため明かにすることができないが孝徳天皇の白雉元年に、役小角が箕面の瀧窟にて苦修練行し、終に龍樹菩薩を拜して深妙の法を受得し菩薩の告示によつて瀧の西側の地を下し荆棘を拓いて草庵を構へ、龍樹

菩薩並に辨財天女の尊像を刻んで安置したに創まると

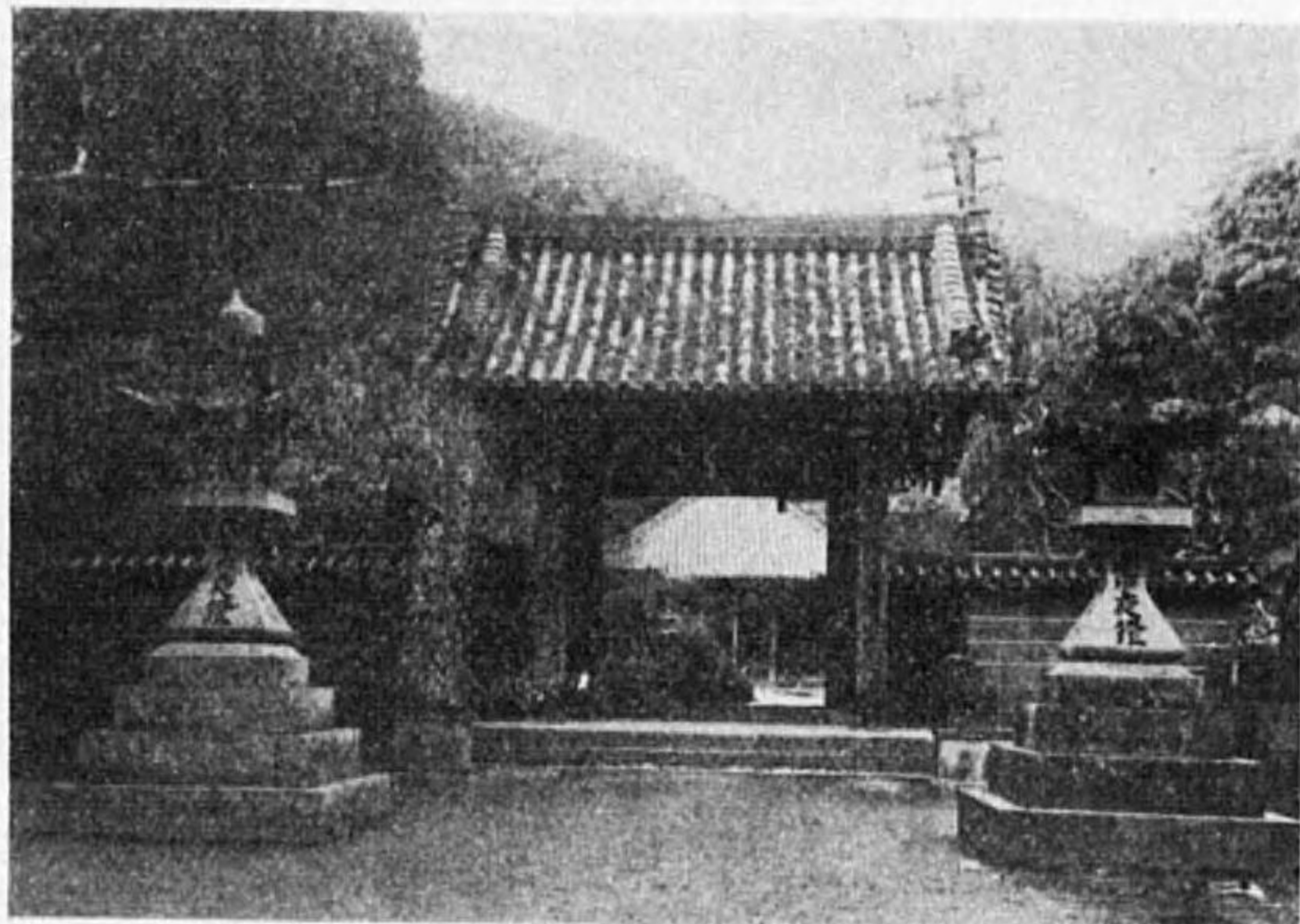
いふのが諸書に傳ふるところである

その最も早く見えてゐるものは伊呂波字類抄で、それには

箕面寺

攝津國之北豐嶋郡之山有二聖跡、所謂箕面寺是也、有瀧三所、最上者雄瀧也、中畧第二者瓊瑤瀧也、中畧第三者、雌瀧也、轉蹀烈峻危、高十五丈餘、降水之粧、泊憑清流爲躰、似休似干瀑布、基淵之澗淵之沖浸形大淵論染、錦繡、頂上之壺者、龍穴也、其色錦班、長三丈餘者、動吐於黑雲、衝黑白雨、四季不定矣

有夢相之告、不日點定瀧下之西脇、對掃荆蕪、曳巖阿、結構草菴、奉造顯安、置等身龍樹菩薩像一軀并



第三十圖 瀧安寺表門

辨才天女形像並花坐、以白鳳廿一年辛未十月十七日甲子、開眼供養畢、祇德善大王、十五金剛童子、爲護法神道、少寶倉置堂内良角、是則非無用心、略頌云

大唐國第三仙人 日本國役優婆塞

金峯山法起菩薩 金峯大政威徳天

箕面寺龍樹辨天 瀧基大聖不動尊

三世施化隨類身 衷情留跡是箕面

と記されてゐる 又元亨釋書(卷十五 力應)には

役小角者、加茂役公氏、今之高賀茂者也、和州葛木上郡茹原村人、中畧文武帝下、勅召小角、小角騰空飛去、中畧便配豆州大嶋、居三年、盡守禁而居、夜必登富士山、行道踏海而走、猶行陸、其疾飛鳥不可及也、黎明歸嶋、大寶元年放廻近京師、凌虛飛去、小角嘗在攝州箕面山、山有瀧、小角夢入瀧口、謁龍樹大士、覺後構伽藍、自此号箕面寺、爲龍樹淨刹、世曰、小角自坐草座、載母於鉢、泛海入唐

と見えてゐる 其他修驗道の舊記、行者本記、役君形生記、役行者顛末秘藏記、百因緣集などにも、役行者が箕面の瀧穴で龍樹菩薩から秘密の法をうくることが面白く語られてゐるが、就中現在瀧安寺所藏の箕面寺秘密縁起には最も詳しく、且興趣深く現はされてゐる、その要を摘記すると

蓋聞大日本國五畿内攝津國豐嶋郡北楞有二深山飛瀧名号箕面寺、聖天之靈地、荒神之驗所也。是則龍樹菩薩淨土、役優婆塞之開山也。以何謂知此等事者、依役行者開闢者也。と書き始めて、役行者の出生、葛城、金剛の入峰修業に及んで、錫を箕面に移すことについき、山高峙、五色雲、靉靄成、奇特之思、驚、喜、瑞之想、心中誓願曰、若我爲所求靈驗無雙之勝地者、速到其所、可落留祈念、向彼山、投三鉢杵、則飛騰虛空、遙入瑞雲、然後行者

(繪)

孝德天皇御宇、白雉元年庚戌歲次季春三月十七日、尋五色雲、求三鉢杵、到當山坂本、忽行逢老翁、則問此山有様、老翁言曰、當山者古佛練行之密場、龍神優遊之秘窟也。此山奥有飛瀧、其東嶺松上、近比放光明、赫奕隨登流、可尋見、當山者此老翁領知也。早奉與行者、速伽藍建立、可佛法興隆、靈驗無雙之勝地、密教相應之靈場也。言訖、忽然不見、依之如老翁教、攀登

(繪)

當山隨行于谷流、渡河傳巖之路伴、峽猿之叫音、越通楞之砌、友山鳥之囀聲、雖見種々異相之形、敢不恐怖、忽過重々嶮難之危、既到瀧本、自麓

(繪)

十八町也。爰飛瀧漲落、其高十六丈、望瀑布之衆泉、日本第二瀧号北瀧是也。日本第一瀧者那知瀧号南瀧也。山籠之行、儀日數同前也。次第登峯、越巖見廻山内、清潔瀧有三處

(繪)

所謂最上第一瀧者、号雄瀧、深陷高三丈餘尺、降水碎傾之響、如雷電鳴動、騰于東楞、捧於法驗之錫杖之跡、深窅殘巖爲脇息之石、高峙有砌、碧淵之底有黑蚰、蟠臥時々、浮出其長三丈餘尺、雖腹行見、更不成殺也。第二瀧者、名瓊瑤瀧、清水遙流、落傳岩之姿、似貫瓊瑤之玉、故号瓊瑤瀧也。第三瀧者、稱雌瀧、最初拜見瀧也。瀧面似箕、故号箕面寺。箕者、聖天三摩耶也。其習有密教、流底巖姿、顯不動明王形像、時々放頭光、示水月無漏之理、瀧頂上有御煮、則龍穴也。其龍錦斑長三丈餘尺、動吐黑雲、俄隱出白日、瀧東有高峯、碧巖岌々、聳出綠松森々、列生衆木、摧風縮、稍歲薰老、檜戴霜、每枝夕悲、而行者自金剛山所投三鉢松上、懸留放靈光、見付之歡喜之淚難抑、感悅之思滿胸、老翁所告示、如指掌、爰知靈神化現也。杵云、飛行三鉢、納社壇、松云、三鉢松、于今在靈峯、行者瀧本一千日山籠例、時初後夜懺法三時行法、每日御坪入堂、御嶺行道不闕不退也。凡當山爲躰、自坂本十八町者、十八道修業、眞言教初門、本尊如意輪觀音相應之地也。云々

辨才天御本地是也

於一山、有八峯八谷、瀧東峯中臺、大日嶽、卽八葉九尊胎藏界曼荼羅也(中畧)

とて、當山の靈地たるを詳述して、行者が信心を凝らして至誠勤修の結果、龍樹大士の淨土に昇至して秘法を受くる狀を載せ、

行者遂詣中央大寶宮殿御前、此時德善大皇普觀十方以後、取佛前香水、灌行者頂、是摩頂、是門前灑水也、則傳法灌頂、則秘密事業

(繪)

不能具記、既入秘密莊嚴內道場、奉拜龍樹菩薩、親受兩部傳法秘密灌頂并蘇悉地三部奧旨給畢、大辨才天女儼然而座、本地聖如意輪化現也、龍樹菩薩曰、汝以所學分見當山配兩部、是淺略一義也、今所授者深秘之奧旨也、凡當山者蘇悉地峯、瀧東上峯是也、自麓十八町者、十八道修行也、十八道者、則出自蘇悉地也、西山者、金剛界曼荼羅諸佛菩薩羅列、東山者、胎藏界因曼荼羅、諸尊聖衆陣列、是初金後胎秘密之重位也、以三部開三方秘密峯也、草木樹林悉現眞佛、可崇敬之、末世行者爲散疑心、灌頂印信賜鉢錫杖、云々、龍宮相傳錫杖是也、然後德善太皇摩頂宣言汝還本所、伽藍建立佛法興隆相續未來之行者、可度末世之衆生、言訖給之後持鉢杖、浮出自深淵底溝、須臾間也、招寄同行義學義賢、語述上件事、自他發露涕泣、欣喜踊躍、盲者如初見、癡者如初言、興隆得力造佛儲匠

(繪)

於瀧本奉拜生身不動明王、運一刻三禮懇念于自彫刻其形像、又化童一人出來、望尊像彫刻

(繪)

行者許之、則不違寸分、明王一體奉造立之、童子者不動明王化現也、宛行者眞影作給歟、可謂乎位之御影哉

(繪)

建立一堂、安置兩軀、今瀧本不動堂是也、加之點定瀧本西楞、切拂樹林、曳夷岩石之刻八面

八臂忿怒形大荒神王、現告曰、敬我供養我致擁護伽藍安穩、人法繁昌、云々、行者如教備丁寧之供具、致懇勸之勤行、供荒神王、奉崇敬之、依之本說伽藍興行之所、于今先行荒神供也、行者建立草堂、手自等身龍樹菩薩像并辨才天女尊像造立比花座奉安置之、德善太皇本地、十五金剛童子本地、同造立之、爲護法神、造寶倉安置堂內良角、是則未來非無用心、後昆善可存念哉、孝德天皇御宇、白雉元年庚戌歲次壬子冬十月十七日、摘花備供具酌關伽其關伽非行者秘所隱水在西峯也、敬遂開眼供養給訖(以下略)

とて、當山の草創に及んでゐる。因に、この箕面寺秘密縁起は三卷あつて、奥書を欠いでゐるため、その作成の時代は明かでないが、書風なり書風なりから推して、徳川初期のものであらう。恐らくは、現今の地に移轉し、後水尾上皇の勅願によつて、御堂再建に着手した明暦前後に、當時の住僧が諸傳を考量して作成したものであるまいか。一時は前後錯亂してゐたが、後に整理したもの、様で、現在詞書も相前後し、且又詞書と繪とも一致しない所もある。こゝに掲げた詞書も、かくもあらんと考へた順序によつたものである。而も詞書も未だ充分の推敲を経てゐないらしく、まゝ文意通せざる所もある。

扱て以上に掲げた諸傳は、何れも傳奇的な多くを含んでゐて、勿論そのまゝに信することは出来ない。尙且、役小角その人の傳記すらが謎の人として取扱はれてゐる形となつてゐるか、當寺の草創も從つて詳かにしがたい事情があるが、これらの諸傳からしても、箕面山が修驗道の靈場として發展の第一歩を踏み出したことは明かである。

修験道に就ては魚澄惣五郎氏が既に興味ある研究を發表せられてゐる(古社寺の研究「吉野金峯山寺と山伏」) 今その一部を引用すると

修験とは咒文を持ち秘法を修して験力を練る意味で、必ずしも眞言の功力を現する密教の修業に限らない。修験道は今でこそ眞言宗や天台宗の系統に屬してゐるが元來それとは別のもので、わが古代におのづから發達した民族的信仰から出てゐると思はれる。即ち俗に云ふ山林佛教のそれからではなく、この信仰の根柢には山岳や森林を神靈視する民族的精神と儀禮とが存してゐて、それが後になつて佛教修行の風が混じたり、支那の道教の思想が加はつて佛教の一派の様になつてしまつた。

もと／＼民族的に發展した信仰であつたから、廣く民間に廣まるべき素地がある。而もそれは山岳及び森林等の崇拜から出發してゐるのであり、山岳重疊のわが國の地理的條件は、この信仰がいかに民族のらしく思はせる。山岳崇拜の心理は、もとより複雑であつた。山岳そのもの、姿の秀麗なものを見て崇拜することは勿論、山岳を一個の活物靈物と見又はさまざまの神が山に住み若くは山に降ると考へる。殊にわが國の如く數多い火山を眺めては、神變靈感の活動として神聖視し、かくて山岳が持つ凄味は倍加して、恐ろしい存在として山岳の崇拜が高められる。かくて山に登ることは、神と接觸冥通するものとし、山中で宗教的な儀禮や修行が起つて來る。即ち山の洗禮を受けるがためには、宗教的な實修を望み、それにはさまざまの咒術的なものも行はれて來る。

かくてわれ／＼の祖先は狩獵の獲物や衣食の材料を與へ灌漑の水を下し、風雨を支配する山祇神や、山口神水分神の存在を認める様になつて來た。これらの信仰に基く儀禮の一部が佛教の普及と共に佛教的となつて所謂行場や靈地などの發生を見佛や神の守護の下に鬼魔を咒伏して業を練り、山岳を巡歴し神社佛閣の別なくこれに參詣するのを修験の行法とする様になつた。神佛習合の思想を誘導したのもまたこの修験の行者であつた。修験道をわが古代におのづから發達した民族的信仰から出てゐて、この信仰の根柢に山岳や森林を神靈視する民族的精神と儀禮とが存してゐて、それが後になつて佛教的となつたとの説は、誠に卓見といふべきで、吉野金峯山寺其他の修験の山々と同様に箕面山の開創も略理解されるであらう。箕面山の帝に山水の美を恣にしてゐるに止まらず、嘗ては龍穴として信せられた岩石のたゞすまひさては自然の威靈を最も直接に且深酷に感じたであらう。瀧の存在は、これらの諸傳にも語られる様に、靈驗無雙の勝地、密教相應の靈場として、古くから篠懸けの柿の衣に笈を掛けた怪しげな旅姿で、日本全土にわたる山岳地帯を跋涉し、到るところに隱現出沒した修験道の行者山伏の格好なる苦修練行の道場となつただらうことは、想像にかたくなはない。かくて修験道の隆盛に伴つて修験道の始祖役行者の箕面の瀧窟に於ける修験傳法灌頂の物語が生まれ、吉野金峯山と共に修験の根本道場として修験の行者の尊崇する所となつたのである。

箕面山の宗教的靈地となる過程は以上の様であるが、この箕面山の靈能は扶桑略記に有力

に傳へられてゐる。即ち村上天皇應和年中天下大旱魃で人民が非常に苦しんだから、勅使を遣はして當時箕面觀音院にゐた叡山の僧千觀僧都をして箕面の瀧壺にて雨を祈らせた所、忽ち豪雨あつて時人蘇生の思をなしたことを載せ、尙其他の神異も語られてゐる。

村上天皇應和二年四月千觀内供於攝州蓑尾山觀音院、作法華三昧宗相對抄。

圓融天皇永觀二年八月廿七日延曆寺内供奉十禪阿闍梨千觀入滅、(中畧)故老傳曰、千觀内供蟄居攝津國箕面山觀音寺、念佛餘暇、撰集法華三宗相對釋文之比天下旱魃、仍公家爲祈雨遣勅使於内供奉十禪師千觀之草庵、于時千觀與勅使相共登向箕面之瀧、々上有大柳樹、顛仆橫覆瀧壺、木上三人並居與坐内供手擎香爐、次居從僧手持水瓶、後侍勅使手執勅祿、千公啓白、致誠請雨、而香爐煙聳自然滿山、從瀧壺内、黑雲昇、虛導師稱曰、法既成就、出山歸房、途中值雨、自瀧至室、可廿餘町、時人隨喜、故傳記也、又同箕面山瀧下、有大松樹、有修行僧、寄居此樹下、八月十五日夜、開月明、天上忽有音樂及櫓聲、樹上有人曰、欲迎我歟、空中答曰、今夜爲迎他人、向他所也、可迎汝者、明年今夜也、又無他語、音樂漸遠、樹下僧初知、樹下有二人、便問樹上人曰、此何聲哉、樹上人答曰、此四十八願之筏聲也、樹下僧竊相待、明年八月十五日夜、至于期日、果如其語、微細音樂相迎西去矣。

こゝでは山の靈感はさることながら、瀧が祈雨の對象となつてゐる。この靈山の寄岩重疊の中から絶へず漲り落ちる瀧の莊嚴碎け散る雷電鳴動するやうな物凄き響に神靈を感じて雨を祈ることは、上古にあつては最も自然な信仰の過程でもあつたであらう。

かくて瀧の西側の地に開創された箕面寺は、歴朝公武の崇敬も厚く、又修験の行場として行者の往來も繁く、そのため寺運も次第に隆昌に向つたやうで、寺記によると、孝徳天皇以來常に御祈願所となり、堂塔伽藍も完備し、塔中は八十餘坊を算へて輪奐の美を極めたといふ。しかしその地が北攝に偏在してゐるためか、史籍に載るものは極めて尠少で、往古の状態は明かにしがたいが、先に述べた如く、村上天皇は應和年中に千觀僧都をして箕面瀧に雨を祈らしめ給ひ、扶桑略記に降つて後堀河天皇の元仁二年正月に當寺が火災の厄に逢つたとき、同年三月五日、右馬寮をして攝津豐嶋郡御牧の内二十石を當寺造營の用途に宛て給ふたのであつた。

○右馬寮下文(圖版第一〇参照)

下 右馬寮豐嶋御牧

可早下行箕面寺造營用途能米貳拾斛事

右馬頭殿御奉加如此、早可令下行之狀如件

元仁二年三月五日

預所右馬允源景基

又鎌倉將軍頼經は、嘉禎三年四月廿六日の御教書を以て、明年の入洛を期して、箕面御堂供養をなして、かねての宿願を果すべきことを令してゐる。

依御宿願、明年三月比、可被供養箕面御堂也、請僧一口布施注文如此、可被沙汰給之狀、依仰執達如件。

嘉禎三年四月廿六日

左京權大夫 ○北條重時

小笠原太郎殿

修理權大夫 ○北條時盛

七八

これらによつて古き時代の當寺崇敬の一斑を窺ふことが出来る

二 南北朝以降

扨て南北朝時代に入ると、箕面寺の輝しい時代が開けて来る。當寺に所藏せる以下三通の文書は當寺が南朝に味方して忠勤を抽んでた深き關係を、有力に物語つてゐるものである。

一 大塔宮護良親王令旨(圖版第九參照)

箕面寺者往古御祈願所也。當今皇帝之還幸御祈禱殊可抽忠勤之由依。大塔二品親王御氣色之狀如件。

元弘三年閏二月廿二日

左少將定恒

箕面寺衆徒中

一 赤松則村禁制(圖版第九參照)

箕面寺者、當今御入洛御祈禱所也。不可有武士亂入狼籍於背此旨之輩者、可被交名注進候、恐々謹言。

正慶二年閏二月廿五日

沙彌圓心(花押)

箕面山衆徒御中

一 箕面寺々僧言上書案

箕面寺々僧等謹言上

欲早被經御。奏聞元弘以來被成下。繪旨致御祈禱之忠節上者、被付御祈禱料於當寺間事。

右當寺々僧等元弘度々被成下。繪旨殊令抽無貳之懇丹奉祈一統之太平畢、加之延元以來、度々被成下。繪旨之間令一味同心殊令擬朝夕不退之勤行所致天下靜謐御願成就也、然者、早被付御祈料所於當寺彌抽懇丹可カ奉祈無疆之寶祚仍粗言上如件。

正平六年二月 日

後醍醐天皇が元弘二年四月二日に隱岐に行幸あらせられたが翌三年閏二月初めには、護良親王より諸國の義軍竝起つて兵勢大に興つたことを隱岐に密奏せられてゐる。やがて天皇は同月廿四日潛に隱岐の行宮を御發禁、出雲野波浦等を経て廿八日に伯耆國大阪港に御着、次で高時等誅に伏し六月四日京都に還幸し給ふたのであるが、第一の護良親王の令旨は、即ち天皇隱岐御發禁の三日前に箕面寺に賜ふたもので、箕面寺が往古よりの御祈禱所である上に、延元以來南朝の味方に加はり度々戦場の功及び御祈禱の忠節を盡してゐる由緒ある寺であるからとて、後醍醐天皇御還幸の御無事を祈らしめたものである。第二の文書はこれより先、大塔宮の令旨を拜して兵を播磨にあげ天皇御還幸の先驅をなした赤松則村の禁制で、後醍醐天皇御還幸の御祈禱所たるの故を以て武上の亂入狼籍を嚴禁したものである。この文書は

第一の護良親王の令旨より三日後に出されたもので、その閏二月には、赤松則村が摩耶城にて六波羅の大軍を打ち破り、三月の上旬には、當寺附近の瀬河、宿河原が戦亂の中心となつてゐたのであつた。又第三の文書は元弘年間と延元年間以來度々綸旨を賜はつて南朝に味方し忠勲を勵んだから、當寺に御祈禱料所を賜はりたいとの言上狀である。

以上三通の文書によつて、當寺の衆徒が後醍醐天皇御討幕の始めより味方に參じ、或は戰場の功を重ね、或は御祈禱の忠節を積んで、南朝とは密接の關係のあつたことが明確にされる。而してこの功によつて、後醍醐天皇は還御の後瀧安寺なる勅號を賜ひ、以後箕面寺を改めて瀧安寺と稱するに至つたと傳へられてゐる。

かく箕面寺が南朝に御味方したについては、色々の事も考へられやうが、中にも當寺が修驗の根本道場として多數の山伏衆徒の存在してゐたことを擧げなければなるまい。南朝と山伏との深き關係は、こゝに事新しく多くを述べる必要もあるまい。後醍醐天皇の元弘の御擧の最初に活躍した志士が何れも山伏姿で活動し、朝廷が修驗に根本靈場たる吉野山に建設せらるゝに及んで、吉野法師は全國山伏の中心として、從横に教線を張り、南朝の爲に暗中飛躍を試みたのであつて、箕面寺の衆徒が同じ修驗道の行場である熊野三山や、出雲、瀧淵寺の法師等と共に後醍醐天皇に御味方したことも、この點から考へればよく理解される。

その後武家領主の崇敬も厚く、各々當寺並に寺領なる箕面山林の保護に努めたのであつた。現に當寺には武家領主の保護を語る文龜より寛永に至るまでの二十四通の禁制折紙等の文

書を所藏してゐる。煩はしいが次に列記することとする。

一 藥師寺長忠書狀

箕面寺山之事、從方々押而剪採由候、太不謂候、□□□□□□條、取糺山廻等解怠之様候處、聞此砌彌恣剪採由候、言語道斷儀候、□□□□地下人并御被官人等々、堅可被仰付旨、□以折紙被申候、一段急度被相觸候、可然候、恐々謹言。

文龜四年子

藥師寺與次

二月三日

長忠

河原林六郎右衛門殿

御宿所

二 池田長正禁制

禁制

箕面寺

一 山林伐事 付所々散在者盜剪事

一 參詣衆地下山内取役所事

一 制之内河持之事

右條々堅令停止訖、若於違犯之輩者、可被取制物尙以及是非者、加成就可處罪科者也、仍定所

如件

池田兵康尉

天文廿年五月 日

長正(花押)

三、正村等連署制狀

箕面寺山林從所々散在盜取候由言語道斷曲事候宗、田御時之以筋目諸寺へ制札被出候間
向後堅可令停止旨候若背此旨輩於在之者則可加成敗由候也仍如件

天文廿二

十二月十五日

正村(花押)
正朝(花押)
基好(花押)
正秀(花押)

當郡中

所々散在

- 四、荒木村重等連署制狀 年月日欠 (本文省略)
- 五、永祿五年三月禁制 (本文省略)
- 六、永祿五年卯月禁制 (本文省略)
- 七、永祿五年卯月禁制 (本文省略)
- 八、永祿六年三月折紙 (本文省略)
- 九、永祿七年二月禁制 (本文省略)

- 一〇、永祿十二年三月折紙 (本文省略)
- 一一、元龜元年十一月禁制 (本文省略)

一二、荒木村重禁制

禁制

箕面寺

- 一、剪採山林竹木事 付所々散在 盜取事
- 一、於寺家寺領新儀非例申懸事
- 一、制内漁獵事

右條々堅令停止訖若此旨相背輩於在之者可處嚴科者也仍如件

天正參亥十一月 日

攝津守(花押)

- 一三、荒木村重禁制 天正三年十一月廿六日 (本文省略)
- 一四、青木重明書狀 天正三年十一月廿六日 (本文省略)
- 一五、青木重明折紙 天正三年十一月廿六日 (本文省略)
- 一六、中川瀨兵衛禁制 天正十年九月 日 (本文省略)
- 一七、安威之統折紙 天正十三年十月廿七日 (本文省略)
- 一八、河尻肥前守折紙 天正十八年十二月十三日 (本文省略)
- 一九、片桐光長折紙 慶長六年九月廿三日 (本文省略)
- 二〇、村上三右衛門尉折紙 元和元年九月六日 (本文省略)

二一木村清勝折紙 元和八年九月卅五日

(本文省略)

二二間宮三郎右衛門折紙 寛永六年十一月二日

(本文省略)

二三曾我又左衛門尉等連署折紙 寛永十三年十一月十九日

(本文省略)

二四高島長直等連署折紙 四月十七日

(本文省略)

之等は何れも山林の保護と寺領安堵、山内漁獵の禁止、武士の亂入、狼籍、矢錢、兵糧米停止等に關するものにて、これらによつて箕面山は完全に保護され、今日の幽邃境たるの面目を保持し得たものであらう。

しかし堂塔伽藍は天正年中に兵燹にかゝり、又文祿年中震災の厄に逢ひて廢頽し、慶長年中現在の地に移轉再建に着手したと云ふ。其後後水尾天皇は叡願成就のため、明暦二年天堂造營被仰出、勅使坊城大納言俊定を下向せしめ、その成るや、聖護院宮道晃親王は勅を奉じて御供養を行はせられた。又櫻町天皇は寛永四年二月御所の舊門を御下賜あらせられ、現在の山門が是であると云ふ。降つて光格天皇は寛政十一年正月に開基役小角に神變大菩薩の謚號を賜ひ、同年三月には聖護院宮二品盈仁親王に勅して、當山に於て一千百年の御遠忌を嚴修せしめ給ひ、爾來五十年毎に勅會修行の令を下し給ひ、明暦二年に賜はつた菊の御紋の幕及び挑灯を用ゐたのであつた。現在の主なる社殿は明暦、元祿の頃に成つたものである。

當寺は現在は園城寺末であるが、その以前に於ては、いつの頃よりか徳川時代に修驗道本山法頭として山伏を直管した聖護院の支配をうけてゐた。

寺には前掲古文書の他に種々の什寶を所藏してゐるが、就中本地堂安置の如意輪觀音坐像は像高さ三尺一寸、平安初期の製作と考へられ、大正八年國寶に指定された。又箕面山古圖一幅を藏してゐる。縦五尺五寸、横五尺四寸の大幅で、畫中の人物など室町の風俗を現はすが、徳川中期頃に作られたものである。伽藍の狀況を窺ひうるために、特にあげた(圖版第二參照)。

三 箕面の富

富は富籤又は富突ともいはれ、近世社寺經濟上の一特色となつてゐる。三々五々を投じて數十両、數百兩を得んとて、社寺の境内を埋めた群集の、錐に突き出された當りの木札の讀み上げられる毎に、湧き立つ熱狂ぶりは、現今の競馬場のそれにもはるかに超へたやうと思はれ、實に又近世特異の社寺風景でもあつた。元來一般各社寺の富は、その造營修理の費をうるために、幕府の許可を受けて興行したもので、全國各地に亘つて相續いて頻りに行はれた。勿論各社寺はこれによつて造營修理の費を得たばかりでなく、又社寺の一般經濟を豊かにしたことは想像に難くない。これら各社寺の富の中で、最も有名なものは、當箕面の富にして、起原も古く且般盛を極め、日次記事、滑稽雜談、講習餘錄、攝陽奇觀、攝津名所圖會等の諸書に載せられて、その名天下に喧傳された。而して當箕面の富は、又他の社寺の富とは大に趣を異にしてゐて、謂所福富であつた。この箕面の富については、前掲の諸書によつても窺ひうるが、最も詳密を極めてゐるのは、當寺所藏の寶曆五年十一月に當寺別當岩本坊の大阪町奉行へ差し出したと思はるゝ覺書である。それには

一富突之儀何ッ比カ致興行候哉其節何方江相願候哉右ニ付縁起有之候哉有之候ハ、可差越候事

右

箕面山富之儀者世俗ニ申候富突にてハ無御座候於箕面山者富法事と申來候富と稱する譯



富の面箕 圖四十第

左ニ相記申候箕面山富法事者開山役行者附法之牛玉印文加持作法と申儀凡千六七拾年以前方無懈怠于今毎々爲天下泰平万果豐饒御祈禱致修行候牛玉と申儀者師資相承有之事長キ儀ニ御座候所詮者除災興樂之符守ニテ御座候元來者其人々之頭ニ押シいたゞかせ候事なれ共上々始下々ニ至迄其座エ不參人者頂戴難成候ニ付牛



(載所會圖所名津攝)

玉印を紙ニ寫し押國々所エ遣候様ニ相成候且又往古者富堂之隔子戸ノさまカ竹さほ富神ニ申于今用候を出し人別ニ持之勤行終テ燈明を不殘消シ彼牛玉印紙ニをし候を三ツ取て數多キ中ニ三ツと申儀師傳有之難申上事譬ハ天地人之表事と申様成儀御座候堂内ニテ彼竹さほ手ニ當リ次第ニはさみ遣候右は

さみ付有之竹さほを取得候を富に中り候と申候

其譯者除災興樂之祈禱之加持牛玉故致頂戴候得者大キに利益を得候事故此牛玉守を取
得候ハ福じや富じやと世俗カ名づけ候儀ニ御座候外に福杖と申物有之候是者法事中ハ
俗人手ニ不觸富法事終テ者望次第ニ遣シ候富棹福杖共惡魔降伏之表具ニテ御座候

然ニ從中古凡百七十八年餘參詣群集ニ付右之通ニ仕候得者騒動仕候故木札に人名を書付箱ニ入候

箱を富箱といふ札ハ銘々箱エ入レ合印は銘々相持罷在候札ハ富札と稱し合印は控紙と稱し候

扱札を錐ニテ突上ケ申候札之人名呼テ富ニ當り候人と申習し候今以往古之通牛玉印の御守札を箱に入竹さほニはさみ相渡候を富守ニ稱し候勿論札數限りも無御座何程ニても望次第ニ遣し候儀ニ御座候

凡歌かるた程之札ニテ御座候米を入候俵ニいたし候得者正月一度分五六十俵も有之候ついでかすへ見候儀無之候

扱御所之御守札加持終其後諸人之守札致加持遣候是を俗ニあかりの富と申習し候古來于今修行仕候富法事右之通ニ御座候右富守之外何も遣候物無之候又富守頂戴之人々作法料と申テ金二切斗此方エ差出候儀ニ御座候當時世俗ニ申候富突とは裏表之違ニ御座候將又法事日數者一七ヶ日夜廿一ヶ座或三ヶ日夜九ヶ座毎月朔々七日廿八日同様ニ法事相勤候

何方エ相願候哉之儀者舊記無之候右之通御上之御祈り之儀故往古々勅許之儀與相見候則例年長橋御局々頂戴之奉書數通有之候

一富突之儀何月幾日ニテ一ヶ年三四度も有之事ニ候哉

右申上候通富突ニテ者無之候富法事者御上之御祈禱之儀ニ御座候テ毎月修行候得共世俗エ守札出シ候者正月七日ハ多ク二月三日ハ少ク御座候世俗エ守り札出シ候得者餘程物入御座候故毎月者得不出候御上エ者正五九月斗御守リ札献上右申上候通正月者長橋御局々御奉書頂戴古々于今不闕之儀御座候其外臨時之御祈者格別之儀御座候是も御代々毎度不相替被仰出候右富法事之儀先年聖護院宮道祐親王御成之節臨時被仰付毎月之外に御成之節致修行候儀も御座候

と見えてゐる尙他に天保十五年に大阪町奉行へ差出した富會に關しての口上書の寫しがあるがこれらによると箕面の富は世俗一般の富と異り富法事と稱へて開山役行者附法之牛玉印加持作法とて往古より天下泰平万果豐饒の御祈禱をなし除災與樂の牛玉印の符守を諸人の頭に押しいたゞかせてゐたが次で牛玉印を紙に寫して諸人に與へる様になりその始めには富堂の隔子戸の間から諸人の差入れた竹棹(富棹)に堂内の勤行を終へて後燈明を消して牛玉印を押した紙を三つ取つて外より差入れた竹棹に手に當り次第にはさんだその牛玉印を得たものは大利益を得ると云ふから福じや富じやと名づけ遂に富に當ると云ふ様になつたが凡そ天正の頃から參詣人が群集しこの方法では往々騒動を引き起し怪我人も出たから改めて木札(富札)に名前を書き付け之を箱(富箱)に入れ合印(控紙)を銘々に持ち寺僧がその箱を廻轉した後錐にて札を突き上げて三つの當りを定めてその人名を呼び牛玉印の御守札

(富守)を授け法會終つて後諸人の欲するまゝに控紙に寶印を押し授け之を俗に一年の富あかりの富といつた。而して富札を得んとするものは心持次第に掛錢を出し、普通十貳燈明錢を出して受けたから、俗に「燈明料にて富を入れ」と云つた。又富守を得たものから作法料として金二切を寺に納めた。又この富法事は御所の御祈禱にて毎月修行し、御所へは正月、五月、九月に御守札を献上し、正月には長橋御局から御奉書を賜はる例となつてゐた。一般に守札を授くるのは正月七日と二月三日とであるが、正月七日の修正會の富が難踏を極めるのである。而して近世に於て一般社寺にて行はれたる富の仕法は、その金額の點では種々雜多であるが、興行者が富札を賣出し、木札を錐で突いて當籤者を極め、當つたものに褒美金即當額を給し、褒美金と富興行入用を差引いた殘高が興行者の收入となる仕組となつてゐる。これを箕面の富と比較すれば、當籤者を定める様式に於ては同様であるが、一方が當額を目的として熱狂したに對し、箕面の富は神佛の加護によつて福を將來に期しやうとする宗教的な動機を多分に含んでゐる上に、又一方がそれによつて社寺造營修理の費を得んとする經濟的なるに反し、之は勿論寺の收入はこれによつて増したことは推察出來やうが、飽くまで宗教的動機が根本をなしてゐる。

箕面の富の起原は前述の如く牛玉印を授けることに發したものであるが、それが富の名稱を以て呼ばれるに至つたことも可成り古きものにて、天正參年の文書に見えてゐるから、この頃にはその仕方も既に出來上つてゐたのであり、前掲寶曆の口上書中の百七八十年頃とせる

ものと一致するものである。

○青木重明書狀

御寺家御法度儀付而攝津守一書相調進入候富各有様ニ可被仰付候、万一異儀被申仁於在之者、此方へ可被仰付候、堅可申候、恐々謹言。

天正參年

青木平太夫

十一月廿六日

重明(花押)

箕面寺年預御房
御同宿中
まいる

かくて箕面の富の起原は天正頃に溯ることが出來やう。而して他の一般の富突は現在の所徳川初期に起つたと考へられ、廣く民間に行はれたものゝ様であるが、その富籤に當ると否とは一に機會で何人も豫測し得ないから、富は一錢を投じて千金を得んとする僥倖心又は投機心の心理作用に乗じたものであるから、非常な流行を來した。しかし富が射倖的のものであるために、その社會人心に及ぼす悪影響も頗る大きかつた。講習餘録に

頃月世俗にトミックと云て、三匁五匁金銀を大分にてもてはこびて一處にあつめ、其内にて次第々々の高下得分を立て、三匁の銀にて一人にて三十兩五十兩取來るものあり、ばくちを打ちたるより盜みをするより早き理なる故前後を顧りみずもちはこぶ(中畧)面々利欲の心になり、吾利欲をわすれ家業をしろなし、面々その利を得んと欲する先ッ利を得ることは差

措き第一そこは我心うはつきもはや地道のたまかに身をする事としともなきやうに上下の心そまつになること第一根本のそこねなりやがてかやうの義御禁制もあるが博奕は天下の御禁制左のもしは京都などは御制禁なり

と見えたるは最もよくその弊害を指摘したもので斯くて幕府は元禄五年五月十日江戸町觸を以て之を禁じたのを最初として度々禁令を出したが人心の弱點に乗じた慣行とて容易にその跡を絶たなかつた。しかも幕府はある事情のもとに一度禁止したるものを社寺修復の費用を得る場合に限り之を許可するといふ矛盾を暴露したのである。即ち幕府は從來由緒ある社寺の修理にはその費用の幾分を補助する慣習であつたが享保年度になつて斷然之を廢止したから社寺に於ては頗る困難を感じて再興費の募集のために富の催主となつてその利益を之に充てやうとした。先づ京都御室の仁和寺の門跡が其館宅修復のために享保十五年幕府に請ふて毘沙門天の富突を江戸護國寺に於て毎年正五九の三箇月に一回三ヶ年の富籤を興行してからは之に倣ふものが續出して全国各地の寺社に行はれるに至つた。かくて明和天明の頃には多く流行し寛政には抑制を加へられたが文化文政に至つて最流行の頂點に達した。その後天保の改革で一切差し止めとなつて一般社寺の富は地を拂ふに至つた。しかし箕面の富はこれらとはその性質を異にし御所の御祈禱をなして御守札を献上し且又民間に授けると云ふもので當寺に於ては勅許と稱して幕府の許可も受けなかつた如く度々の禁令にも例外として取扱はれ他の一切の富が禁止となつたが箕面の富ばかりは其後引き

續き行はれ現在に及んでゐる。現在は正月三月の二度行はれその仕方もすつかり變つてゐる。攝陽奇觀にも「寛政の初め故障有之不殘差止被仰付箕面山などの福富の類ひ斗りと相成候云々」と見えてゐる。

箕面の富は恐らく富の中で起原の最も古いもので而も他の富突もその形式を箕面の富に發したものであらう。而して又恐らくは富の最初の形態は箕面の如く護符を授ける宗教的のものに起因するものではあるまいか。富については尙記すべきことが多いが他日を期することとする。

この調査報告は調査委員魚澄惣五郎氏の示教を得たところ頗る多い。特に記して感謝の意を表す次第である。(岸本囑託)



(橋ノ一) 口入山面箕

瀧 雄 →



← 瀧 雌



瀧 安 寺 附 近 の 風 趣

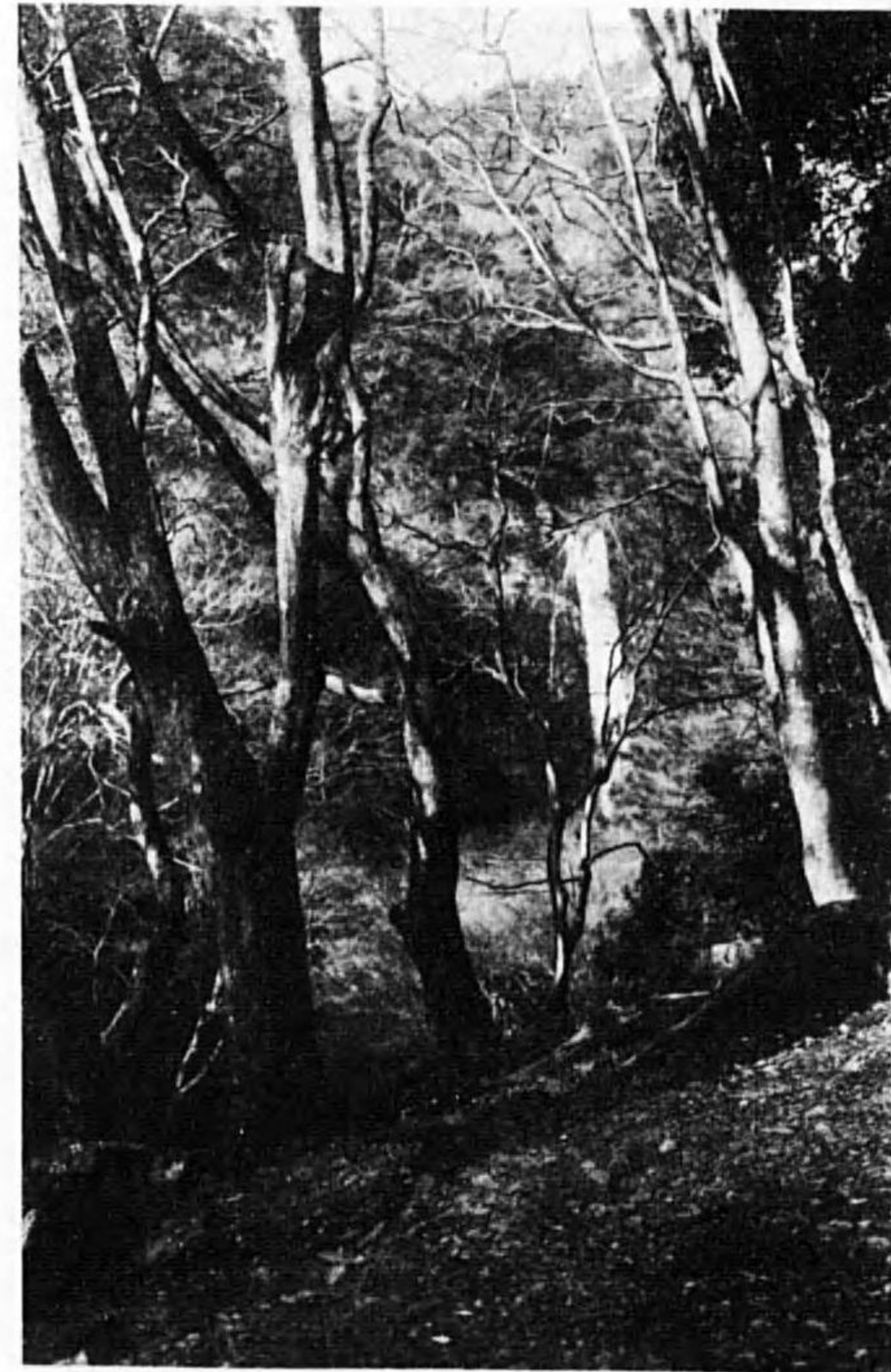


態 狀 生 群 の ジ ッ ツ ン ゼ ン ウ ナ バ ロ シ



態 狀 生 群 の バ ッ ト ヒ

橋 見 瀧 →



態 狀 生 群 樹 叢 の 近 附 橋 見 瀧

のラヅカネヲア
態 狀 生 自

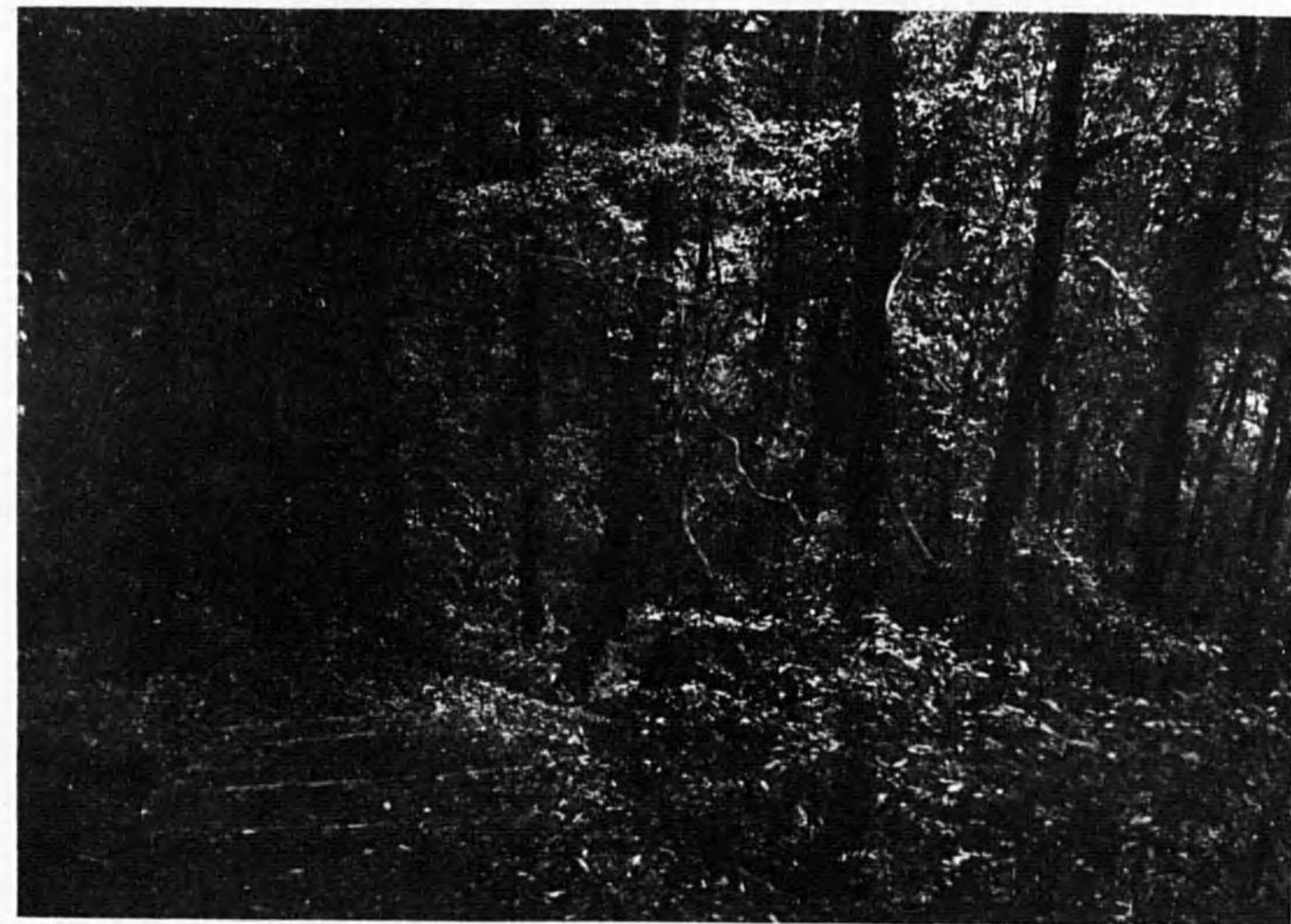


のリタフニタコ

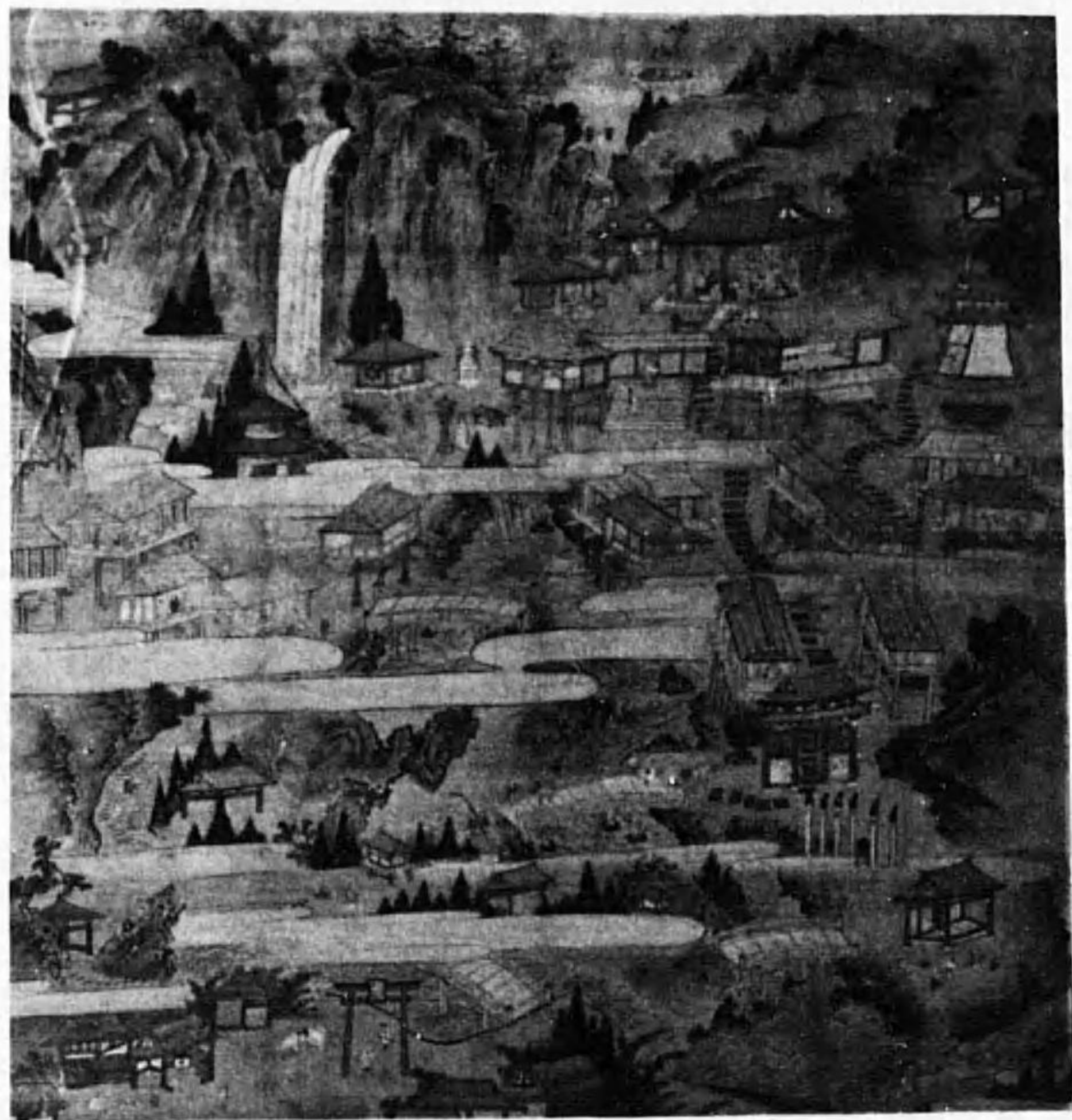
態 狀 生 自



(望遠りよ獄口大) 落 群 の 楓



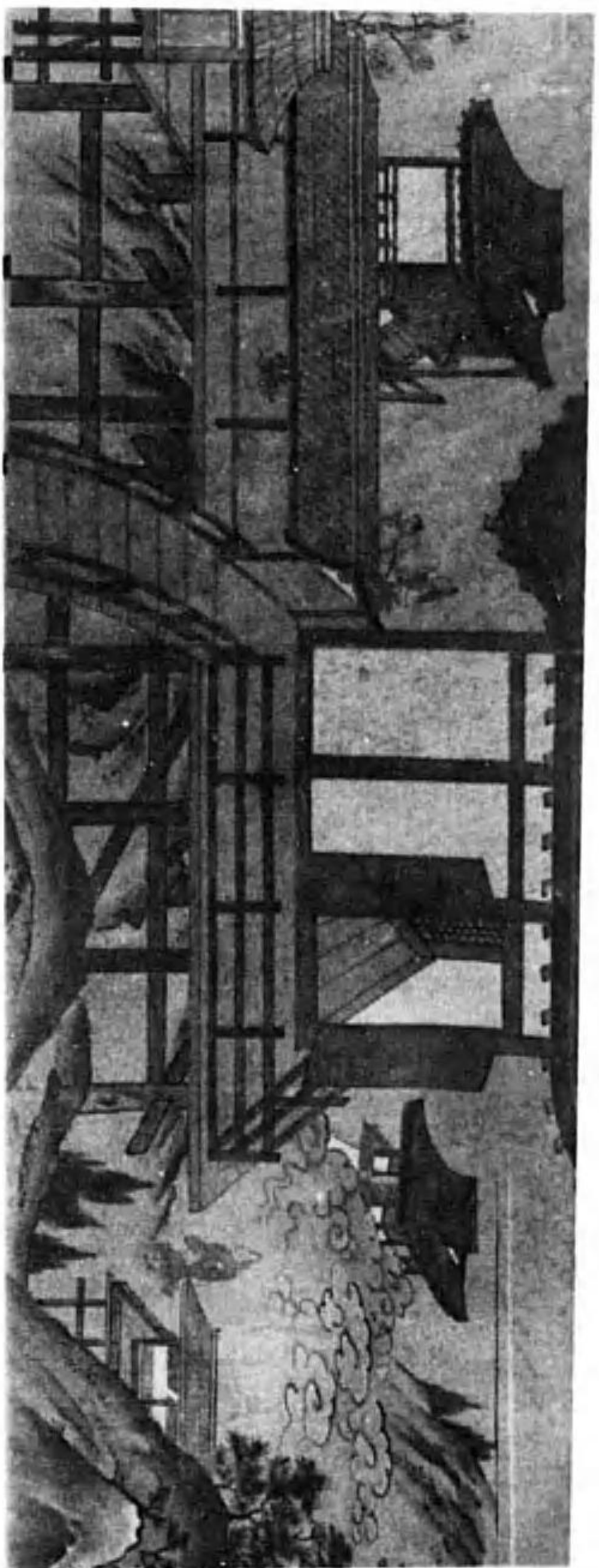
林 密 の 樹 葉 潤 綠 常



(下)(上)
瀧安寺伽藍圖
瀧安寺全景



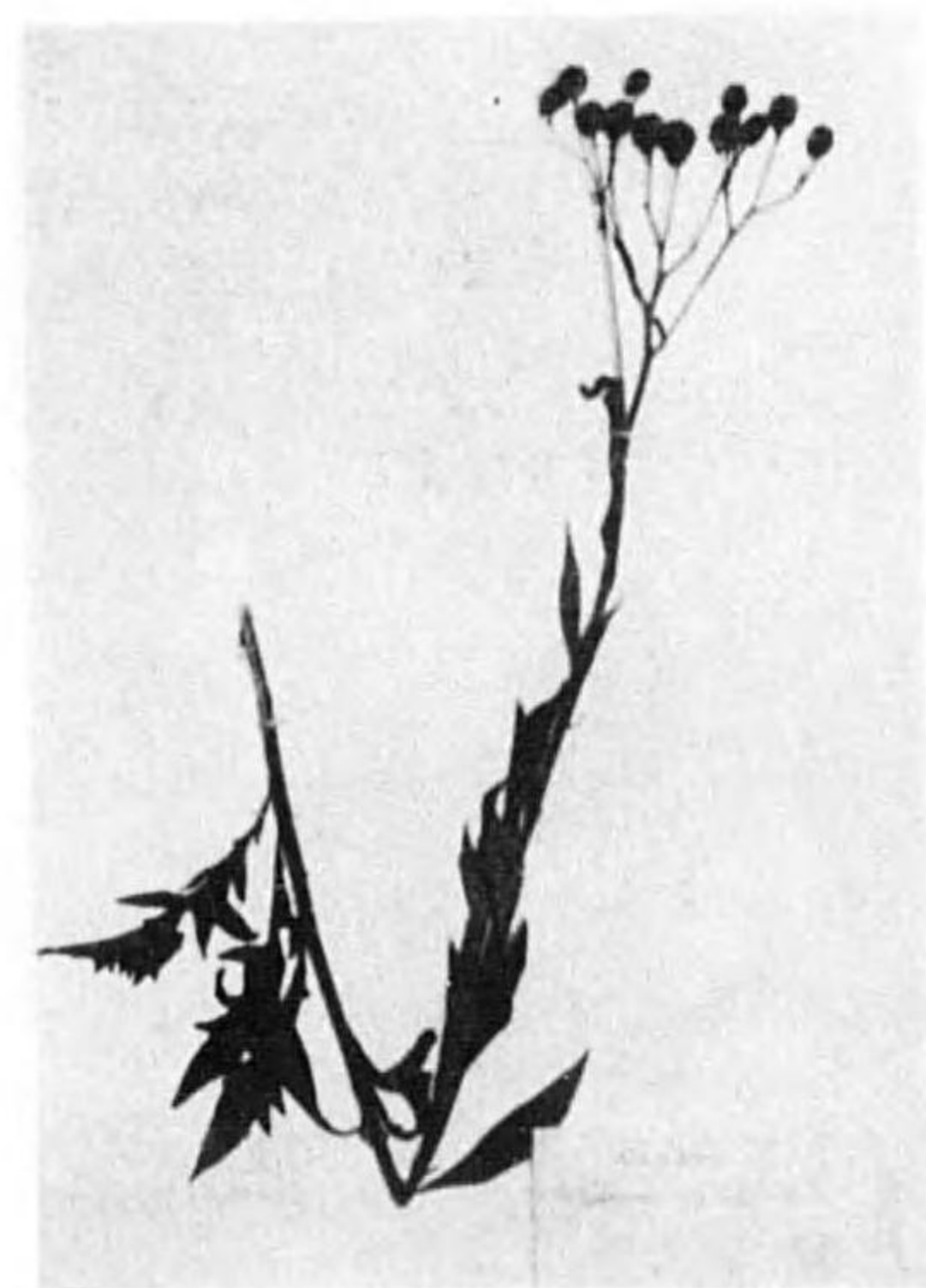
(西安常樂寺安池) 像首觀輪意如 (二)



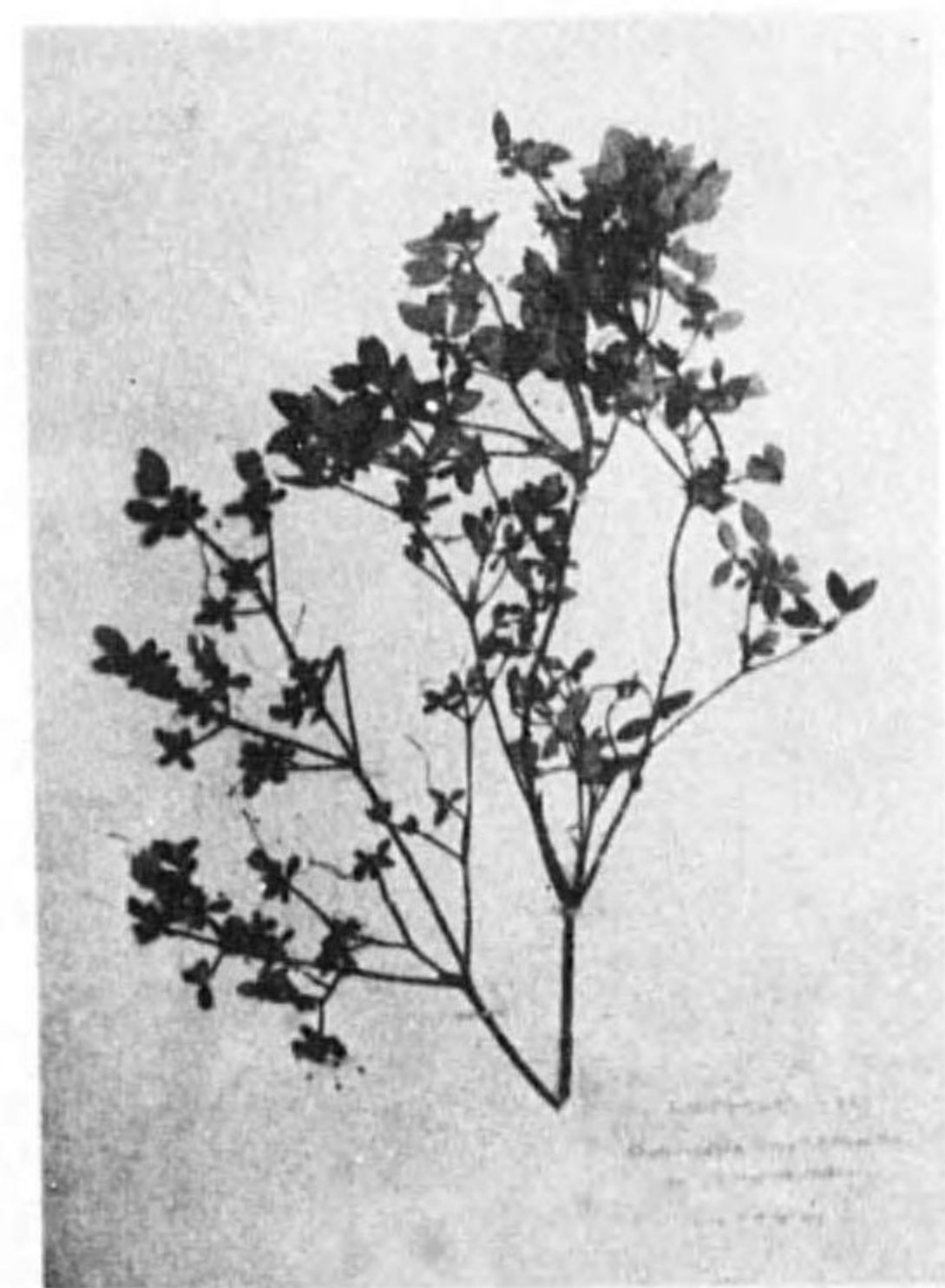
(漢明寺安池) 部一の起經宮松山而并 (一)



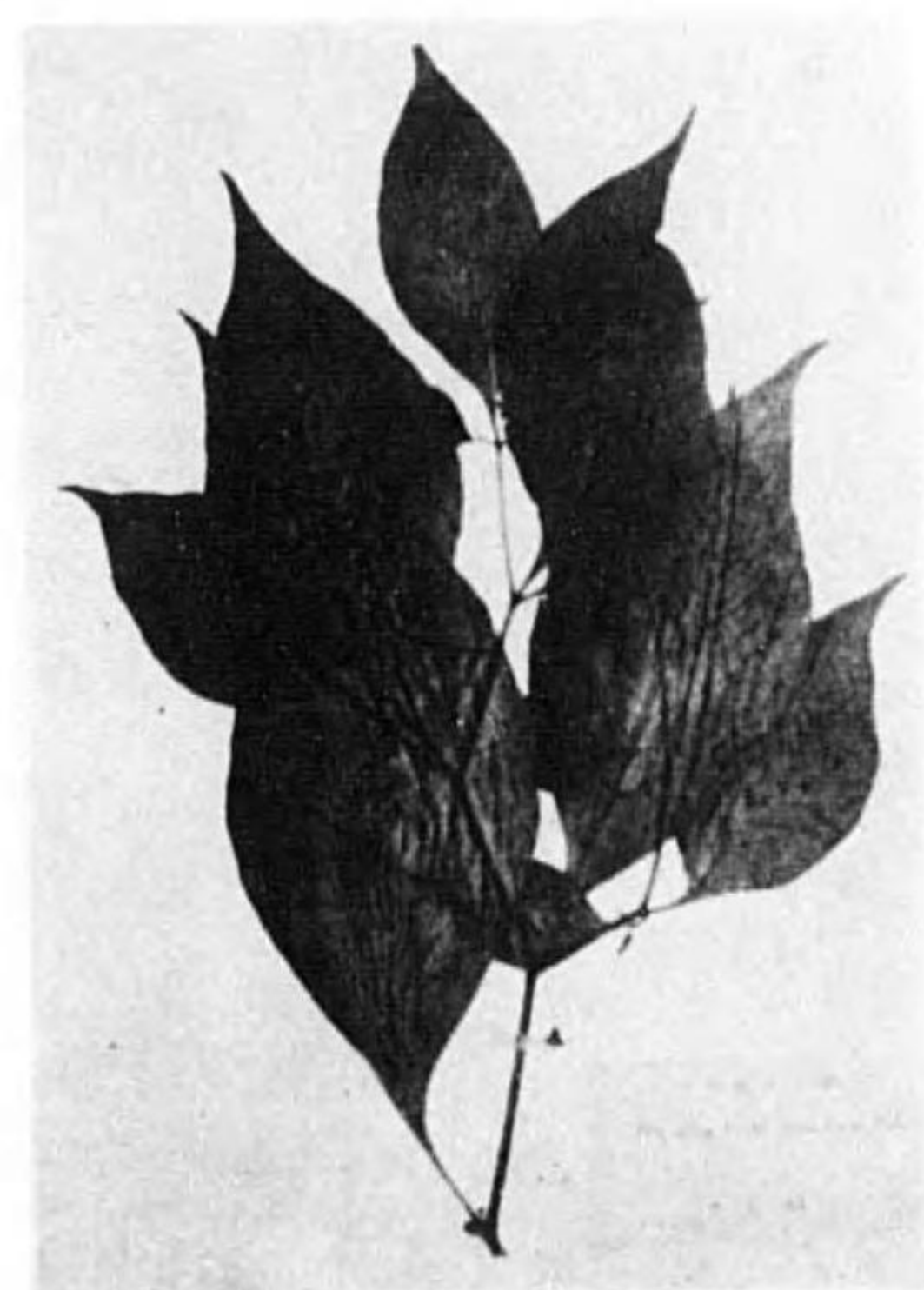
(2) ハグロサウ



(1) ヒメヒゴタイ



(4) シロバナウンゼンツツジ



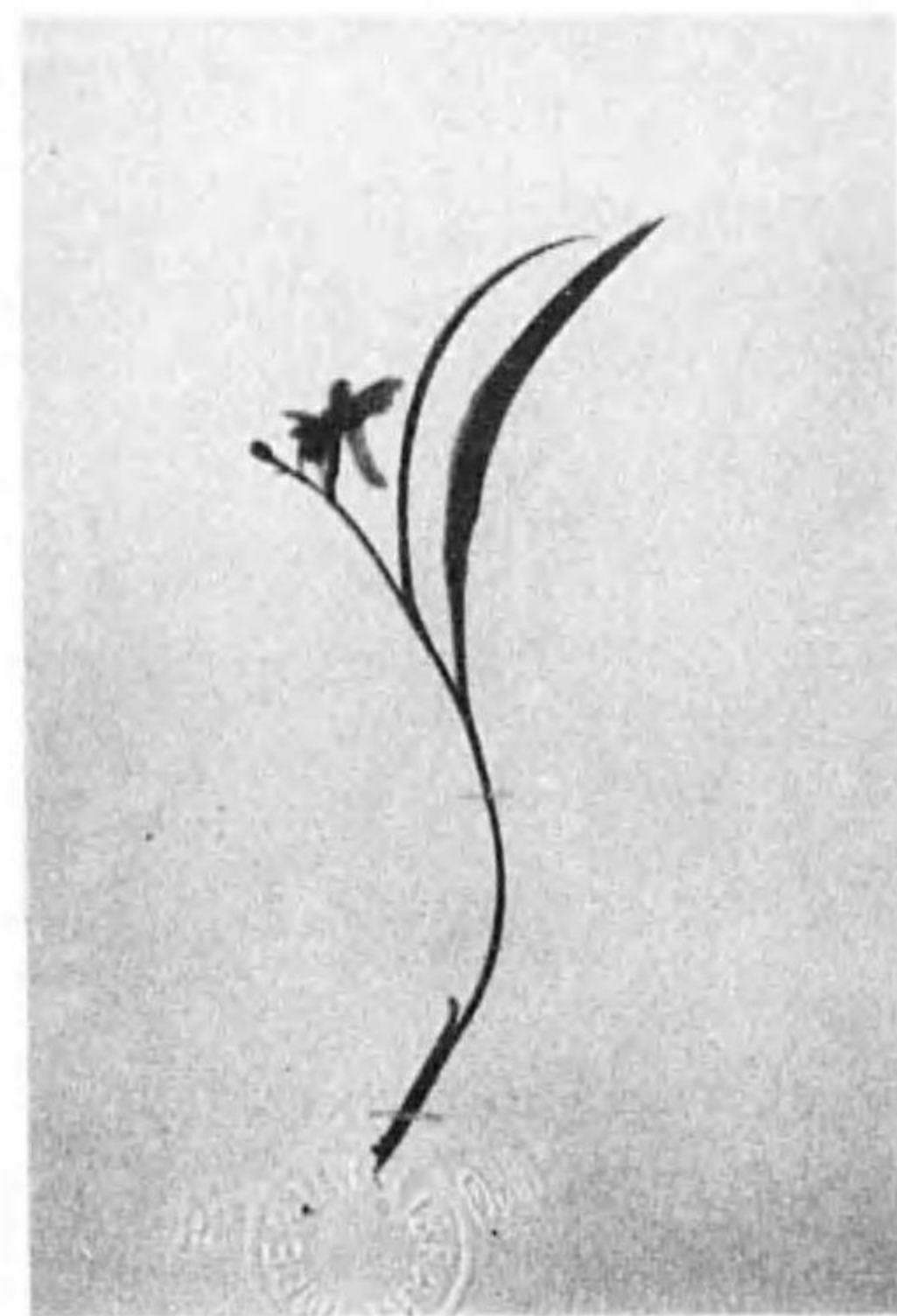
(3) アヲホホヅキ



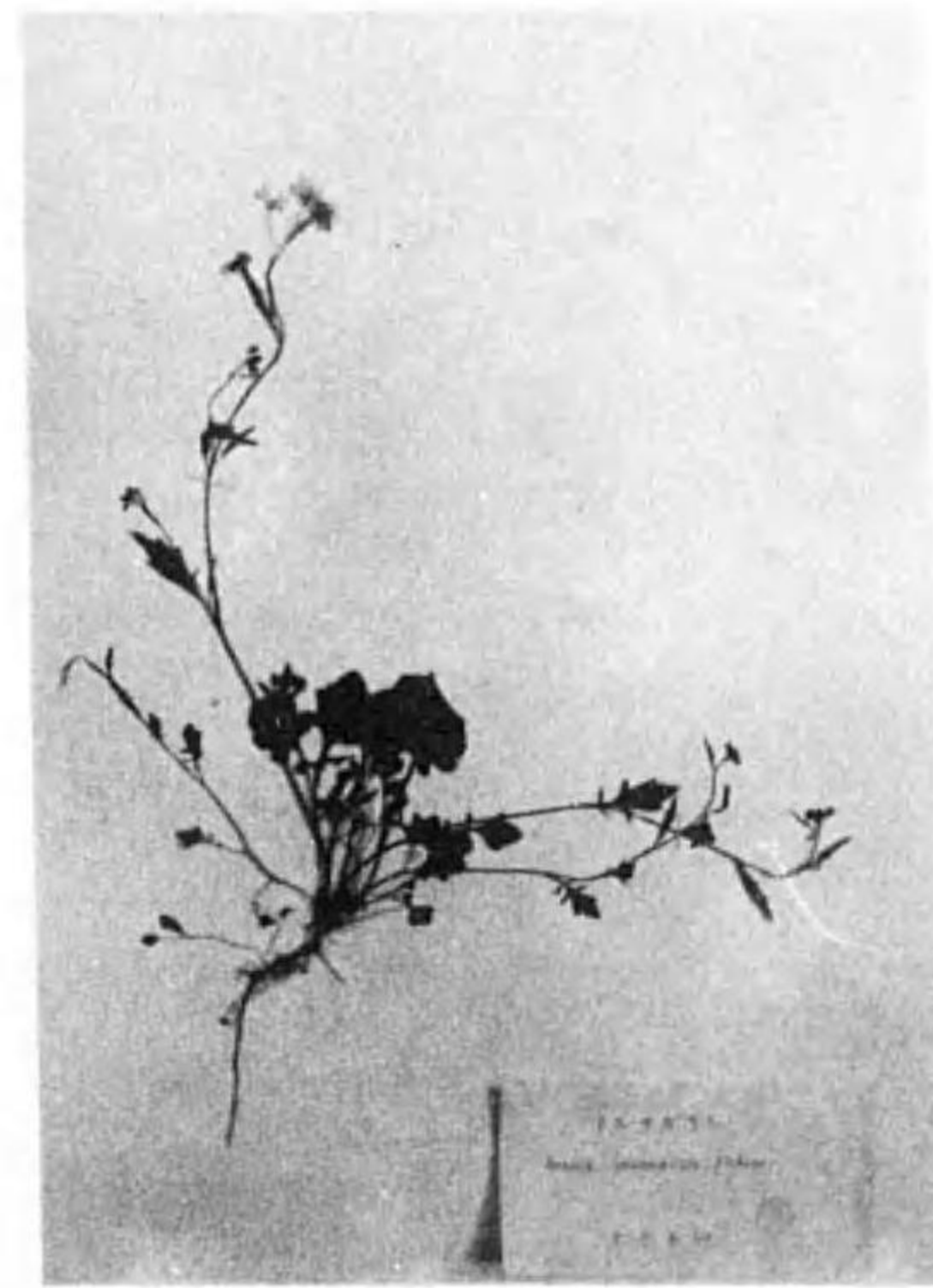
(6) ウラジロウツギ



(5) クサアヤサギ



(8) ウテフラン

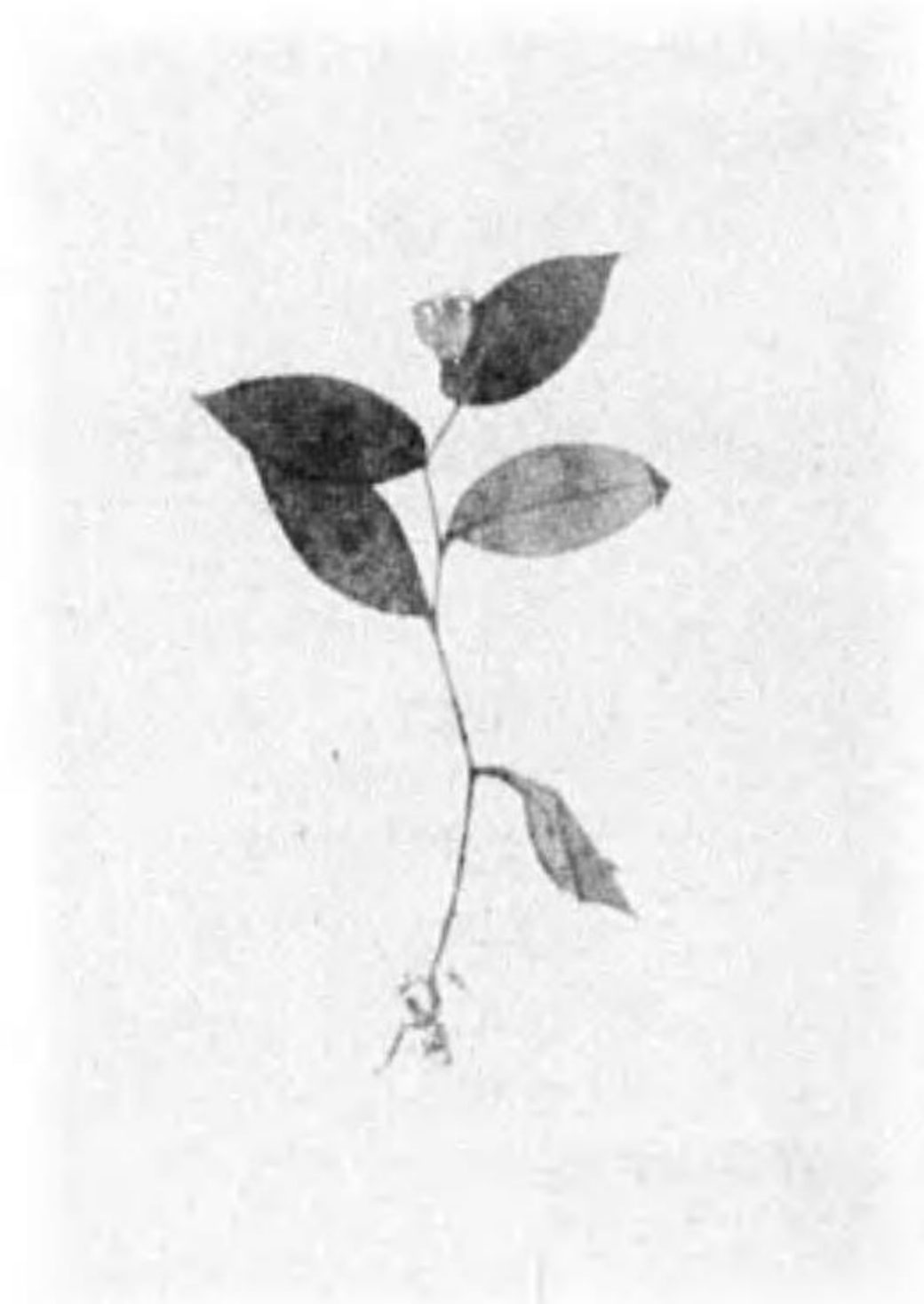


(7) ツルタガラシ

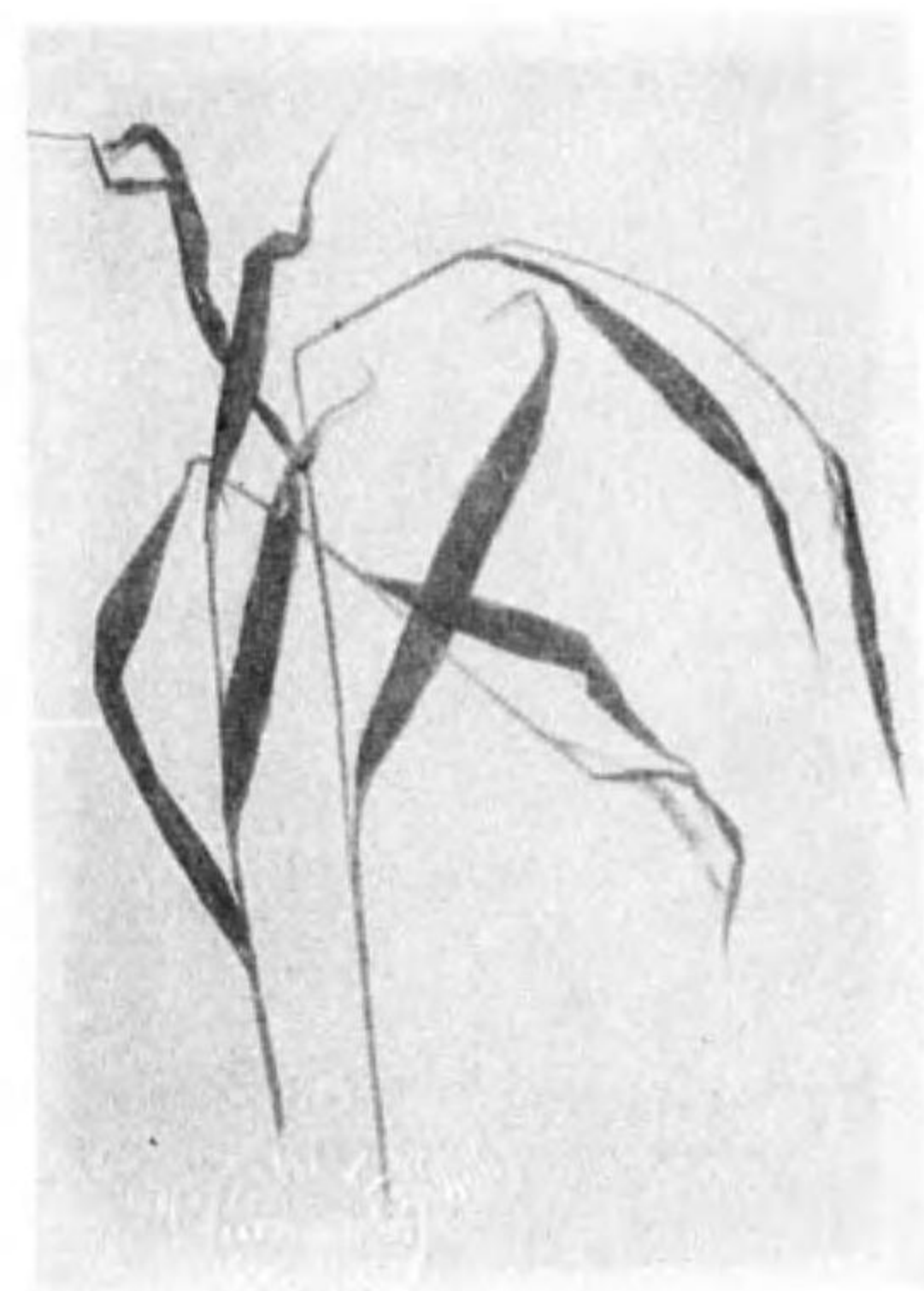
- (1) ヒメヒゴタイ 主トシテ瀧ヨリ奥ノ陽地ニ生シ、八九月頃紅紫色球形ノ頭花ヲ開キ美麗ナリ (キク科)
- (2) ハグロサウ 夏山頂ニ二三花ヲ開キ花ハ白色ニ淡紅色ヲ帯ビ紅紫色細點ヲ布ク、溪流ニ沿ヒタル濕地ニ生ズ (キツネノマゴ科)
- (3) アヲホホヅキ 山地ノ樹蔭ニ生シ、七月頃綠色ノ花ヲ開キ、秋日帯綠色楕圓形ノ漿果ヲ結ブ。暖地生ナルヲ以テ箕面山ニ見ルハ珍シ (ナス科)
- (4) シロバナウンゼンツツジ 暖地生ノつつじニシテ山地ノ樹蔭ニ生シ、春日廣鐘形白色ノ美花ヲ滿開シ頗ル優美ナリ (シヤクナゲ科)



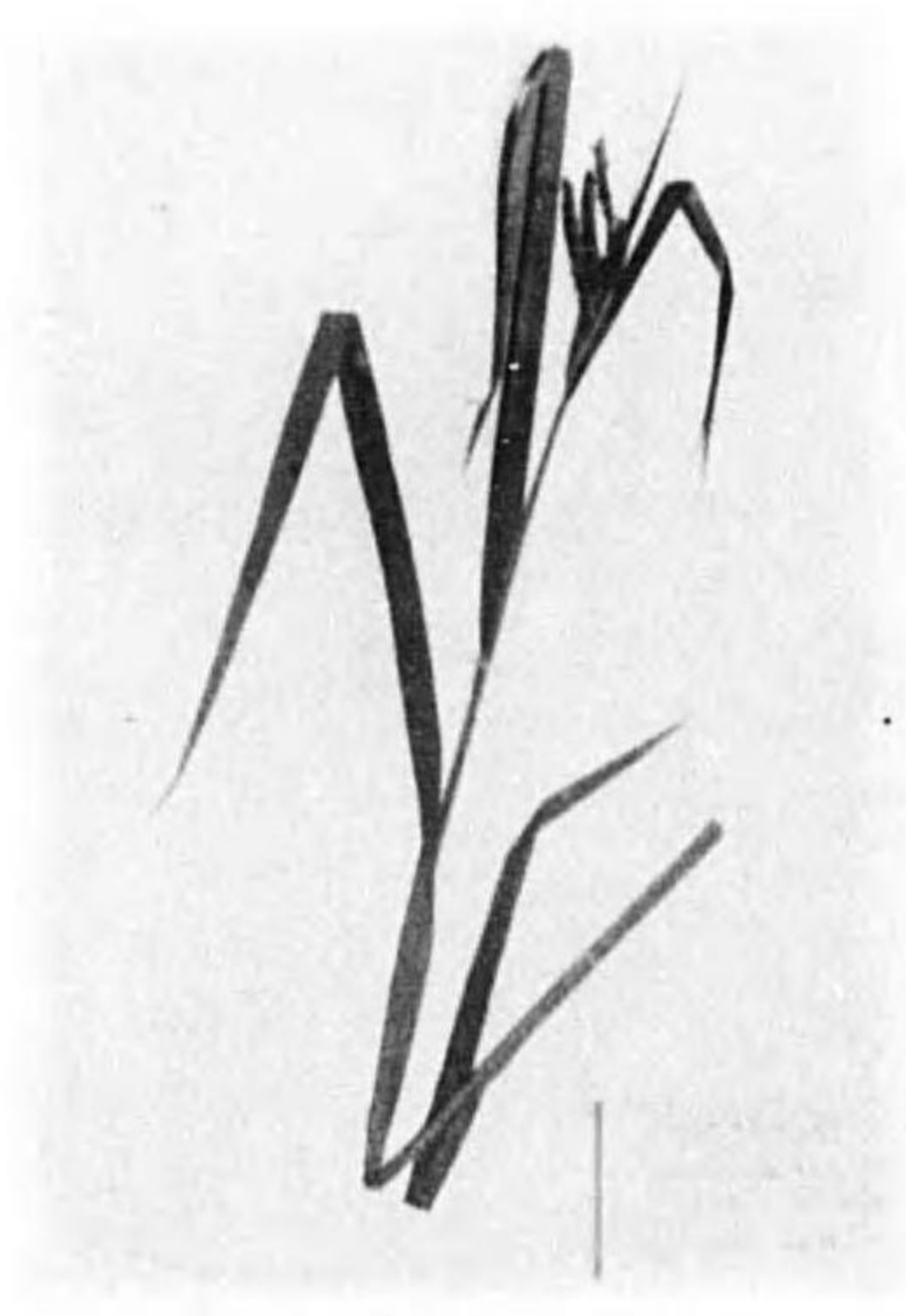
(10) ヤブメウガ



(9) ヤマザノホトトギス

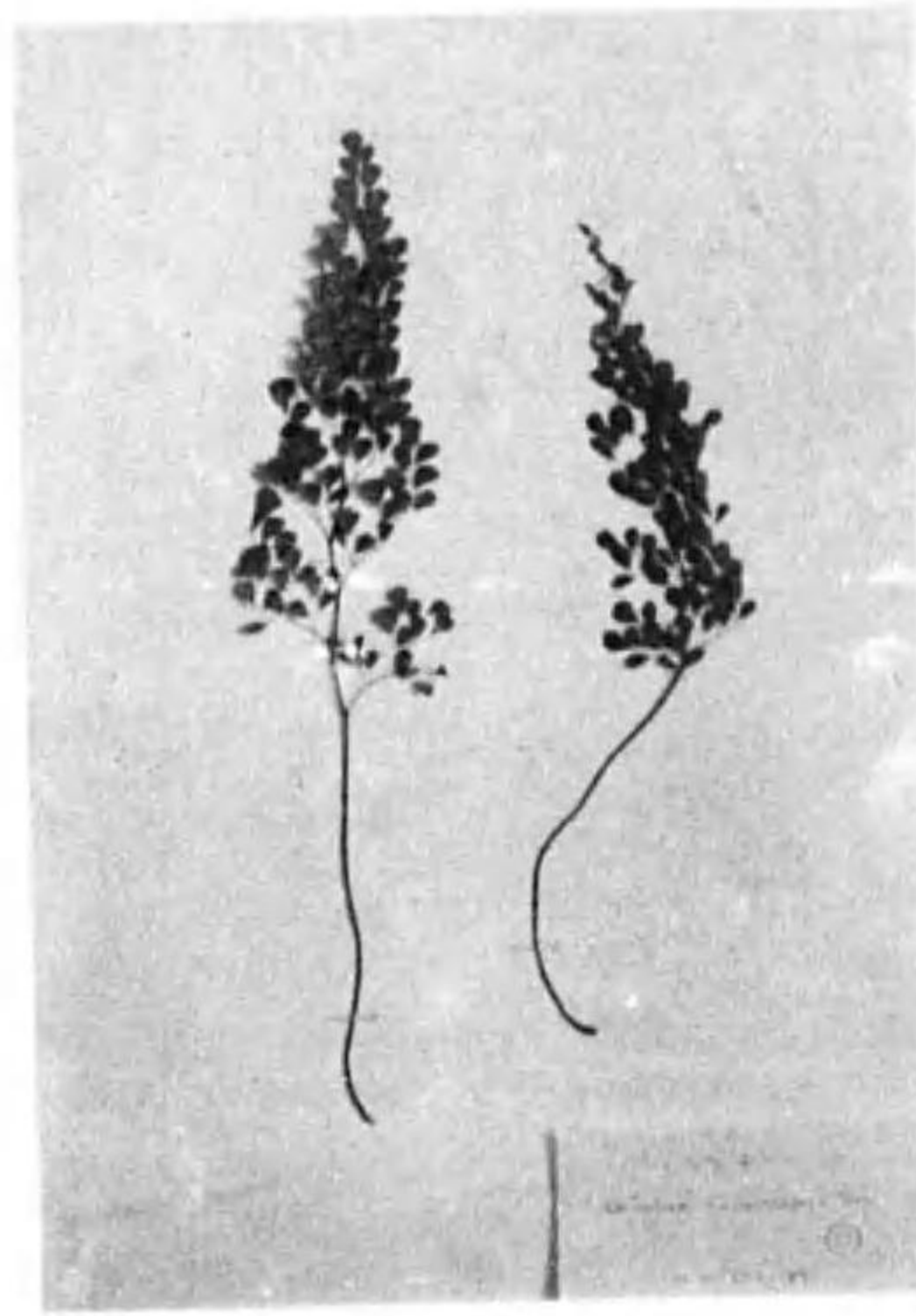


(12) アヅマガヤ

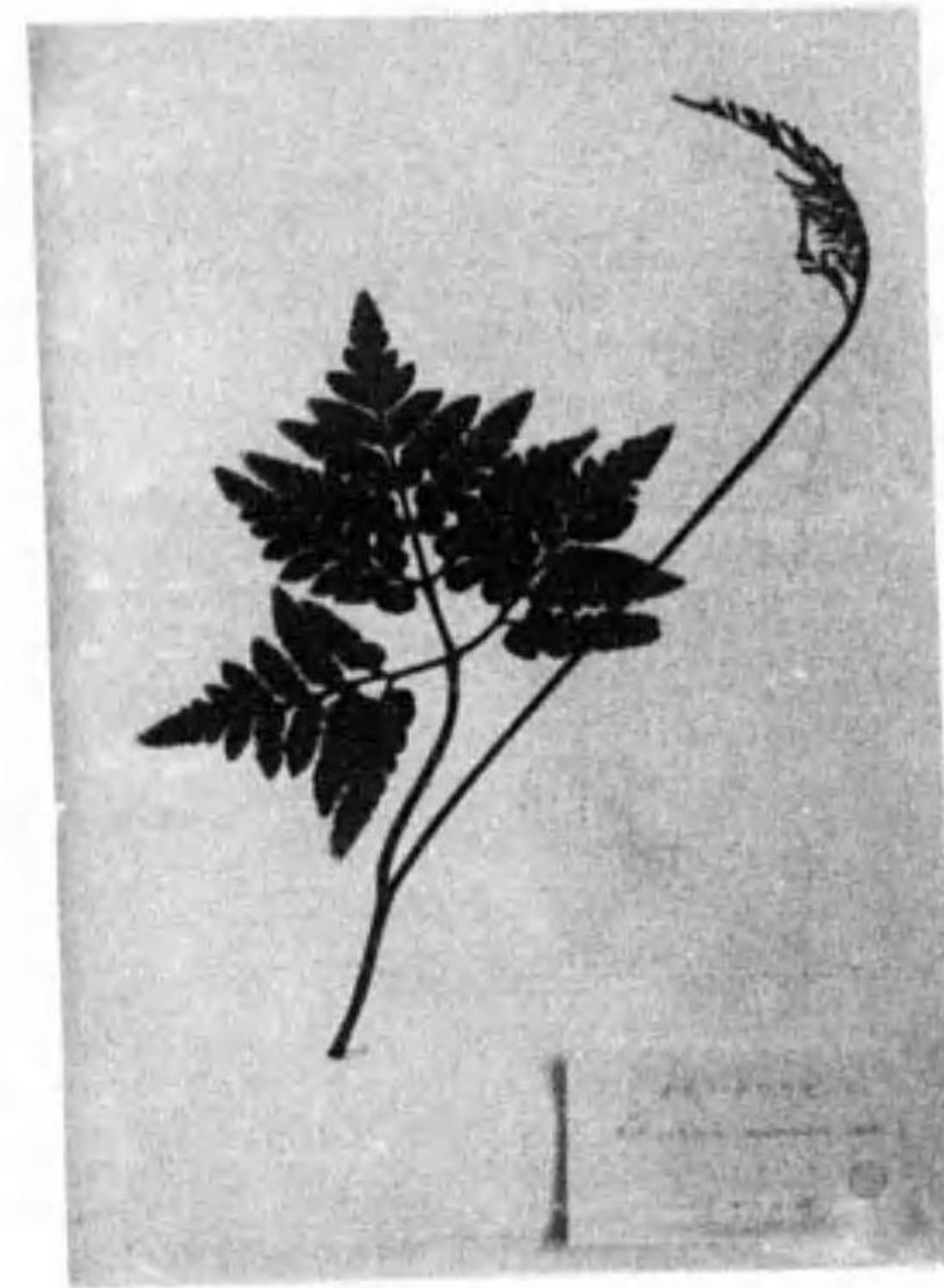


(11) シラスゲ

- (5) クサアヂサ井 花ハあぢさゝニ似テ優雅ナル紫赤色ヲ呈ス、暖生地ノ草本ニシテ溪間ノ樹蔭ニ生ズ (ユキノシタ科)
- (6) ウラジロウツギ 暖生地ノうつぎニシテ葉ノ裏ハ美シク銀白色ヲ呈ス、五月頃白色ノ秀花ヲ満開シ溪流ニ沿ヒタル溪間湿地ニ生ズ (ユキノシタ科)
- (7) ツルタガラシ 山地ノ陽地ニ多数群落ヲナス、初夏なづなニ似テ純白色ノ細花ヲ満開シ種メテ美観ヲ呈ス (ナタネ科)
- (8) ウテフラン 暖地生ノ可憐ナル小草ニシテ溪流ニ沿ヒタル湿地ニ生ズ、初夏麗麗ナル紅紫色ノ美花ヲ開ク (ラン科)



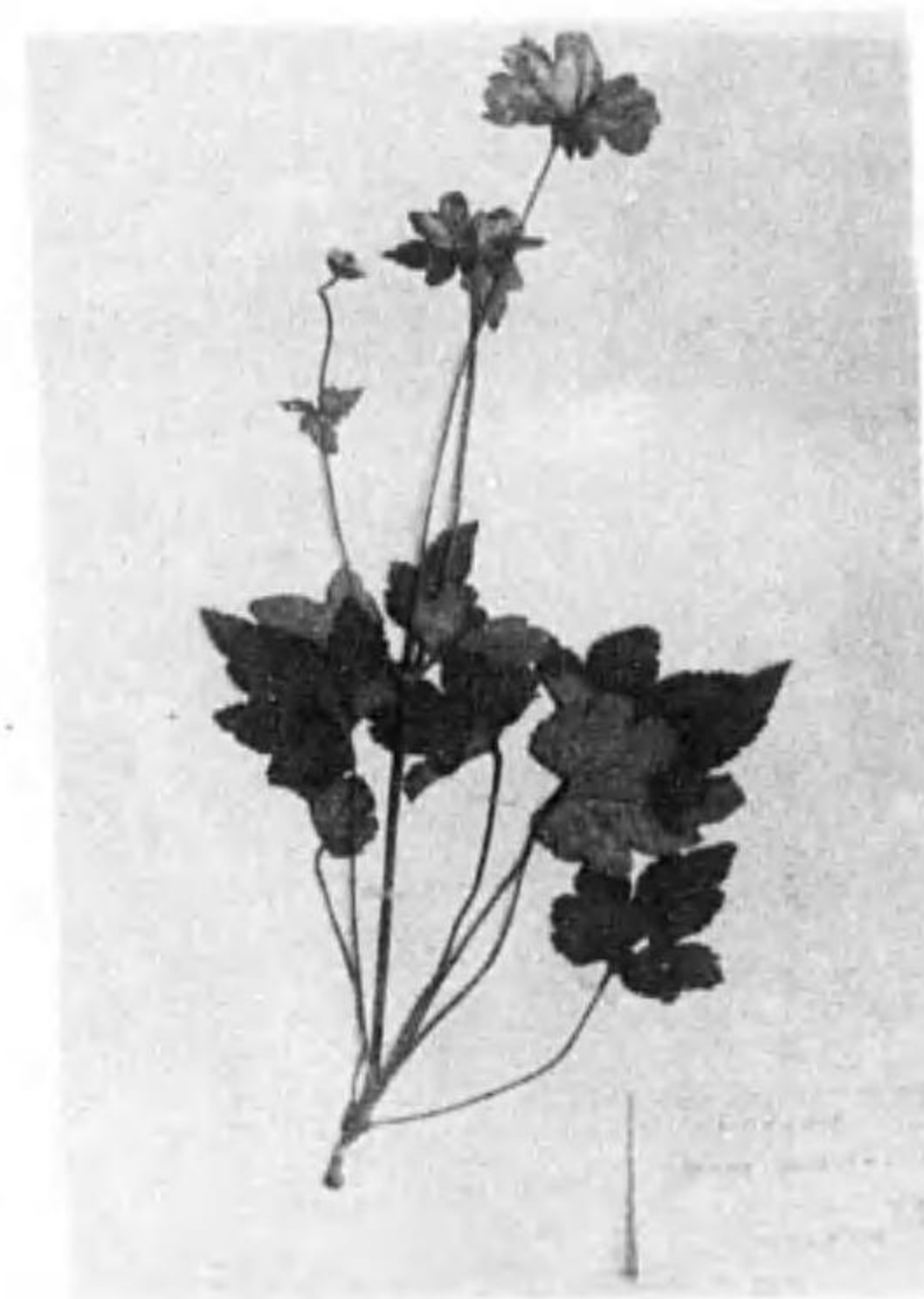
(14) ハコネサウ



(13) オホハナワラビ

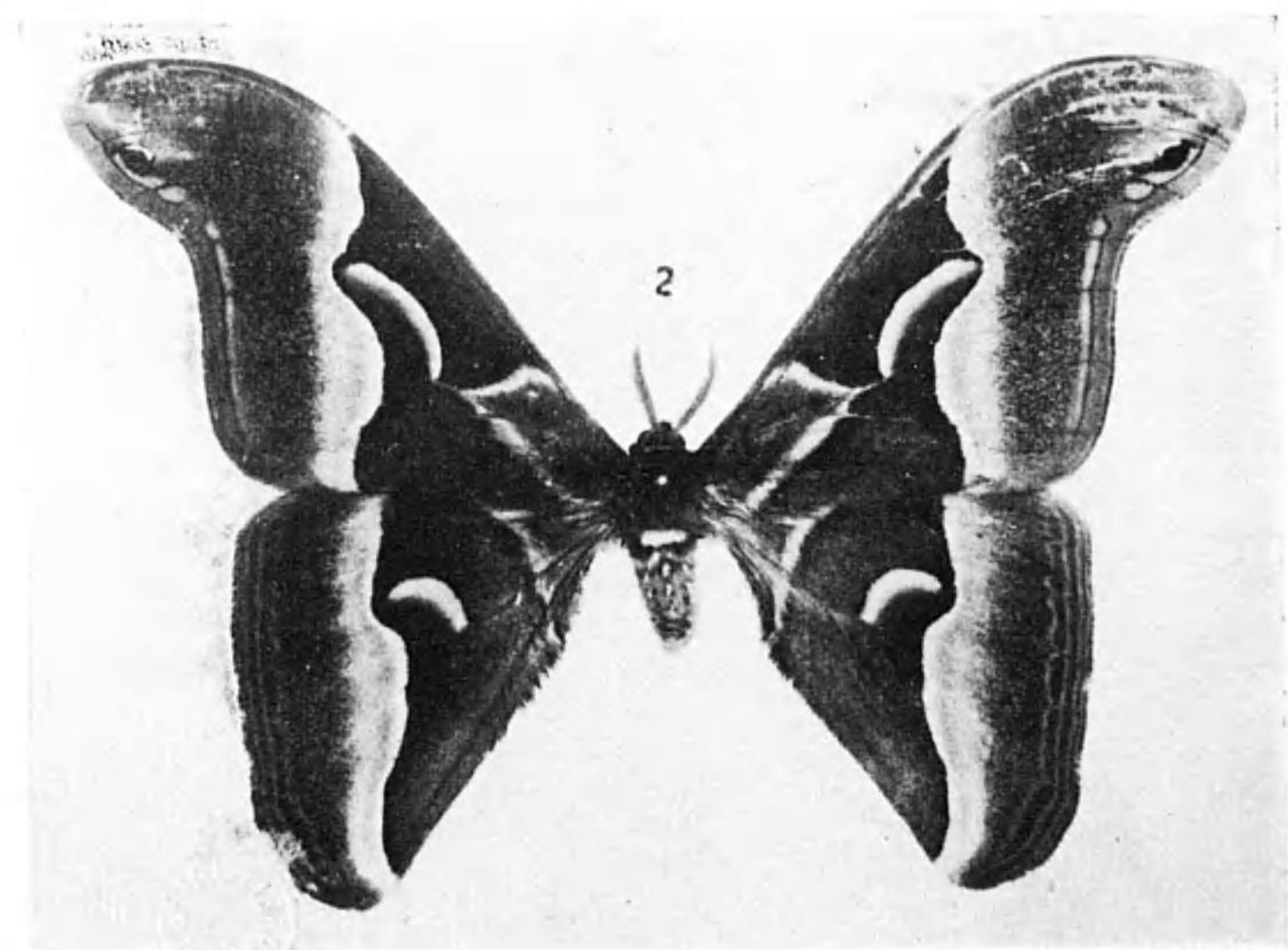
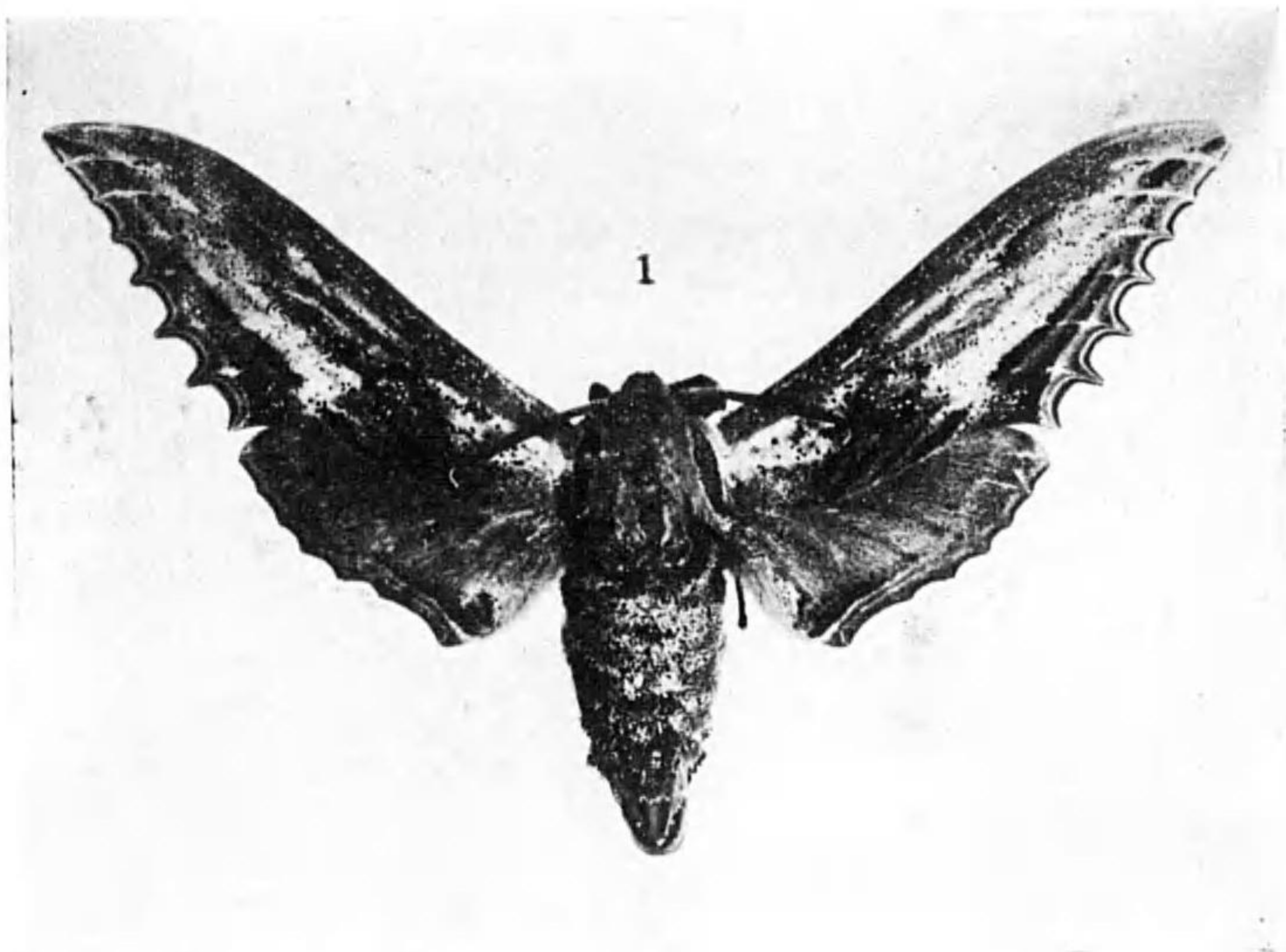


(16) サイコクベニシダ

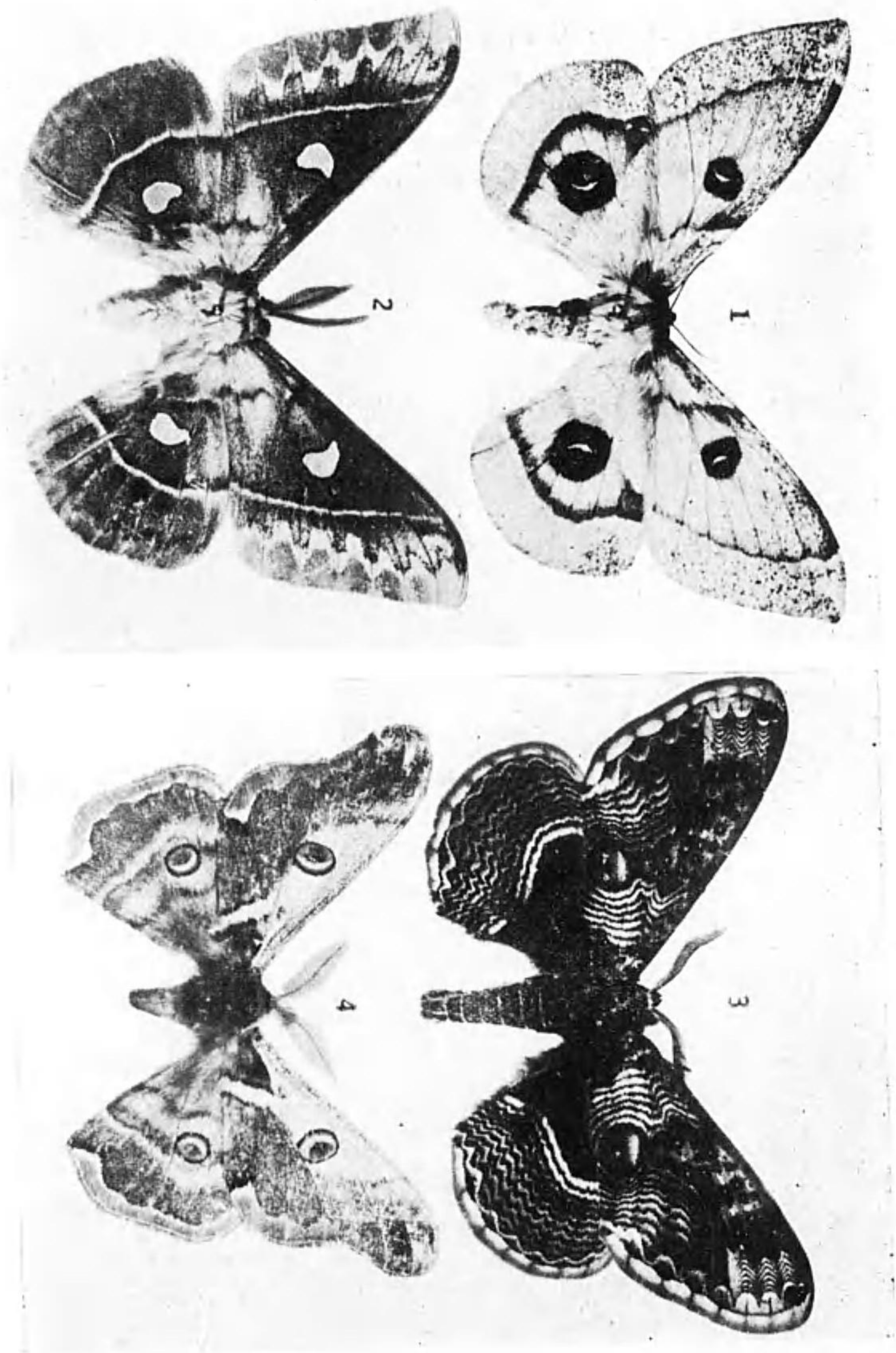


(15) シウイメギク

- (9) ヤマヂノホトトギス 山地ノ樹蔭ニ生シほこみぎすニ似テ脚葉ニハ暗點ヲ有ス、夏秋ノ候白色ニ紫點ノアル美花ヲ綴ル (ユリ科)
- (10) ヤブメウガ めうがニ似テ夏日白色三瓣ノ細花ヲ綴リ後チ碧色球形ノ實ヲ結ブ、主トシテ樹林中ノ陰地ニ生ズ (ツユクサ科)
- (11) シラスゲ 葉ハ靱緑色ニシテ美シク基脚ハ抱合シテ三角形ヲナス、夏日開花シ小穂ハ四乃至七アリ、溪間ノ濕地ニ生ズ (カヤツリガサ科)
- (12) アツマガヤ 溪流ニ沿ヒタル樹蔭ニ生ズ、莖ハ細長ク夏日疎生ノ穂状花ヲ出シ、芒ハ穎ノ倍長ナリ (イネ科)



- (13) オホハナワラビ 暖地生ニシテ樹林中ニ生ズ、葉ハ三角形ニシテ羽狀複生或ハ三回羽裂ヲナシ秋日開花ス (ハナヤスリ科)
- (14) ハコネサウ 暖地生ノしだニシテ山地ノ斷崖ニ生ズ、小葉ハ心臟形ヲナシ頗ル優雅ナル姿ヲナス (ウラボシ科)
- (15) シウイメギク 秋日紅紫色菊花形ノ美花ヲ開キ最モ優麗ナリ、主トシテ山野ノ湿地ヲ好ミテ生ズ (ウマノアシガタ科)
- (16) サイコクベニシダ 暖地生ノしだニシテ山地ノ樹陰ニ生ズ、べにしだニ似テ小羽片ハ短ク稍耳脚ヲナス (ウラボシ科)



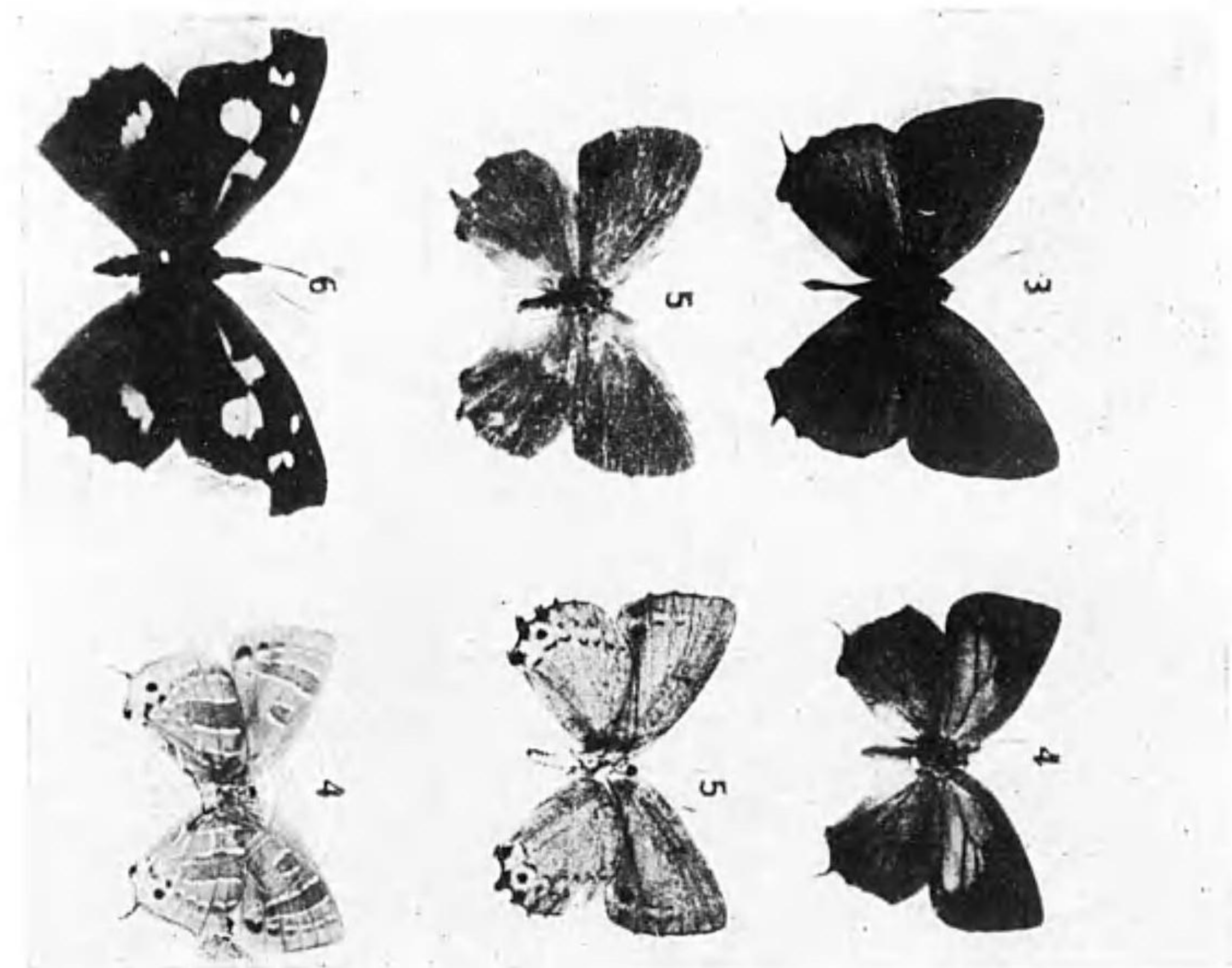
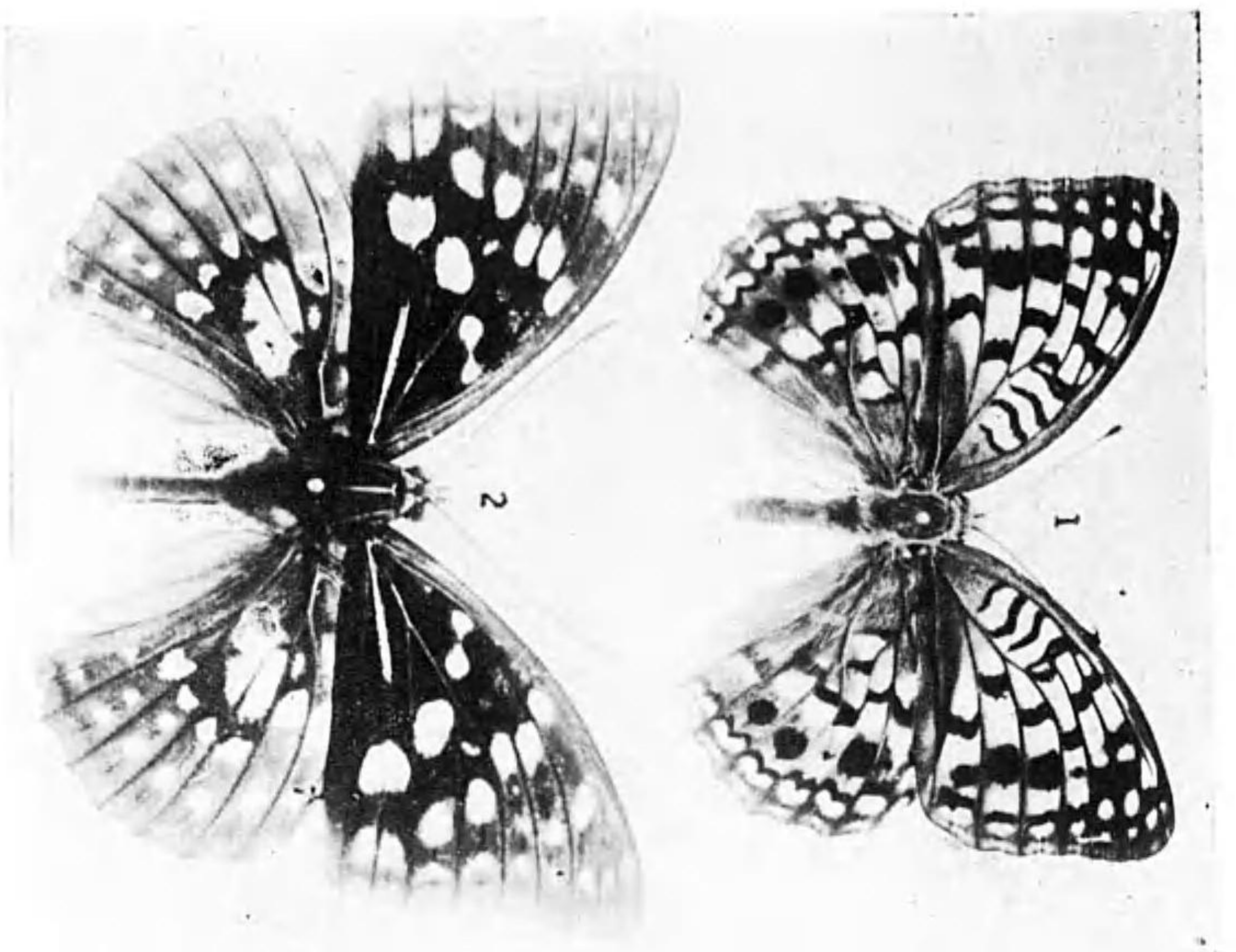
圖版第一

1. *Langia zenzeroides* var. *nawae* Roth. ♀ オオシモフリサメ

本邦産天蛾類の内最大のものであつて、容姿雄偉、手で捕へるとキチキチと啼く、肢爪が大變鋭い、早春梅樹附近の電灯に来る、幼蟲は梅の葉を食ひ、往々八寸前後にまで成長し、六月蛹化して土中にて越年する、箕面では一年一回の發生

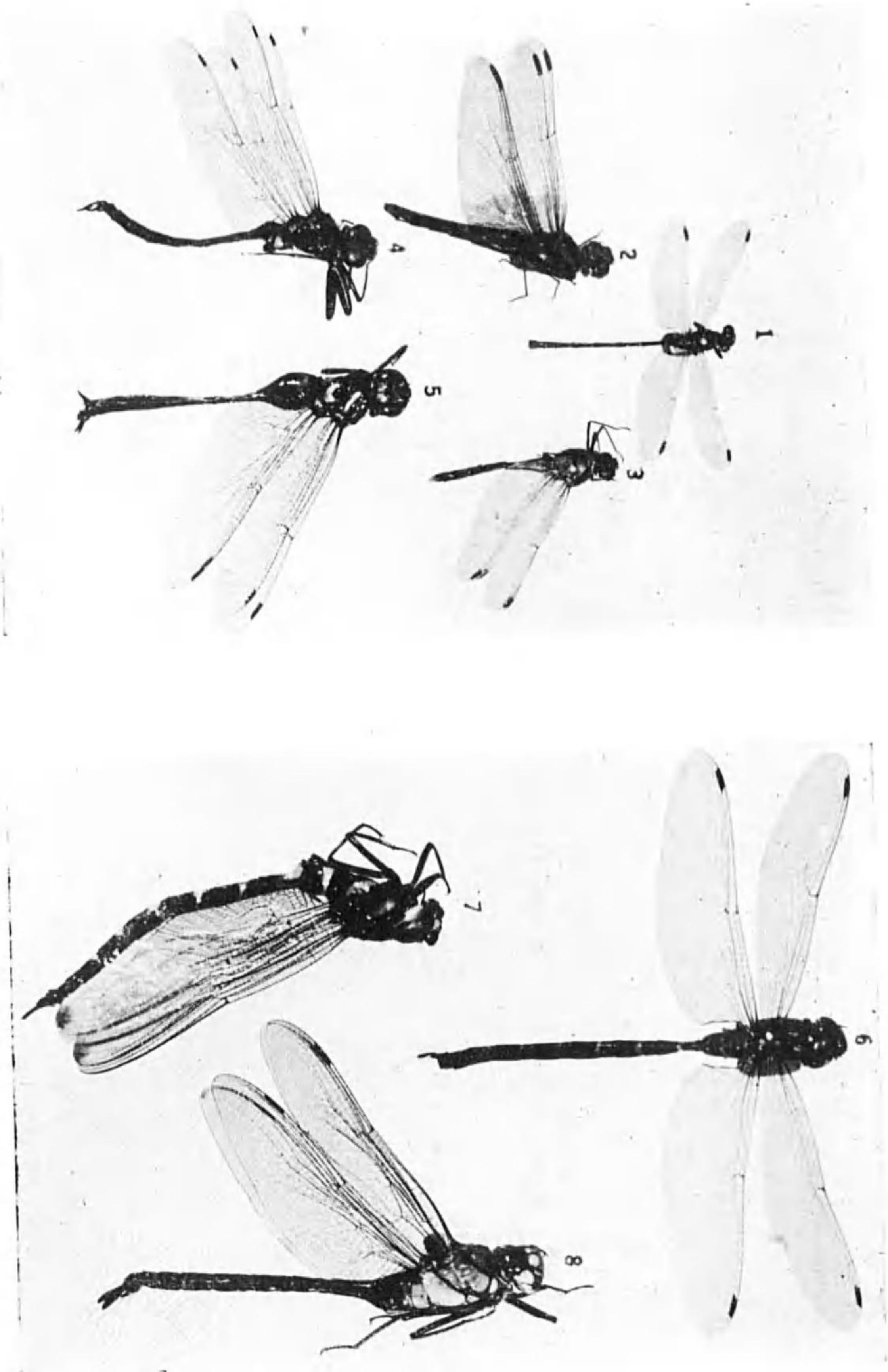
2. *Samia cynthia* var. *pryeri* Butler ♂ シンジュサン

當地方では決して稀ではないが、圖で見る如き美しい色斑は見る眼を喜ばす、此の蛾は雌を囫として雄を誘引する事の出来る面白い性質がある、幼蟲は梧桐、シンジュ、ヌルデ、キハダ等を食葉し、支那ではこれを飼育して絲を製し、柞蠶絲と混加して、所謂支那蠶綢を織るのに利用せられる



圖版第二

1. *Aglaia tau* var. *japonica* Leech. 平 エゾヨツメ
 晩秋、時には越年したものが早春に採れる可成珍しい蛾である、褐色の地に空色の紋四つを具へる、幼蟲は楓を食ふ。
2. *Rhodinia jankowski* Oberthur. ♀ クロウスタビ
 これは日本では指折りの稀種である、普通のウスタビガとは可成形なり、色なりに相異を認められる(松田良弘氏採集品)
3. *Brachmaea japonica* Butler. 平 イボタガ
 一名蜀江錦とも稱せられ、可成珍しい模様のある蛾であるが、箕面では最近珍らしからず陽春電灯に集るを見る、巻置薬用に供せらる、「いぼたのむし」は多くこれではなく、エビガラズメの幼蟲である事が多い
4. *Caligula boisduvali* var. *jonasi* Butler. ヒメヤママイ
 幼蟲は楓樹の害虫であるが成蛾は可成美しい、十、十一月頃澤山發生する



圖版第三

1. *Argynnis nerippe* Felder オオウラギンヘウモン
赤褐色の地に鮮やかな黒斑のある美しい蝶である、ヘウモンとは蓋し豹の紋の意、箕面では最近初めて発見した
2. *Sasakia charonda* Hewitson オオムラサキ
七八月頃榎木の梢に迅速に飛翔して捕へ難い、青葉にさまつて、靜かに紫の翅を開閉しておるのを空しく見る事が多い
3. *Zephyrus orientalis* Murrey オオミドリシジミ
金屬光澤を有する美しい蝶、夏日陽未だ高からぬ朝、一雌を中心に數雄が尾にキリキリ狂ひ廻る面白い性質がある
4. *Zephyrus signata* var. *quercivora* Staudinger 早ダイセンシジミ
最初は伯耆大山で発見せられたが最近の方々で捕へられる、箕面では今までに3雌採集せられたのみ、澁の木の中に生育して居る
5. *Zephyrus ibara* Butler 早ウラギンシジミ
關西では大山及大江山以外では從來発見せられなかつたのが、今年は又如何した廻り合せか2雌1雄が初めて捕られた、翅の裏が金泥をふり撒いた様な美しい蝶である
6. *Lybithea lepita celtoides* Fruhstorfer テンゲテフ
箕面名物と稱せられても決して名に背むかない程澤山發生する、頭部は前方に長く突起して天狗の名がある、前肢は退化に用を爲さない

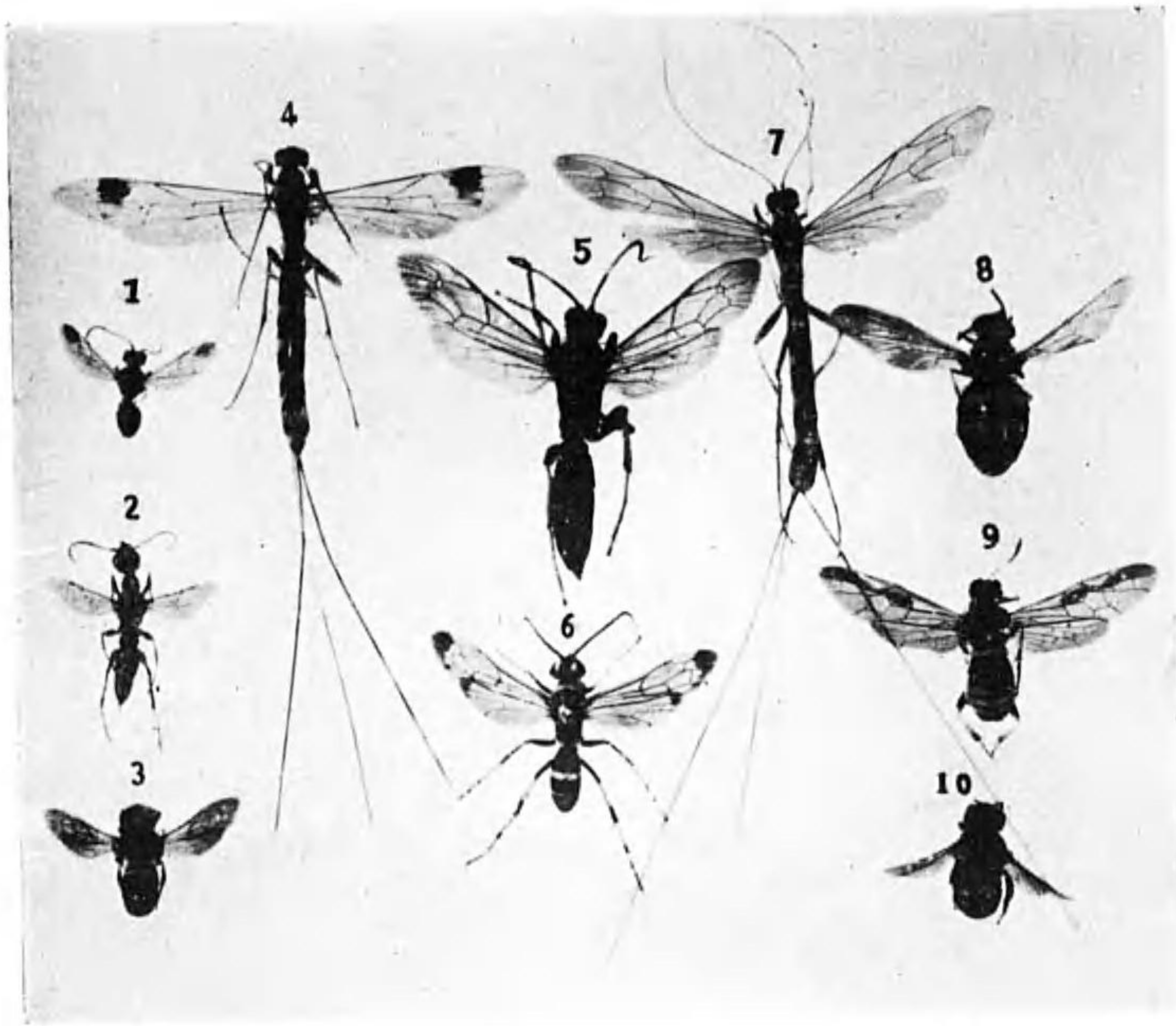


圖版第五

- | | | |
|-------------------------------|---|-----------|
| 1 Wilemania nitobei Matsumura | ♂ | ニトベエダシヤク |
| 2 Togaria suzukiana Matsumura | ♀ | ナカジロトガリバ |
| 3 Cerace orustana Walker | ♂ | ヒロウドハマキ |
| 4 Agrisius fuliginosus Moor | ♀ | ゴマフオオホソバ |
| 5 Myrteta angelica Butler | ♂ | クロミスエダシヤク |
| 6 Spilartia lewisi Butler | ♂ | クロフシロヒトリ |
| 7 Mormonia dula Bremer | ♀ | オニベニシタバ |

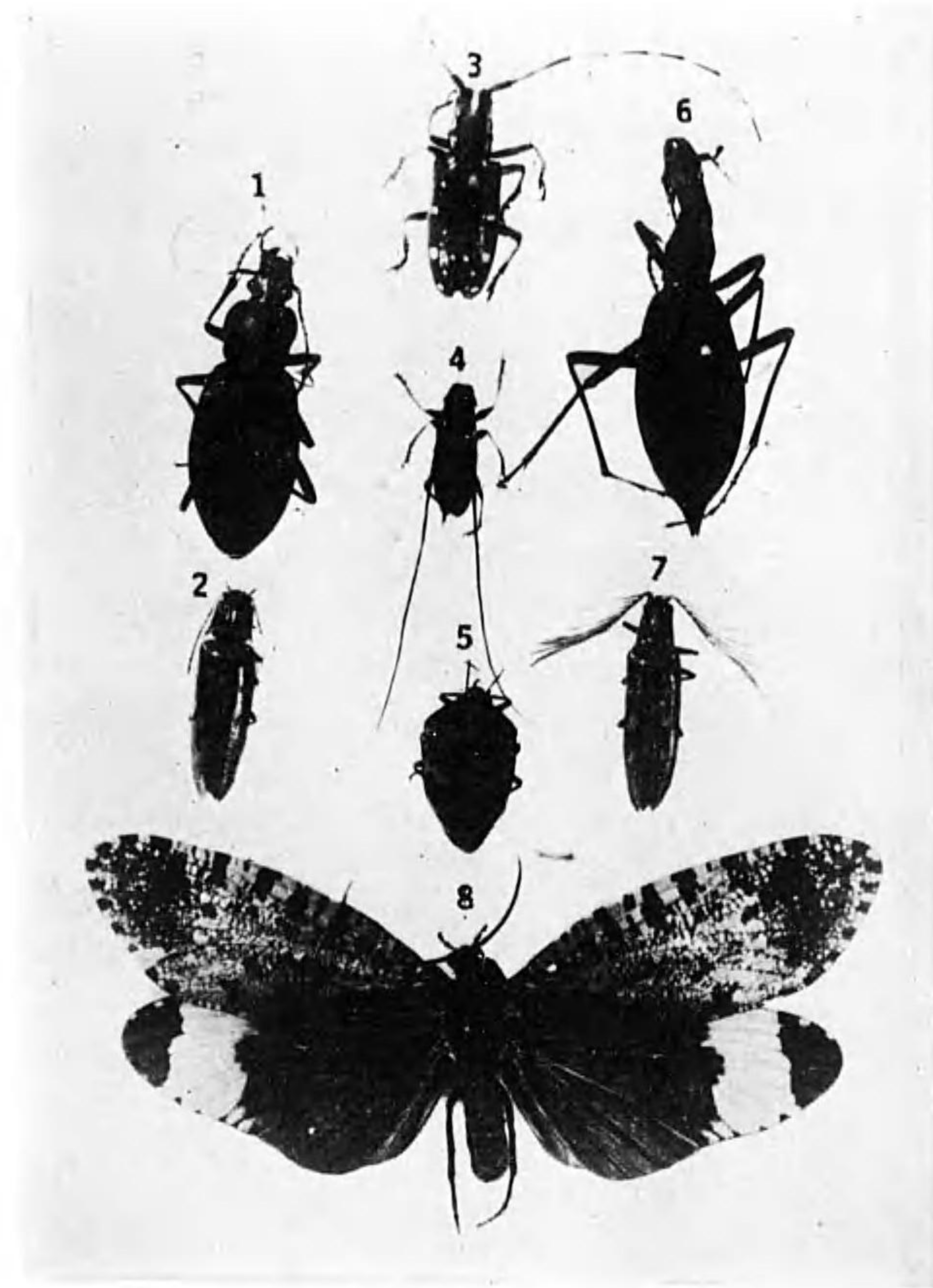
圖版第四

1. *Gomphus suzukii* Oguma ♂ フジロリナヘトンボ
 サナヘは早苗の意で六月種付頃に發生するによる、前胸側のY字紋と腹端の附屬部の白い
 のによつて他と區別せられる、これは此の類で一番繊細な姿をして居る
2. *Sympetrum grandis* Oguma ♂ ネキトンボ
 此のトンボはアカネの類でも大形種で翅の基部に赤褐色の大斑あり、箕面特産の稀種である
3. *Sympetrum kunkeri* Selys ♂ マイコアカネ
 マイコは舞妓の意、それに適はしく、顔蒼白く前額に眉墨の如き二黒點あり、腹部は鮮紅色、
 腹端に黄白色の附屬物ある可憐なる蜻蛉である
4. 5. *Samatechlora uchidai* Forster ♂ ♀ タカネトンボ
 體色青綠色にて金屬光澤を有し、他の蜻蛉類とは頗る異色ある風姿をして居る、箕面の如き
 淺い山間に産して高嶺の名を汚しつゝあり
6. *Austroaeschna milnei* Selys ♂ ミルンヤンマ
 瘡形の瀟灑な蜻蛉なり、深潭に臨んだ溪道に悠々として飛んで居るが容易には捕へ難い
7. *Boyeria machlachlani* Selys ♂ コシボソヤンマ
 夏日陽盛んなる頃、大空を吾物顔に横行して居るが他地では可成珍しい、黒褐色の腹に黄
 綠色の條斑がある
8. *Anax nigrofasciata* Oguma ♂ クロスアギヤンマ
 五月初夏の陽を浴びて新緑漸く濃くなる頃羽化、草綠色の胸側に黒條あり、腹部には空色の
 双紋を各節に具へる、箕面には可成多い



圖版第七

- | | | | |
|----|--|---|---------------|
| 1 | <i>Pocilegonalis fasciata</i> Strand | ♂ | キスツセアカハナバチモドキ |
| | var. <i>kibunensis</i> Uchida | | |
| 2 | <i>Ampulex amoena</i> Stål | ♀ | アカアシセナカアハナバチ |
| 3 | <i>Macgachile thoracica</i> Smith | ♂ | ネジロハギリバチ |
| 4 | <i>Thalessa japonica</i> Ashmead | ♀ | クロフヲナガバチ |
| 5 | <i>Protichnumon nakanensis</i> Matsumura | ♀ | ナカノヒメバチ |
| 6 | <i>Psammochares multipictus</i> Smith | ♂ | マダラベツコウ |
| 7 | <i>Thalessa citraria</i> Oliver | ♀ | エゾヲナガバチ |
| 8 | <i>Chrysotoxum grandis</i> Matsumura | ♂ | オオヒゲナガハナアブ |
| 9 | <i>Leptocimbex yorofui</i> Marlatt | ♂ | ヨウロウアシアトハバチ |
| 10 | <i>Anthidium japonicum</i> Smith | ♀ | トモンハナバチ |



圖版第六

- | | | | |
|---|---|---|------------|
| 1 | <i>Carabus (Leptocarabus) procerulus</i> Chaud. | ♀ | セナガクロオサムシ |
| 2 | <i>Pectocera fortunei</i> Candez | ♀ | ヒゲコメツキ |
| 3 | <i>Pascothea hilaris</i> Pascoe | ♂ | キボシカミキリ |
| 4 | <i>Monochamus subfasciatus</i> Bates | ♂ | ヒメヒゲナガカミキリ |
| 5 | <i>Poeilocoris lewisi</i> Distant | ♂ | アカスゲキンカメムシ |
| 6 | <i>Carabus (Damaster) oxuroides</i> Schaum | ♂ | ヒメマイマイカブリ |
| 7 | <i>Pectocera fortunei</i> Candez | ♂ | ヒゲコメツキ |
| 8 | <i>Eubasilissa regina</i> M'Lachlan | ♂ | ムラサキトビケラ |

箕面山植物目録
Flora of Minoo Park, Osaka, Japan.

1. Orchidaceae ラ ン 科

Calanthe discolor Lindl.	エビネ	全	溪	間
Cephalanthera erecta Blume	ギンラン (ハクサンラン)	溪		間
Cremastra mistrata A. Gray	サイハイラン (ハツクリ)	山		溪
Cymbidium virescens Lindl.	ホクロ (シユンラン)	全	溪	間
Epipactis longifolia Blume	スズラン (カキラン)	溪		間
Goodyera Schlechtendaliana Reichb. f.	ミヤマウヅラ (カモメラン)	全	溪	間
Liparis auriculata Blume	クモキリサウ (クモチリサウ)	同		上
Orchis rupestris Schltter.	ウテフラン (セキラン、コテフラン、 アリマラン、イハラン)	同		上
Platanthera Florenti Franch. et Sar.	ジンバイサウ (ミヅモラン)	同		上
P. interrupta Maxim.	オホバノトンボサウ	同		上
Spiranthes spiralis Mak.	モチヅリ (ネヂバナ、シンコバナ)	同	上	原野
Thrixspermum japonicum Reichb. f.	カヤラン			(樹上寄生) 湖
Tipularia japonica Matsum.	ヒトツボクロ	奥		道

2. Iridaceae ア ヤ メ 科

Iris japonica Thunb.	シヤガ	全	溪	間
---------------------------	-----	---	---	---

3. Dioscoreaceae ヤ マ ノ イ モ 科

Dioscorea japonica Thunb.	ヤマノイモ	同		上
D. nipponica Mak.	ウチハドコロ (カウモリドコロ)	同		上
D. quinqueloba Thunb.	カヘデドコロ (キクバドコロ)	同		上
D. Tokoto Mak.	オニドコロ (ナガドコロ)	同		上

4. Amaryllidaceae ヒ ガ ン バ ナ 科

Lycoris radiata Herb.	ヒガンバナ (マンジユシヤケ、シビトバナ、 シタマガリ、テンガイバナ)	同		上
L. sanguinea Maxim.	キツネノカミソリ	同		上

5. Liliaceae ユリ科

<i>Aletris spicata</i> Franch.	ソクシンラン	全溪間原野
<i>Allium nipponicum</i> Franch. et Sav.	ノビル	同上
<i>A. Thunbergii</i> Don	ヤマラツキヨウ (ヤマニラ)	同上
<i>Cardocrinum cordatum</i> Mak.	ウバユリ (カバユリ)	全溪間
<i>Chionogaphis japonica</i> Maxim.	シライトサウ	溪間
<i>Disporum sessile</i> D. Don	ハウチャクサウ	同上山溪
<i>D. smilacinum</i> A. Gray	チゴユリ	同上
<i>Helonoipsis japonica</i> Maxim.	シロバナシヤウジャウバカマ	同上
<i>H. orientalis</i> Koidz.	シヤウジャウバカマ	全溪間
<i>Hemerocallis fulva</i> L. var. <i>Kwanso</i> Hort.	ヤブクワンザウ (オニクワンザウ)	同上
<i>Hosta Sieboldiana</i> Engl.	タウギバウシ (オホバギバウシ)	同上
var. <i>longipes</i> Matsum.	イハギバウシ	同上
<i>Lilium Makinoi</i> Koidz.	ササユリ	同上
<i>L. Maximowiczii</i> Regel	コオニユリ (スゲユリ)	同上
<i>Liriope graminifolia</i> Bak.	ヤブラン	同上
<i>L. minor</i> Mak.	ヒメヤブラン	同上
<i>Metanarthecium luteo-viride</i> Maxim.	ノギラン (キツネノヲ)	同上
<i>Ophitopogon japonicus</i> Ker.	ジャノヒゲ (リュウノヒゲ)	同上
<i>O. planiscapus</i> Nak.	オホバジヤノヒゲ	同上
<i>Polygonatum falcatum</i> A. Gray	ナルコユリ (ワウセイ)	同上
<i>P. lasianthum</i> Maxim.	ミヤマナルコユリ	同上
<i>Reineckia carnea</i> Kunth	キチジャウサウ	同上
<i>Rhodea japonica</i> Roth.	オモト	山溪
<i>Scilla Thunbergii</i> Miyabe et Kudo	ツルボ (サンダイガサ)	全溪間原野
<i>Smilax China</i> L.	サルトリイバラ	同上
<i>S. japonica</i> A. Gray	サルマメ	山溪
<i>S. nipponica</i> Miq. var. <i>typica</i> Mak.	シホデ	全溪間
<i>S. Oldhami</i> Miq.	タチシホデ	同上
<i>S. Sieboldi</i> Miq.	ヤマカシユウ (サイコクバラ)	同上
<i>Tricyrtis japonica</i> Miq.	ヤマヂノホトトギス	同上
<i>T. macropoda</i> Miq.	ヤマホトトギス	同上

<i>Trillium apetalon</i> Mak.	エンレイサウ (タチアフヒ)	山溪
<i>Tulipa edulis</i> Bak.	アマナ (ムギヅワ井)	原野

6. Juncaceae 井科

<i>Juncus alatus</i> Franch. et Sav.	ハナビゼキシヤウ	全溪間
<i>J. pauciflorus</i> R. Br.	ホソ井	溪間
<i>J. prismatocarpus</i> R. Br. var. <i>Leschenaultii</i> Buch. subv. <i>pluritubulosus</i> Buch.	カウガイビキシヤウ	全溪間
<i>Luzula campestris</i> DC. var. <i>capitata</i> Miq.	スズメノヒエ (シバイモ)	同上
<i>L. plumosa</i> E. Mey.	スカボシサウ	同上

7. Commelinaceae ツユクサ科

<i>Ancilema Keisak</i> Hassk.	イボクサ	原野山地
<i>Commelina communis</i> L.	ツユクサ (バウシバナ、アラバナ)	溪間
<i>Pollia japonica</i> Thunb.	ヤブメウガ (メウガサウ)	瀧、溪間

8. Eriocaulaceae ホシクサ科

<i>Eriocaulon Sieboldianum</i> Sieb. et Zucc.	ホシクサ (ミヅタマサウ)	溪間
--	---------------	----

9. Araceae テンナンシヤウ科

<i>Acorus gramineus</i> Soland.	セキシヤウ	溪間山地
<i>Arisaema serratum</i> Schott. f. <i>Blumei</i> Mak.	マムシグサ	全溪間
<i>A. Thunbergii</i> Blume	ウラシマサウ	同上
<i>Pinellia tripartita</i> Schott	オホハンゲ	瀧

10. Cyperaceae カヤツリグサ科

<i>Carex breviculmis</i> R. Br. subsp. <i>Royleana</i> Kuek.	アラスゲ	全溪間原野
<i>C. Brownii</i> Tuck. var. <i>transversa</i> Kuek.	ヤハラスゲ	同上
<i>C. brunnea</i> Thunb.	ナキリスゲ	同上
<i>C. filipes</i> Franch. et Sav. var. <i>oligostachys</i> Kuek.	ムギスゲ	同上
<i>C. foliosissima</i> Franch.	ミヤマカンスゲ	全溪間
<i>C. forficula</i> Franch. et Sav.	タニガハスゲ	同上

C. gibba Wahl	マスクサ	全	溪	間
C. incisa Boott	カハラスゲ (タニスゲ)	同		上
C. ischnostachya Steud.	ジユズスゲ	同		上
C. japonica Thunb.	ヒゴクサ	同		上
var. aphanolepis Kuek.	エナシヒゴクサ (サハスゲ)	同		上
var. chlorostachys Kuek.	シラスゲ	同	上	原野
C. pachygya Franch. et Sar.	ササノハスゲ	全	溪	間
C. planata Franch. et Sar.	タカネマスクサ (オホヤブスゲ)	同		上
C. pruinosa Boott.	ガウソ	同	上	原野
C. pseudo-conica Franch. et Sar.	オホイトスゲ (ハヒスゲ)	全	溪	間
C. rara Boott var. biwensis Kuek.	マツバスゲ	同		上
C. Reini Franch. et Sar.	コカンスゲ (ナンブスゲ)	同		上
C. rhizopoda Maxim.	シラコスゲ	同		上
C. tristachys Thunb.	モエギスゲ	同		上
Fimbristylis miliacea Vahl	ヒデリコ	同	上	原野
F. sub-bispicata Nees et Mey.	ヤマ井 (タマ井)	全	溪	間
Kyllingia brevifolia Rottb.	ヒメクグ	同		上
Scirpus cyperinus Kunth var. concolor Mak.	アブラガヤ	同		上

11. Gramineae イ 禾 科

Agropyrum semicostatum Nees	カモジグサ	同		上
Agrostis perennans Tuck.	スカボ (ヤマスカボ)	同		上
Andropogon violascens Nees	ヒメアブラガヤ	同		上
Arthraxon cryptatherus Koidz.				
var. ciliaris Koidz.	コブナグサ (ハチヂヤウカリヤス)	同		上
Arundinella hirta Koidz. var. ciliata Koidz.	トダシバ (マレンシバ)	同	上	原野
Asprella sibirica Trautv. var. longearistata Hack.	アヅマガヤ	同		上
Brachypodium japonicum Miq.	ヤマカモジグサ (ヤマカヅラ)	全	溪	間
Bromus japonicus Thunb.	スズメノチヤヒキ	同	上	原野
B. pauciflorus Hack.	キツネガヤ	同		上
B. unioloides H. B. et K.	イヌムギ (オニムギ)	(歸化)		原野
Calamagrostis arundinacea Roth. var. sciuroides Hack.	...	サイトウガヤ	全	溪	間原野
C. Epigeios Roth.	ヤマアハ	同		上
Chaetochloa chondrachne Honda	イヌアハ (トラノヲ)	同		上

C. lutescens Stuntz. var. genuina Honda	キンエノコロ	原		野
C. viridis Scribn. var. genuina Honda	エノコログサ	同		上
var. purpurascens Honda	ムラサキエノコロ	同		上
Cymbopogon Goeringii Honda	ヲガルカヤ	同		上
Diplachne serotina Link. var. aristata Hack.	テウセンガリヤス	同		上
Eccoilopus cotulifer A. Cames	アブラススキ	同		上
Eragrostis ferruginea Beauv.	カゼクサ	同		上
E. major Host	スズメガヤ	同		上
Festuca Myuros L.	ナギナタガヤ	(歸化)	同	上
F. ovina L.	ウシノケグサ (ギンシンサウ)	全	溪	間原野
F. parvigluma Steud.	トボシガラ	同		上
Glyceria tonglensis Clarke	ドゼウツナギ	同		上
Isachne globosa O. Kuntze	チゴザサ	同		上
Koeleria cristata Pers.	ミノボロ	同		上
Lophatherum gracile Brong.				
var. elatum Hack.	ササクサ (ササノハグサ)	同		上
Melica nutans L.	コメガヤ	同		上
Miscanthus japonicus Anders.	トキハススキ (カンススキ)	原		野
M. sinensis Anders.	ススキ (ヲバナ、カヤ)	全	溪	間同上
Muehlenbergia ramosa Mak.	キダチノネズミガヤ	同		上
Oplismenus japonicus Honda	コチヂミザサ	全	溪	間
Panicum bisulcatum Thunb.	スカキビ	同	上	原野
Phleum asperum Vill. var. japonicum Hack.	コアハガヘリ	同		上
Pleioblastus Simoni Nak.	メダケ (ニガダケ)	全	溪	間
P. variegata Mak. var. viridis Mak. f. glabra Mak.	ネザサ	同		上
f. pubescens Mak.	ケネザサ	同		上
Poa acroleuca Steud.	ミゾイチゴツナギ	同		上
P. annua L.	スズメノカタビラ (イチゴツナギ)	同		上
P. Matsumurae Hack.	イトイチゴツナギ	同		上
P. nipponica Koidz.	オホイチゴツナギ (オホニラミグサ)	原		野
Pollinia nuda Trin.	ササガヤ	全	溪	間
P. Willdenowiana Benth.	アシボソ (ヒメアシボソ)	全	溪	間原野
Polypogon Higeaweri Steud.	ヒエガヘリ	同		上
Pseudosasa japonica Mak.	ヤダケ (シノベ、ヤジノ)	溪		間

<i>Sasa nipponica Mak. et Shibata</i>	ミヤコザサ	全	溪	間
<i>Shibatata Kumasasa Mak.</i>	オカメザサ (ブンゴザサ、ゴマイザサ)	溪		間
<i>Sporoborus elongatus R. Br.</i>	ネズミノヲ	同		上
<i>Trisetum flavescens Beauv. var. bifidus Mak.</i>	カニツリグサ	同	上	原野
<i>Zizania latifolia Turcz.</i>	マコモ	同		上

12. Sparganiaceae ミクリ科

<i>Sparganium ramosum Huds.</i>				
subsp. <i>stoloniferum Graebn.</i>	ミクリ	山	溪	池 中

13. Compositae キク科

<i>Adenocaulon bicolor Hook.</i>				
var. <i>adhaerescens Mak.</i>	ノブキ (ザゼンサウ)	街		道
<i>Adenostemma viscosum Forst</i>	スマダイコン (サハタタラビ)	同		上
<i>Artemisia Keiskeana Miq.</i>	イスヨモギ	溪	間	原野
<i>A. vulgaris L. var. indica Maxim.</i>	ヨモギ	同		上
<i>Aster ageratoides Turcz.</i>				
var. <i>adustus Nak.</i>	ノコンギク	同		上
var. <i>semiamplexicaulis (Mak.)</i>	イナカギク	全	溪	間
<i>A. Laulureanus Franch.</i>	ヨメナ (ヲハギ)	全	溪	間 原野
<i>A. leiophyllus Franch. et Sav.</i>	ヤマシロギク (シロヨメナ)	全	溪	間
<i>A. Savatieri Mak. var. hortorum Mak.</i>	ノシユンギク (アヅマギク)	溪		間
var. <i>pygmaea Mak.</i>	シンジュギク (イハコギク、ヒメシユンギク)	同		上
<i>A. scaber Thunb.</i>	シラヤマギク	全	溪	間
<i>A. subulatus Michx.</i>	ハハキギク	歸		化
<i>Atractylis lyrata Sieb. et Zucc.</i>	ヲケラ (ウケラ)	全	溪	間
<i>Bidens pilosa L.</i>	コセンダングサ	原		野
<i>Cacalia delphinifolia Sieb. et Zucc.</i>	モミヂガサ (モミヂサウ)	全	溪	間
<i>Carpesium abrotanoides L. var. Thunbergianum Mak.</i>	ヤブタバコ	同		上
<i>C. cernuum L.</i>	サジガングビサウ	同		上
<i>C. divaricatum Sieb. et Zucc.</i>	ガングビサウ	同		上
<i>C. glossophyllum Maxim.</i>	コヤブタバコ	同		上

<i>Centipeda minima O. Kuntze</i>	トキンサウ (ハナヒリグサ)	全	溪	間
<i>Chrysanthemum Makinoi Matsum. et Nak.</i>	リウノウギク (ヤマギク)	同		上
<i>Cirsium Buergeri Miq.</i>	ヒメヤマアザミ	同		上
<i>C. Maackii Maxim. var. intermedium Nak.</i>	ノアザミ (コアザミ)	同	上	原野
<i>C. spicatum Matsum.</i>	ヤマアザミ (オニアザミ)	同		上
<i>Crepis japonica Benth.</i>	オニタビラコ	全	溪	間
<i>Eclipta alba Hassk.</i>	タカサブラウ	溪	間	原野
<i>Erigeron annuus Pers.</i>	ヒメヂヨラン (イスヨメナ)	歸		化 (同上)
<i>E. canadensis L.</i>	ヒメムカシモギ	同		上
<i>Eupatorium Fortunei Turcz. var. dissectum Nak.</i>	キクバヒヨドリバナ	全	溪	間
var. <i>simplicifolium Nak.</i>	ヒヨドリバナ	同		上
<i>E. Lindleyanum DC.</i>	サハヒヨドリ	同		上
<i>Gerbera Anandria Sch. Bip.</i>	センボンヤリ (ムラサキタンポポ)	同		上
<i>Gnaphalium japonicum Thunb.</i>	チチコグサ	溪	間	原野
<i>G. multiceps Wall.</i>	ホウコグサ (オギヤウ、ハハコグサ)	同		上
<i>Hemistepta carthamoides O. Kuntze</i>	キツネアザミ (ヒメアザミ)	奥		道
<i>Hieracium Kramerii Franch. et Sav.</i>	ス井ラン	溪	間	原野 湿地
<i>Inula salicina L.</i>	カセンサウ	溪		間
<i>Lactuca debilis Benth. et Hook. f.</i>	ヂシバリ (ツルニガナ)	全	溪	間
<i>L. dentata Mak. var. Thunbergii Mak.</i>	ニガナ	同		上
<i>L. denticulata Maxim. var. typica Maxim.</i>	ヤクシサウ	同		上
f. <i>pinnatipartita Mak.</i>	ハナヤクシサウ	同		上
<i>L. laciniata Mak.</i>	アキノノゲシ	同		上
f. <i>indivisa Mak.</i>	ホソバノアキノノゲシ	同		上
<i>L. Raddeana Maxim.</i>	ヤマニガナ	同		上
<i>L. stolonifera Benth. et Hook. f.</i>	イハニガナ (ヒメヂシバリ)	同		上
<i>Lapsana apogonoides Maxim.</i>	タビラコ (コオニタビラコ、春の七草のホトケノザ)	同		上
<i>L. humilis Mak.</i>	ヤブタビラコ	同		上
<i>Pertya glabrescens Sch. Bip.</i>	ナガバノカウヤバハキ	同	上	山地
<i>P. scandens Sch. Bip.</i>	カウヤバハキ (バイカウハグマ)	同		上
<i>Petasites japonicus Miq.</i>	フキ	全	溪	間
<i>Picris hieracioides L. var. japonica Regel</i>	カウゾリナ	溪	間	原野
<i>Rhynchospermum verticillatum Reinw.</i>	シウブンサウ	全	溪	間

Saussurea japonica DC.ヒメヒゴタイ	奥	道
S. ussuriensis Maxim.キクアザミ(イタチアザミ)	同	上
Senecio nikoensis Miq.サハギク(ボロギク)	全	溪 間
Serratula deltoides Mak.			
var. palmatopinnatifida Mak.キクバヤマボクチ	同	上
S. excelsa Mak.ハバヤマボクチ	同	上
Siegesbeckia glabrescens Mak.コメナモミ	溪	間 原 野
S. pubescens Mak.メナモミ	原	野
Solidago Virgaurea L.アキノキリンサウ(アハダチサウ)	全	溪 間
Sonchus oleraceus L.ノゲシ(ケシアザミ, ハルノノゲシ)	溪	間 原 野
Taraxacum japonicum Koidz.クワンセイタンポポ	同	上
Xanthium Strumarium L.ヲナモミ	同	上

14. Campanulaceae キキヤウ科

Adenophora remotiflora Miq.ソバナ(マルバシヤジン)	街	道
A. verticillata Fisch.			
var. typica Regelツリガネニンジン(トトキニンジン)	全	溪 間
var. typica Mak.ホタルブクロ(ツリガネサウ, チヤウチンバナ)	街	道
Campanula punctata Lam.			
var. typica Mak.ツルニンジン	全	溪 間
Codonopsis lanceolata Benth. et Hook. f.ツルニンジン	全	溪 間
C. ussuriensis Hensl.バアソブ	同	上
Lobelia radicans Thunb.ミゾカクシ(ハタケムシロ, カラクサ, アゼムシロ)	同	上 全 溪 間 濕 地
L. sessilifolia Lamb.サハギキヤウ(チヤウジナ)	原	野 濕 地
Peracarpa carnosus Hook. f. et Thoms.タニギキヤウ(ユキノシタ)	全	溪 間 濕 地
Platycodon grandiflorum A. DC.キキヤウ	全	山 地

15. Cucurbitaceae ウリ科

Actinostemma lobatum Maxim. var. racemosum Mak.ゴキヅル	全	溪 間
Gynostemma pentaphyllum Mak.アマチャヅル	同	上
Trichosanthes japonica Regelキカラスウリ	同	上

16. Dipsacaceae マツムシサウ科

Dipsacus japonicus Miq.ナベナ	街	道
-------------------------	----------	---	---

17. Valerianaceae ラミナヘシ科

Patrinia scabiosaefolia Link.ヲミナヘシ(チメグサ, ヲミナベシ)	全	溪 間
P. villosa Juss.ヲトコヘシ(オホツチ)	同	上
Valeriana flaccidissima Maxim.ヤマカノコサウ(ツルカノコサウ)	同	上 濕 地

18. Adoxaceae レンブクサウ科

Adoxa Moschatellina L.レンブクサウ(ゴリンバナ)	山	溪
------------------------	--------------------	---	---

19. Caprifoliaceae スヒカヅラ科

Abelia serrata Sieb. et Zucc.			
var. Buchwaldii Nak.キバナツクバネウツギ	全	溪 間
A. spathulata Sieb. et Zucc.ツクバネウツギ	同	上
Diervilla floribunda Sieb. et Zucc.ヤブウツギ	同	上
D. hortensis Sieb. et Zucc.タニウツギ	同	上
Lonicera gracilipes Miq. var. genuina Mak.ヤマウグヒスカグラ	同	上
L. japonica Thunb.スヒカヅラ(ニンドウ, ベニバナスヒカヅラ)	同	上
L. tenuipes Nak.ミヤマウグヒスカグラ	同	上
Sambucus Sieboldiana Blume			
var. typica Nak.ニハトコ(タヅノキ, キタヅ, コモウツギ)	同	上
Viburnum dilatatum Thunb. f. pilosulum Nak.ガマズミ	同	上
V. erosum Thunb. var. punctatum Franch. et Sar.コバノガマズミ	同	上
V. phlebotrachum Sieb. et Zucc.ヲトコヨウヅメ(コネソ)	同	上
V. Sieboldii Miq.ゴマギ(ゴマシホヤナギ)	同	上
V. tomentosum Thunb.ヤブデマリ(ヤマデマリ)	同	上

20. Rubiaceae アカネ科

Damnacanthus indicus Gaertn. f.			
var. lancifolius Mak.ホソバジユズネノキ	山	地
Galium Aparine L.ヤヘムグラ	全	溪 間
G. brachypodium Maxim.キクムグラ(マルバノヨツバムグラ)	同	上
G. gracilens Mak.コバノヨツバムグラ(ヒメヨツバムグラ)	同	上
G. pseudo-asprellum Mak.オホバノヤヘムグラ	同	上
G. setuliflorum Mak. var. setuliflorum Mak.ヤマムグラ	同	上

G. verum L. var. lacteum Maxim. f. lacteum Mak. ...	カハラマツバ	溪間原野
var. typicum Maxim.	キバナノカハラマツバ	原野
Michella repens L. var. undulata Mak.	ツルアリドホシ	全溪間
Oldenlandia hirsuta L. f.	ハシカグサ	同上
Paederia chinensis Hance	ヤイトバナ (ヘクソカヅラ、サヲトメカヅラ)	同上
Rubia cordifolia L. var. Mungista Miq.	アカネ	同上

21. Plantaginaceae オホバコ科

Plantago major L. var. asiatica Deene.	オホバコ	同上
---	------	----

22. Phrymaceae ハヘドクサウ科

Phryma leptostachya L.	ハヘドクサウ(ハヘトリグサ)	街道
-----------------------------	----------------	----

23. Acanthaceae キツネノマゴ科

Dicliptera japonica Mak.	ハグロサウ(メゴシツ)	溪間
Hygrophila lancea Miq.	ヲキノツメ	溪間原野湿地
Justicia procumbens L.	キツネノマゴ(カグラサウ)	全溪間

24. Bignoniaceae ノウゼンカツラ科

Catalpa ovata G. Don	キササゲ	(歸化) 溪間
---------------------------	------	---------

25. Scrophulariaceae コマノハグサ科

Dopatrium junceum Ham.	アブノメ(パチパチグサ)	原野湿地
Limnophila sessiliflora Blume	キクモ	同上
Mazus japonicus O. Kuntze	トキハハゼ(ナツハゼ)	溪間原野
M. stolonifer Mak.	サギゴケ(ハゼナ)	同上
Mclampyrum japonicum Nak. var. genuinum Nak.	ママコナ	山地
Monochasma Sheareri Maxim.		
var. japonicum Maxim.	クチナシグサ(カガリビサウ)	同上
Phtheirospermum japonicum Kanitz	コシホガマ	同上
Siphonostegia chinensis Benth.	ヒキヨモギ	同上
S. japonica Furumi	オホヒキヨモギ	同上

Veronica Anagallis L.	カハヂサ	溪間原野湿地
V. arvensis L.	タチイヌフグリ	(歸化) 溪間原野

26. Solanaceae ナス科

Lycium chinense Mill.	クコ	全溪間
Physalisstrum echinatum Mak.	イガホホヅキ	同上
P. Savatieri Mak.	アヲホホヅキ	同上
Solanum lyratum Thunb.	ヒヨドリジャウゴ(ホロシ、ツツラコ)	同上
S. nigrum L.	イヌホホヅキ(ウシホホヅキ、ヤマホホヅキ)	同上
S. nipponense Mak.	ヤマホロシ(ホソバナノホロシ)	同上
Tubocapsicum anomalum Mak.	ハダカホホヅキ	同上

27. Labiatae シリ科

Agastache rugosa O. Kuntze	カハミドリ	全溪間
Ajuga decumbens Thunb.	キラソウ(チゴクノカマノフタ)	同上
A. nipponica Mak.	ジフニヒトヘ	同上
A. yezoensis Maxim.	ニシキゴロモ(キンモンサウ)	同上
Brunella vulgaris L.	ウツボグサ	同上原野
Chelonopsis longipes Mak.	タニジャカウサウ	山溪
Clinopodium chinensis O. Kuntze	クルマバナ	全溪間
C. gracile O. Kuntze	タフバナ	同上
C. sachalinense Koidz.	ミヤマタフバナ	同上
Comanthosphace stellipila S. Moore	ミカヘリサウ	同上
Elscholtzia Patrini Gareke	ナギナタカウジユ	同上
Lamium album L.		
var. barbatum Franch. et Sav. ...	ヲドリコサウ(ヲドリサウ)	同上
L. amplexicaule L.	ホトケノザ	同上原野
Leonurus sibiricus L.	メハジキ(ヤクモサウ)	同上
Loxocalyx ambiguus Mak.	マネキグサ(ヤマキセワタ)	山溪
Lycopus angustus Mak.	ヒメシロネ	全溪間
Meehania urticifolia Mak.	ラシヤウモンカヅラ	同上
Mentha arvensis L. var. vulgaris Benth.	ハクカ(メグサ)	同上原野
Mosla punctulata Nak.	イヌカウジユ	同上
Nepeta Glechoma Benth.	カキドホシ(カントリサウ)	同上